349
152

部

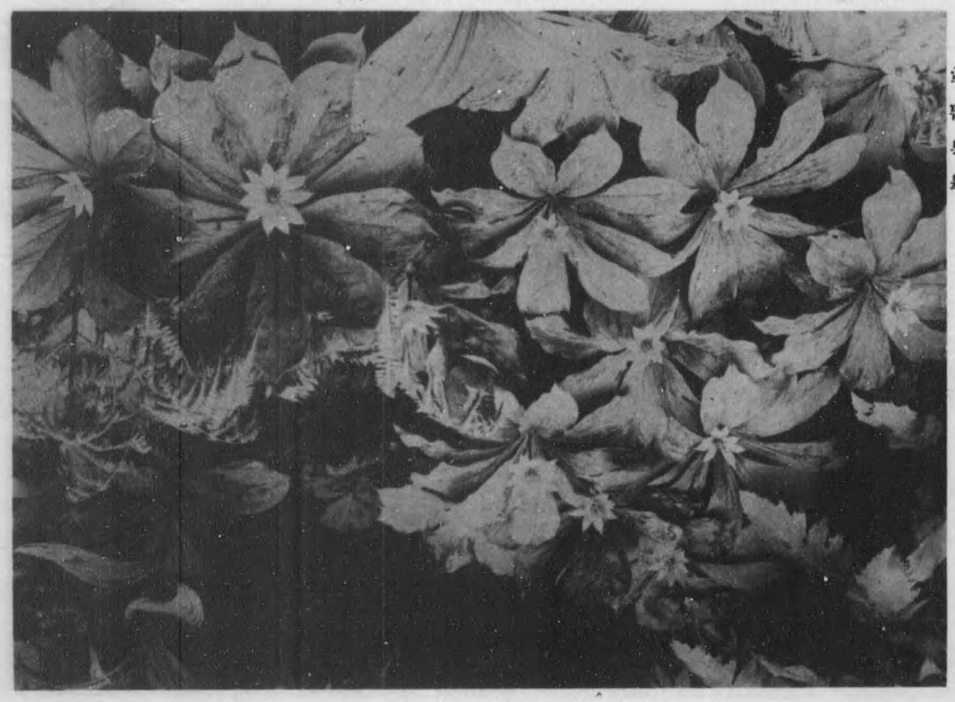
十三雜咏

大正
2.9.12
内交

349-152

晩霞氏筆

大町附近の晩春



（物産山島）　草　翌　衣

石崎光瑤氏筆

合戸峠ヨリ御嶽ヲ望ム

Preface

It is no less a privilege than a pleasure to be invited to play the part of sponsor to this charming and important volume. Probably no Japanese mountaineer is more fully qualified than my friend Mr Shimura to speak with authority on the Japanese Alps, both as a climber and a botanist, for no one has more completely "entered into the treasures of the snow" and penetrated within the inner sanctuaries of their romantic fastnesses, thanks.

It will be a great satisfaction to many mountaineers in this country to feel that at last the epoch-making classic of Edward Whymper — "Scrambles among the Alps" is followed by a worthy successor dealing with the high mountain regions of the "Land of the Rising Sun."

Since the Alpine Club was founded in England 45 years ago, its family has been steadily growing, and although the Japanese daughter is one of its latest-born, it is nevertheless one of its most energetic and promising children. In this close relationship of these two leading mountaineering Clubs of the West and the East, the oldest and the youngest, we have a worthy symbol of the Anglo-Japanese Alliance itself — a mutual effort after the highest and best ideals.

when in our wanderings among the great mountains we have been lifted up in spirit from the trials and toils of earth, into the purer atmosphere of Heaven itself, as we have taught to recognize in their grandeur and their grace the truth that Milton sang—

"These are Thy works, Parent of good, Almighty!
Thine this universal frame so wondrous fair, Thyself how wondrous then!
Unspeakable, Who sitest above the heavens, to us invisible
Or dimly seen in these Thy lowest works.
Yet these declare Thy goodness beyond thought and power divine!

Walter Weston

In "Sen-zan Ban-Gaku" it will be seen how varied and extensive has been the work of exploration of Mr Shimura and his Colleagues, and I feel sure that this handsome record of their activities will serve to greatly stimulate the enthusiasm of the rising generation of Japanese mountaineers among those beautiful valleys and romantic peaks which have for many years been so dear to the heart of the present writer.

In them may be felt that devotion to Nature so nobly expressed by the great Master of interpretation of its loveliness, Ruskin, when he wrote:

"How many deep sources of delight are gathered into the compass of their glens and vales, and how the whole heart of Nature seems thirsting to give, and still to give, shedding forth her everlasting beneficence with a profusion so patient, so passionate, that our utmost observance and thankfulness are but, at last, neglects of her nobleness and apathy to her love"

("Modern Painters", Book IV).

In commending this volume to the attention of my fellow members of the Japanese Alpine Club, and to the general public, I do so with all the more confidence, because I know it will recall to many of them some of the happiest days and the highest pleasures of our lives,

序

この樂しく且つ重要なる書冊に教父(スポンソル)の役目を演ずる爲に請座(しようざ)されたることは、愉快よりも殆んど特權なり。

おそらく日本の如何なる山岳家も、登山家として將た植物家として、両ながら日本アルプスに就いて權威(オーソリティ)を以て語ることを得るは、吾が友人志村氏に勝りて適任なる者はあらざるべし、如何となれば何人も君以上に完全に「雪の寶庫」に入り、且つローマンチックなる城廓の内的靈廟に透徹したる者あらざるべければなり。

此國に於ける幾多の山岳家、は遂に エドワード、ワイムパアの時代を劃せる名品(クラシック)「アルプス山中攀登記」が「朝日出づる國」の高山地方に取材せる價値ある繼承に依りて、跟隨されたることを感ずるは、大なる滿足なるべし。

四十五年以前、山岳會が英國に建設されて以來、その家族は健全に生長したりき、たとひ日本の娘は其最晩に誕生したる一人なりとするも、最も活潑に未來ある群兒の一なり、この西と東と最老と最若と、是等主要なる二個山岳會の密接なる親族關係に於て、吾人は最高最善の理想を追へ

る相互の事業……日英同盟それ自身の價値ある象徴を見る。

「千山萬岳」にては、志村氏及その同志者の探檢事業が、いかに變化あり且つ廣大なるかを覗はるべく、此美麗なる彼等活動の記錄書が、多年の間本序文筆者の心に、さばかり貴かりし絢美なる谷とローマンチックの峰の中へと、日本山岳家青年時代の熱心を刺戟するに資すること大なるは確なるべしと思ふ。

是等の山谷に於ては、自然美通譯の巨匠なるラスキン氏によりて、さばかり氣高く言明されたる「自然」に對する崇敬を感じ得らるべし、ラスキンは記しき、

いかに、愉樂の多くの深き源泉が、その峻谷及び峽澗のコムバスに集合したるか、しかしていかに……自然が全心を擧げて與ふるに渴するかに見え、又猶與へつゝあるかは、辛抱强く且つ熱情的の潤澤を以て、彼女（自然）の無盡藏なる恩惠を傾注せるため、吾人の非常なる觀察も感謝も、竟には彼女の高貴を忘却し、且つ彼女の愛に無頓着なるに至る。

「近世畫家」第四卷

本書を日本山岳會員及び一般公衆の注意の許に推薦するに當り、余は猶一層の信憑を以て之を爲す所以は、吾人が大山岳を彷徨して地上の困難と辛酸より、精神上更に純粹なる天國それ自らの

霧圍氣に擡げ了せられたるときの、吾人生活の最幸福なる日又最高尚なる快樂の或ものを彼等の多くに喚起すべきことを知ればなり。ミルトンが謠ひたる眞理をその山谷の壯大と典雅とより認識することを敎へられたる如く

かゝるは、善と全能の親なる、爾の勞作なり、
爾がものせるこの宇宙の枠（註山岳）の、さばかり駭くべき美くしさを見れば、
さらば、爾自らこそは、
天の上に座したまふて、我等には見えもせず、
語りもあえず、あるは又、爾のいと卑しき勞作にて、おぼろに窺ふのみながら、
いかに駭くべく在はするよ、
しかも、是等は神明の思慮と力以外に、
爾の善行を宣りたまふ。

ウオルター　ウエストン

例言

一、明治四十年前田曙山氏と共に登山の氣風を作興せんとして「やま」の一篇を發表せり、幸に江湖に歡迎せられ三たび版を重ね、近來登山熱非常に勃興し、日本アルプス地方の峰頭笠影相望み、無人の幽溪鞋痕狼籍たり、著者等衷心快感を禁ずる能はず。

「やま」以後の登山記及び其の他山岳に關する數篇を蒐めて山千萬岳の一卷成る、不文もとより大方の高覽に供すべきにあらねど全篇現代山岳狂の手に成れる者、登山家の侶伴となり登山の氣風を鼓吹することを得ば實に著者の幸之れに過ぎたるはなし。

一、本書題して千山萬岳と云ふも、內容は主として本邦中部に蟠屈する高山峻嶺に關する者なり、若し幸にして江湖の迎ふるところとならば、續篇續々篇を出して名實相反することなき者たらしめんことを期す。

一、序文は、二十年來本邦高山を跋涉せる日本アルプスの著者英國長老ウォーター ウェストン氏を煩はせり氏は直に快諾せられ拙著に一段の光彩を添へられたるは深く感謝するところなり。

一、挿畫は、曩に歐洲アルプス寫生旅行を企てられし山岳畫家丸山晩霞氏、文部省展覽會に薫風を出品して喝采を博されたる京都畫家石崎光瑤氏、登山畫家榎谷徹藏氏等の手に成れり、謹で

諸氏の好意の感謝す。

一、寫眞は、日本山岳會を主幹さるゝ高頭式氏、高野鷹藏氏、辻村伊助氏の逸品を寄せられたる者、謹で諸氏の好意を感謝す。

一、山岳高度表は、陸地測量部柴崎芳太郎氏が山岳會に寄せたる者轉載を諾されたるを深謝す。

一、本書の出版に關し直接間接に幾多盡力せられし、丸山晩霞氏、小島烏水氏、高頭式氏、高野鷹藏氏に深謝し、併せて嵩山房主が、出版、印刷、裝釘等に熱心周到なる注意を拂はれたるを感謝す。

大正二年八月

鳥嶺誌す

千山萬岳

目次

木曾の御嶽及駒ヶ嶽 …… 一

一、よし御嶽は俗了すとも無限の秋風に浴して古驛の雨に泣かんかな　二、木曾の古道　三、木曾街道　四、飛驒山脈の雄渾　五、鮮麗なる木曾山系　六、深山幽渓　七、鬱蒼たる木曾森林　八、木曾渓の美　九、發程　一〇、洗馬より奈良井　一一、奈良井驛　一二、鳥居峠　一三、薮原驛　一四、義仲の舊里　一五、福島驛　一六、合渡峠　一七、黒澤の谷　一八、松尾瀧　一九、喬木帶　二〇、七合目　二一、女人堂　二二、覺明堂　二三、二ノ池　二四、裏山道　二五、絶頂　二六、御嶽火山の活動　二七、奥の院　二八、田ノ原　二九、清瀧　三〇、氷ヶ瀧　三一、崩し越え　三二、常盤橋　三三、菖蒲床　三四、駒ヶ根村德原　三五、德原の一　三六、德原の二　三七、滑川の畔　三八、喬木帶　三九、鐘懸け小舍　四〇、遠見場　四一、玉の窪の小舍　四二、エーデルワイス　四三、絶頂　四四、鷹ヶ池　四五、雷雨　四六、霧中の彷徨　四七、悽愴の一夜　四八、下山

高原の雨、峠の霜 …… 六四

一、御代田驛　二、大久保橋　三、覆面の淺間　四、原頭の鷄鳴　五、「左イセ」　六、一に追分

七、敗殘の古驛　八、天變地妖　九、舊輕井驛　一〇、大曲り　一一、峠町　一二、峠町二　一三、見晴し　一四、碓氷峠　一五、吾嬬者耶　一六、山中茶屋　一七、足留　一八、寂き

日本アルプス縱走記……九四

一、日本アルプス縱走の快擧　二、發程　三、中房の谷　四、中房溫泉　五、希望の光り　六、深谷幽溪　七、乘越　八、東澤　九、傳兵衛小舍　一〇、濁りの小舍　一一、烏帽子嶽　一二、日本アルプスの山稜　一三、異花珍草　一四、五郎嶽　一五、雪下の白骨　一六、日本アルプス嶽上の深夜　一七、赤岩　一八、長の助草　一九、鑛之平　二〇、鷲羽嶽　二一、意外の衝突　二二、天界の惡闘　二三、霧中の怪像　二四、高瀨入り

乘鞍行……一二七

一、獅峰乘鞍　二、乘鞍の怪異　三、牌肉の獄　四、安曇野　五、島々　六、雜食橋　七、猫核　八、梓の谷　九、大野川　一〇、番所　一一、アーラの小根　一二、猛雨來　一三、怪しき叫聲　一四、摩利支天の慘　一五、紀念の銀笛　一六、雲表の一夜　一七、一ノ池火口　一八、絕頂　一九、乘鞍の仙　二〇、絕頂の雷雨　二一、乘鞍火山の構成　二二、乘鞍嶽の植物　二三、乘鞍嶽の登路

高山の植物……一五七

一、高山の標徵　二、植物分布　三、水平及垂直植物分布　四、山地植物分布　五、山地植物の由來　六、高山植物とは何んぞや　七、日本高山植物の種類　八、高山植物の培養　九、高山植物の園藝的價値　一〇、高山植物の馴致　一一、雪と高山植物との關係　一二、栽培至難なる高山植物　一三、高山植物培

養上考慮すべき件

日本アルプス……一九四

一、雪の天國　二、日本アルプス名稱の由來　三、日本アルプスの領域　四、北日本アルプス一　五、北日本アルプス二　六、北日本アルプスの特色　七、南日本アルプス附木曾山系　八、南日本アルプスの特色

日本高山登路案内略記……二二〇

一、富士山……二二〇

大宮口に於ける植物分布の狀態……須走口に於ける植物分布の狀態

二、白馬連峰……二三四

信州方面の登路……二股より喬木帶……白馬尻……大雪渓……愈平……氷河の遺跡……石室……絕頂……杓子嶽……鐘ヶ嶽……鐘ヶ嶽溫泉……入の二股……越後方面の登路……蓮華溫泉……白馬山越中方面の登路……小川溫泉よりの登路……祖母谷よりの登路……白馬連峰の植物分布

三、日本アルプス横斷（針木越え）……二四九

四、越中立山……二五三

五、有明山（信濃富士）……二五七

六、燕岳……二五八
七、屏風岳……二六〇
八、大天井岳……二六〇
九、常念岳……二六一
一〇、蝶ヶ岳……二六三
一一、槍ヶ岳（神河内渓谷）……二六六
一二、燒ヶ岳……二七一
一三、穂高山……二七二
一四、笠ヶ岳……二七五
一五、鷲羽岳……二七五
一六、黑岳……二七五
一七、野口五郎岳……二七五
一八、藥師岳……二七五
一九、乘鞍岳……二七五

二〇、木曾御嶽……二七五
二一、木曾駒ヶ嶽……二七五
二二、淺間山……二七六
二三、八ヶ岳……二七八
二四、立科山……二八〇
二五、飯綱山……二八一
二六、戸隱山……二八一
二七、黑姫山……二八一
二八、妙高山……二八二
二九、鳳凰山及地藏岳……二八三
三〇、甲州駒ヶ岳……二八四
三一、白峯山……二八五
三二、赤石岳……二八六
三三、加賀白山……二八六

三四、妙義山……二八八
三五、榛名山……二九〇
三六、赤城山……二九二
三七、日光及白根山……二九四
三八、那須山……二九五
三九、飯豐山……二九六
四〇、磐梯山……二九七
四一、岩手山……二九九
四二、早池峯……三〇一
四三、八甲田山……三〇一
四四、岩木山……三〇三
四五、鳥海山……三〇四
附錄 日本高山標高表

以上

千山萬岳

木曾の御嶽及駒ヶ嶽

志村烏嶺著

一、

よし御嶽は俗了すとも無限の秋風に浴して
古驛の雨に泣かんかな。

曾て、御嶽に登りし友人の書中に曰く、

木曾御嶽は、登路よくひらけ、黒澤口の如きは、七合目の小舍に、浴槽ありて入浴すべく、頂上に於ても、設備完全飲食等に不自由なし、されど頗る俗化せりと、自然に憧憬すること甚たしき余は、俗化と聞きて、日本アルプス中の雄峰御嶽に對し、一種嫌惡の念を起せり。故に追年各地の高山に登攀せしも未だ木曾に入らず。本邦にて富士に次ぎて有名なる、御嶽には登らんともせざりき。然れともこは所謂食はず嫌ひなりき。或は曰はく、谿谷の美は、木曾谿を以て、天下の最と爲す。或は曰はく、鬱蒼たる御料林を點綴せる木曾の紅葉

は、海内無雙なり。又或は曰はく、木曾川は、源を東西筑摩郡界の鉢盛山より發し、管内流域二十二里全長五十八里沿岸多くは花崗岩にて、千山重疊の間巨岩老樹相迫りて、木曾萬壑の勝を天下に爲す、

と。猶ほ彼の昔は橋畔の茶店、聲々客を呼んで、椽餅を鬻げる櫻澤、今はた如何。奈良井の古驛鳥居の峠を六櫛の名と共に、聞えたる藪原の短亭、京の大原女にも比すべき小木曾女、巴ヶ淵、山吹横手、旗揚ゲ八幡、鞍馬橋、氷ヶ瀬、木曾棧、寢覺床、其他御嶽駒ヶ岳は更にも云はず、特に余が心を惹きしは、此等の名勝舊跡のみにあらず、曾て草枕にて「今の世に旅するもの、國道の到る處に、昔榮えて今衰へたる古驛なるものゝ多きを見ん、而して其の古驛なるものゝ、いかに荒寥寂寞たる光景を呈したるかに傷心せざるものは稀ならん、壁落ち、庇傾きたる大なる家屋の、幾箇となく其の道を挾みて立てる、旅亭の古看板の幾年月の塵埃に黑みて、纔かに軒に認めらるゝ傍に際立ちて白く、夏繭の籠の目に光れる、驛のどころどころ、家屋途絶えて、里芋、大根、蜀黍などの畑のそこはかとなく連りたる、殊に、白髮の老爺の喪心したるやうに、默して背を日に曝したる、皆是等古驛に於て常に好く見る所の景なり、其處には、墓場の腐れたる如き臭ひ充ち〳〵て、新しき生命ある空氣は。少しだになく、住へる人また遠くこの世を隔てたるにはあらずやと疑はる」云云の一章を讀みたり嗚呼、風情ある木曾の古驛、木曾名所圖會、木曾路の記其他木曾道中記の數種を讀みて、益々荒涼たる古驛を訪はんとするの念禁ずる能はず。よし、御嶽は俗了すとも、無限の秋風に浴して古驛の雨に泣かんかな。

二、木曾の古道、

木曾は吉蘇、岐蘇、吉祖、或は岐岨と書く。續日本紀に、大寶二年始めて開二美濃國岐蘇山路一とあり、又同書に和銅六年七月、美濃信濃の堺徑道險阻にして往還艱難なり、仍通二吉蘇路一とあり こゝに美濃、信濃の堺徑道險阻とあるは、即ち惠那嶽、神の御坂の險路を云ふなり。最古の東山道の官道は、木曾を經由せずして、左の各驛を過ぐ、

美濃國惠那郡坂本より

神の御坂を越へて、

藺原、伏屋里、伊那郡阿智驛、育良驛、賢錐驛、宮田驛、諏訪郡深澤驛、筑摩郡覺志、わたり驛

清水驛、錦織驛、小縣郡浦野驛、麻績驛、亘理驛、多古の驛、沼邊驛、長倉驛、境碓氷嶺、上野

碓氷郡坂本。

三、木曾街道、

古代東山道の官道は、美濃より惠那山神の御坂越えを經て、今の伊那郡に入りたるなり、此御坂越えは預る難道にて、今昔物語に信濃國守藤原陳忠といふ人、任畢て上りけるに、御坂を越ゆるとて、馬ながら谷に落入りし事見えたり。此御坂越えの難道を避けんが爲めに、木曾路を開かれたれども、此新道も頗る困難なりしものゝ如し、萬葉集に、

信濃路は今の沿道かりばねに、あしふましむなくつはけわがせ。

の句あり、以て當時の狀況を追想すべし。しかのみならず、木曾街道には有名なる棧の難所あり。

恐ろしや木曾の掛路の丸木橋、ふみ見るたびに落ぬべきかな。

雲も猶下にたちけるかけはしの、はるかにたかき木曾の山路。

等の詠あり、されば、木曾の新道開けて後も、中世まで東山道の驛路は、伊那郡の舊道を經たり。然して木曾街道は、其後幾度か改修して、昔の棧の險を避けたり、今の福島及上松の間なる棧の如きは、木曾川の岸に石壁を作り、坦々たる大道、砥の如し、されば後世には、

あやふきは名のみ殘りて今更に、渡るに安き木曾の棧。

道廣き御代にこそあれあやふさも、昔語の木曾の棧。

等の詠あり。木曾街道は、全道に六十九次あり。其の眞の木曾に屬するものは、十一驛とす即ち馬籠驛、妻籠驛、三留野驛、野尻驛、須原驛、上松驛、福島驛、宮ノ越驛、藪原驛、奈良井驛贄川驛。

四、飛驒山脈の雄渾、

木曾の地域、南北二十一里東西十里と稱す、其西方に蜿蜒たるは乃ち飛彈山脈、吾人の所謂日本アルプスの連嶺たり。其の雄渾本邦山脈中の最たり。此山脈の地質構造は、頗る複雜なれとも、一般に其の基盤を爲すものは、片麻岩古生層より成れとも、之れを破りて迸發せるは深成岩たる、花崗岩、石英班岩、玢岩等なり。

殊に新火山岩は、各所に噴出凝結して、御嶽、乘鞍等の峻峰となり、其脈北走して穗高、槍と爲り、白馬の連峰に終る。何れも劍戟の如き攢峰、矗々として天を摩し雄峻を極む、山頂到處、奇岩怪石磊々盛夏と雖も白雪を冠し、一般に人跡少なき深山幽谷にして、走獸跡を潛め飛禽影を沒

す。

五、鮮麗なる木曾山系、

東方は木曾山脈にして、前者に比すべからずと雖も、亦一方の雄たり。此山脈は南方遠く渥美灣頭に起り、信濃に入りては、御嶽に對する駒ヶ嶽附近に於て最偉大なり。其の北端は松本平に終る、地體北部は古生層より成り、大部分は領家片麻岩及花崗岩より成る。此連脈中の高峰は惠那山、神坂山、烏帽子嶽、駒ヶ嶽等とす。其の駒ヶ嶽の如きは、山體鮮麗なる花崗岩より成り、山勢秀拔峰巒峻嶸巒勃として蒼穹に崛起せる有樣、げにや木曾山脈中の盟主とぞ覺ゆ。

六、深山幽溪、

飛騨山脈及木曾山脈の兩山脈は、何れも木曾川の沿岸に聳立するにあらずして、幾多の連嶂峰巒を隔てて背後に控へたり、されば標高一萬尺の御嶽も、鳥居嶺の頂に於て、僅かに其の山巔を望むのみ、故に御嶽登山者も福島より西に進むこと二里、合渡峠の頂に於て、初めて其山容の全班を望むべし、駒ヶ嶽に於ても亦然り、街道より駒ヶ嶽を望むことを得る所甚だ尠し、彼の甲州笠

無川の沿岸より、地藏、鳳凰、八ヶ岳を望むが如く、山麓より山巔まで一眸の中に集むること能はざるなり。故に吾人は木曾街道を旅行して、御嶽、駒ヶ嶽等の頭髻を天の一角に望むとき、谷益幽邃に山愈々深きを覺ゆ。

七、鬱蒼たる森林、

木曾の山々は、鬱蒼たる森林を以て蔽はる、其の大部分は有名なる木曾御料林たり、其の地域、一町十五ヶ村に亘り、面積十萬五千餘町歩、林相概ね美にして針葉樹の單純林か、或は針葉樹及濶葉樹の混淆林たり、針葉樹中、扁柏、花柏、羅漢柏、金松、檜の五種は、所謂木曾の五木と稱せらるゝものなり、其發育の美事なる、雲を凌ぐの直幹矗々として高さを競ひ、林下晝猶ほ暗く、實に太古の趣を存す。

徳川幕府時代に、木曾全土尾州藩の有となるや。寶永年間有名なる五木制度を定められ、五木の伐採を禁ず、禁を犯すものあれば死刑に處せらる、俗に、

「木一本に首一ッ」

と稱へられ、盜伐者の心膽を寒からしめぬ、之れ此大森林の今日ある所以なり。

太古の儘なる森林の美を味はんと欲するものは木曾溪に來れ、自然界に於て最森嚴なる者は此始原的森林にあらずや、神は此森嚴なる殿堂に在り、惡魔も亦此暗黑なる森林を住所とす。彼の御嶽王瀧口の開山、普寛行者が清瀧の附近に到るや、惡魔路を遮りて進む能はず、行者乃ち三七日間護摩を焚き、其の灰を練つて夜叉の面を作り、之れを杖頭に掲げて進む、惡魔之れに恐れて害を加ふる能はざりしとか、此神話的物語りも、清瀧附近の林中に入れば吾人をして無限の感興を起さしむ。

八、木曾溪の美、

木曾溪の美は、靜寂森嚴なる森林と、其の間に活躍奔騰せる、木曾川の清流とにあり、前者は、靜、後者は動、前者に萬世不易の色あり、後者は千變萬化を以て其の本體とす。前者は何者に遇ふも頑として其の色を變せず、後者は行く所として其の形を變せざるなし、前者に奪ふべからざるの操あり、後者は常に變通の妙を極む。木曾は森林と奔流、實に對照の妙を極む、両者相纏絡して、爰に木曾溪の絶勝を生せり。木曾溪の美を歌はんとするものは、其の森林の莊嚴を歌はざるべからず、木曾溪の美を描かんとするものは、其の奔流の妙を忘るべからず、木曾溪より森林

を除かば木曾無きなり、木曾溪より、奔流を去らば木曾無きなり、嗚呼、木曾溪の美は森林にあり、奔流にあり。

九、發　程（長野鹽尻間）　明治四十年七月廿六日

中央東線によりて、長野驛を出發せしは、七月の下旬、川中島の早旦、萬斛の涼風車窓を吹けども、葉末にきらめく旭光は、人をして午後の炎熱を想はしむ。

世に聞えたる姥捨も、馴れては特に看るものもなし。

氣車冠着の墜道に入りては、異樣に響く車聲に先づ不快を覺え、臭烟と炎熱とに苦しまざるはなし、麻績西條を過ぎて、明科に至れば、松本平前面に開け、右方遙かに日本アルプスの一角を望むべし、有明の青嶂、常念、蝶ヶ嶽等皆吾人を迎ふ。

車窓より松本市街の粉壁を左に眺め、此平地の南端桔梗ヶ原の一停車場、鹽尻に下車す。

僻邑の一停車場、素より客を待つ車夫も居らねば、重荷を抱いて行く商人風の男もあり、發車時刻に後れじと、脛もあらはに、走せつけたる村嬢もあり、停車場附近には、殺風景なる數軒の旅舍、飲食店あるのみ、兎角新開地の停車場程、趣味なきはなし。

桔梗ヶ原は、鹽尻の外宗賀、廣丘、芳川等の數村に亘れり。

○　　頼支峯

戰血消來霜葉殷、茫々往時白雲間。
龍虎爭鬪都無迹、雲外依然甲斐山。

○　　加茂眞淵

ものゝふの草むす屍年ふりて
秋風寒しきちこうが原。

旌旗に疑ふ尾花も見えず、茅茨悉く鋤き返へされて、一面の桑園となり、八千草匂ふ古の面影、又見るべからず。

四名の旅客と同車し、馬車にて洗馬に向ふ。

十、洗馬より奈良井、

洗馬驛は、木曾溪に入るの關門たり。

秀絶なる木曾の群山、清洌なる木曾の溪水、余が多年憧がれたる木曾溪、目前に現はる、嗚呼天

下無比なる、此溪山の神韻に觸れて、縱まゝに吾が吟懷をやらむ哉。

松本平の一端、爰に來りて全く究まり、奈良井の河岸僅かに中仙道の街道を通ずるのみ、又寸尺の平地なし、崖に臨み山に據り、道を挾みて立てる家々、古は街道往來の客によりて繁華なりしも、今は不便なる此街道を往復するの風流漢もなければ、其の衰殘の狀見るに忍びず、此街道筋の村々、皆農蠶を以て生業とし、朽敗せし招牌に僅かに昔の名殘を止め、軒傾き壁落ち、數代僕を代へて磨きし大黑柱も、今は大方光りを失ひ、吾人をして轉々斷腸の思ひあらしむ。

牧野、本山、日出鹽等の宿驛、皆荒敗衰退の狀見る影もなし、洗馬より一里三十町、奈良井川に落つる小溪あり、櫻澤といふ、これを渡れば、所謂木曾路なり、昔は橋畔の茶店、聲々客を呼びて、橡餅を鬻きしとか。

木曾のとち浮世の人の土産哉。　　芭蕉

中山と呼べるところにて晝飯をなす、此附近中央西線の鐵道工事最中にて、石を運ぶ馬車、煉瓦を積みたる車の往來、絡驛として絶えず、幾百の工夫山を崩すあり、谷を埋むるあり。

石を割る爆聲には、山神も膽をや消さん、土を運ぶ人車鐵道は行人を妨げ、紅旗を振つて信號を爲すあり、鐘を鳴らして、時を報ずるあり、混亂殺風景の狀、木曾あつて以來始めて看るの光景

なり。

赤色なる煉瓦の橋礎は、幽邃なる木曾の風景と調和せず、深碧の水は、土砂の爲めに汚濁し、所謂物質的文明のありがた味は、此幽邃なる木曾の深溪にまで進入し來り、あらゆる自然を滅盡せんとす。「伊太利は、藥商染工等に售らんが爲めに、毎年九月より四月に至るまでの間、月桂樹、石榴、黄楊等の綠皮を剝いで、日耳曼、墺太利、魯西亞の諸邦に輸入するが爲めに、綠木は兀立して、倒影地に落つること細く、人其の影に憩はず馬その下に繫がれずなりぬと、又之を聞く瑞西國の山中製鋼鐵の爲めに、煤烟その玻璃鏡の如き湖面に雲屯し、蘇格蘭第一の美はしき水流は、アルミニユーム採製の用となり、ゼルサレムの棕梠に巢ふ鴿も安眠を得ずなりぬ」と、人の叫びしは、遠き異邦の事と思ひしに、今吾人をして同樣の嘆を發せしむ、木曾風景の破壞費は、一哩貳拾餘萬圓の巨額なり。

中央西線設計者は、此工事は風致を害するよりも、寧ろ風致を添ふる考にて、考案中なりとか、果して然るか。

滊車の聲地に響きて行獸跡を潛め、滊笛の怪音、四邊の山々に返響して、飛禽影を沒し、幾年月に染められし紅葉、翠滴らんとする新綠、煤烟の爲めに汚され、晝間は白旗の信號、夜間は紅

燈、青光、闇にひらめき、木曾の森林は、皆搬出せられて赭山となり、水涸れて礫とならば、如何にしてか風致を添ふべき、廿世紀の文明なる者は、實に如斯、木曾溪の破壞又如何ともすべからず、今自然の破壞を恐れて、設計を左右する如きは不可なり、鐵道は至便なる方法を以て設計すべきなり、彼の碓氷峠に於けるアプト式を看よ、天下の險と呼ばれたる碓氷峠、アプト式鐵軌實にふさはしき設計なれども、其結果今將たいかん、アプト式は、碓氷に何等の貢献することなく、交通を妨ぐる事實に甚だしとす、段鑑遠からず、木曾鐵道の設計者、夫れ三思せよ。

贄川、宮澤を經て奈良井驛に近づくや、地藏坂の手前にて、一制札を見たり、記文に地藏坂工事中、鐘を鳴らし赤旗を振るときは、行人止まれとの旨記されたり。

人の心膽を寒からしむる警鐘の亂打、革命の色とか云ふなる赤旗の翩翻、轟然たる爆聲と共に、巨岩土砂の雨を降らす、かくてもなほ、木曾溪の風光は、破壞せられしといふ能はざるか。

十一、奈良井驛、

地藏坂附近を過ぐれば、右方は鳥居峠の連脈、屋脊に崩れんとし、左は奈良井川の奔湍軒下に迫る、山と水との間に、細き破驛

これ、奈良井の宿、

古の繁華の跡は夢と消えて、こゝは又一きはの衰頽、見るからにあはれなり、をりから降り來る細雨、帽端をかすむる山風、一きは冷涼、吾人の胸には限りなく旅の淋しさを覺えぬ。

えちごやと云ふ旅店の前にて馬車を捨て、之れより徒歩して、鳥居峠を越えんとす。

十二、鳥居峠、

奈良井川は北流して、信濃川の水となり、

木曾川は南流して、東海の波となる。

此兩川の分水嶺鳥居峠、海拔四千五百五十一尺、日頃胸中に描きし此峠と、今、面のあたり見る光景とは、餘りに其の差の甚だしきに驚きぬ、他人の紀行を讀み詩歌を誦し、余の想像せし此峠は、草短かく花瘦せたる、丘陵起伏し、前を望めば藪原の碧蕪指點すべく、後を顧れば奈良井の谷は夢の如く、路傍には僅かによし簀にて圍ひしあはれなる一茶店、主はもとより白髮の老媼、風雨多年、木理晒白の一小鳥居、御嶽に向つて將さに倒れんばかりに立ち、土を小高く盛りたる祭壇には、覺束なき白幣二三。（こはあまりに古き思想なれども）

かくて此峠は、いかにも、物淋しく、世離れたる詩的の處と思ひしなり、然るに事實は、全く之れに反せり。

到處荒敗せし木曾街道の宿驛を見たる眼には、いかにも立派なる茶店、壯漢二名休憩せる客の爲めにしきりに周旋し其の屋内を通過せざれば遙拜所に至る能はざるが如き構造なるは、あまりに俗惡利己的なり、壯大にして、しかも新らしき石の華表、拜殿さへも立派にて想像せし如き者にあらず、南方眼界廣けれども、他の三面は何の眺望もなし、鳥居峠は實に趣味索然たるところと覺えぬ。

南方木曾溪の藪原驛の碧蕪を望むと、信飛境上日本アルプスの、深厚なる溪谷を望むの景とは、狹隘なる木曾溪を旅行する人々の眼に、頗る壯快を覺ゆべきも、雄偉の景に馴れたる登山者の眼には、左程の感興も起らざるなり。

名物に甘きものなく、名所に何とやらは、こゝにも亦。

十三、藪原驛、

御六櫛の名にて、知らぬ者なき藪原は、奈良井程の舊驛なり、鳥居峠は信濃川と木曾川との分水

嶺なるのみならず、木曾溪を南北に分つ一大障壁たり。見よ、峠の北麓奈良井と、南麓なる此籔原とを比較して、

前者は一般の言語、風俗、純信濃的にして東京越後方面の感化を受けたれども、籔原に至れば、大に之に反し全く尾張的なり。

水は低きに就きて下流に流るれども、人は河流に沿ふて源流に遡れり、純信濃的勢力は、信濃川に沿ふてこの峠の北麓に達し、尾張的勢力は木曾に沿うて、南麓に來れり、而して鳥居峠は、此両者の間に、劃然たる界線を引けり。

木曾に旅する人よ、希くは此峠の南北によりて、言語の音韻にまで大差ある事に注意せよ、而して小なりと雖も如何に、山嶺が人文發達に及ぼす影響の大なるかを理解せよ。

余の籔原に入りしは、既に夕陽西に傾きし頃なり、爰にて再び馬車を雇ひ、其の仕度を待つ間に、不意の雷雨、山地には有り勝ちの事なれども、今日なほ四里を行きて、福島に至らんとの豫定なりしかば、此雨の爲に妨げられんことを恐れぬ、然れども、暫時にして雨も止みぬ、直に馬車を驅りて福島に向かふ、路、屈曲多けれども坦々たり、籔原、三留野間は、政府の事業繰延べの結果、中央西線工事中止なれば、到る處古のまゝなる木曾溪の風光を、縱まゝにすることを得

たり。

一四、義仲の舊里、

日義村の地籍、虹の如き山吹橋の深潭に臨むところを巴ヶ淵と名づく、其の舊道ありしところを山吹横手といふ、山上に狼煙臺の跡あり、山吹横手の紅葉は木曾溪第一の美觀と稱せらる、此附近は巴御前出生の舊里とか、進むこと僅かにして、河中に巨岩あり、松樹を戴だく小杖ヶ岩之れなり、小杖とは義仲の母の名に因めるなり、此地義仲に關する舊跡多く、旗揚八幡宮、古城趾、德音寺等皆沿道にあり、宮越驛を經て福島町に入る。

一五、福島驛、

野路の村雨それならで、驟雨一過、木曾八千溪、新なる水の色、改まりし山の光澤、雨後の凉風に人馬共に蘇生し、蹄聲高く馬車の福島驛に入りしは、街頭暗らく山際の星明らかなりし頃なりき。宿るべきは蔦屋と聞きしに、乙は又意外の混雜、店頭に狼藉たる菅笠、金剛杖階上階下にのしり騷ぐ白衣の人々、聞けば東京品川の某講道者二百餘名、今投宿せしばかりとか、止むなく

他の旅舍を尋ぬれば、岩屋こそとて、猶ほ一二町馬車を進めぬ、一歩にてもあす登る御嶽に近きに宿るこそ本懷なれ、宿の良否など云ふべきにあらず、此宿屋いと靜にて人々の親切なるに心置きなく、階上の廣き一間に語るべき人もなく、讀むべき書もなく、たゞ明日の登路を兎や角と思ひ續けぬ

木曾川の水色……顧みれば駒ヶ嶽の連脈、仰げば御嶽の雄峰、登山路中の一名所、合渡峠の眺望、……山麓黑澤山民の生活、……屋敷野、……松尾瀧、……千本松、喬木帶の美、……七合目の小舍、その雪を煮たる風呂に俗塵を洗はゞ、……女人堂……覺明社、二ノ池……想像……空想……果ては吾が案内頼む剛力の人相までも、

近く聞こゆる木曾の川音、冷凉水の如き山廊の夜嵐。

長途の疲れに身は何時とはなしに華胥に遊びぬ。

（注、福島町は、往時より、木曾十一宿の首位にあり、戸數九百、人口四千七百餘、木曾溪、第一の都會なり、貝原益軒木曾路の記に「福島の町家數百二三十軒ばかり、木曾山中にかぎらず、信濃路にて尤よき町なり、諸の賣物などもあり、町の入口左の方に公儀よりの御番所あり、此處にて、東へ行く者の鐵炮と女とを、いましめたる事、遠州荒江のごとし、」とあり、往昔より信濃路にては頗る繁華の土地たりしを知るべし、旅舍は蔦屋を最とし、岩屋之れに次ぐ。）

一六、合渡峠、

人夫の遲きにいたく時を移し、午前六時半岩屋を出づ、木曾川に架けたる行人橋を渡る、夏の早旦の氣清く心も澄める溪の水、岩にせかれて湧き立つは見るから寒き春の泡雪、藍より青き淵の水瀨々に碎けて昆崗の珠より光る其泡沫。中畑を過ぎ兒野に入る、途中木曾川の奔湍を左に見る、路右折して御嶽一の鳥居を潛り谷久保峠を越ゆれば谷狹し、字中澤には人家も見えたり、路の左に一大橡樹あり下に橡の樹小舍と呼ぶあり。

小溪に始めて進む程に、山漸く迫り稍幽邃の趣あり、又峠路となる久戀の合渡峠之れなり、頂上には御嶽遙拜所あり、壯大なる鳥居立てり、茶屋もあり。

顧みれば漠々たる暗雲木曾の本谷を埋め、駒ヶ岳を何處と問ふ由もなく、前面は怪雲濃霧黑澤の谷を蔽ひ、五百重の雲を突破して、蒼空に磨き出だされたる雄渾偉大の御嶽の山塊、紫匂ふ山色の美、言語に絶し、谷々に殘る千古の雪は日光に輝き、右の右方に近き最高點は間はずして劍ヶ

岳たるを知る、其の前面の深谷は、これ黒澤本谷其の左はオホノゾキ谷の長谿か、左肩は確に王瀧口の奥院なるべし、中央の高所は摩利支天、其の右方の低處は三ノ池か四ノ池か、劍ヶ峰より摩利支天を經て、山勢漸く北して將に盡きんとするところ、繼子岳の噴起ならん。

御嶽山容の雄大なるは、日本アルプス中に匹儔少し、暫時は吾れを忘れて佇立せり、折りから今迄御嶽の絶頂のみ殘しゝ妖雲湧沸して容積を增し、猶ほ御嶽山背に現はれたる黒雲見る〳〵天空を蔽ふ、變幻極まりなき山地の天象、暗澹たる四圍の光景、憂慮すべき吾が前途。

一七、黒澤の谷、

壯麗なる御嶽山頂も余が眼底に映せしは僅かに數分間、今は全く妖魔の手に隱されたり、天益々暗く、遙かに聞く轟々たる雷鳴、雷鳴益々近く樹梢風に鳴り、先づ發矢と笠を打ちし粗粒の雨滴、此の峠にて此雷雨避くべき蔭もなければ、人夫を督し足を空にして黒澤の谷に下る、黒澤の人家ある附近に來りし頃は、篠を束ねて降る雨に、面を向くべき樣もなく、雷電疾風笠も用をなさず、莫蓙も身に纏ふに由なく全身雨に濡れて田中新兵衛氏に投ず。此日の登山覺束なければ、此處より人夫を福島に歸へし、天候の定まる迄滯在と決す、田中方は此地の豪家、夏季は御嶽道

裏手瀑布

む望なる池の二りと頂絶嶽御

者を宿泊せしむるを業とす、一時に三百名以上を容るべし、余は新築の階上に導かれぬ、

雷雨一過して窓外に輝々たる日光を見る。

御嶽の山頂も顯はれたり、もとより狹谷の底部なれば、右方の一角を望むのみ、雨後の空氣特に澄みて山色亦た新たなり、宿の僮余が雙眼鏡をとり、猿の如く主屋の屋上に上る、四ノ池の下の瀑布鮮かに見ゆると喜び騷ぐ、肉眼にては雪と水とのけじめ定かならねど、雙眼鏡にて望めば、其の言の如く、水かと思はるゝものあり。

軸を出づる無心の雲も、あとなく消えて瑠璃のごとき碧空、午前の天候全く一變せり。

にはかに人夫を依頼し、濕衣を乾かし登山の途に上る、時に午後二時、此日到底頂上に達する能はざれども、行ける所までとの覺悟にて出發す。

田中方を發し行くこと少許、西野川を渡る、橋は即ち本社橋、橋下の深潭急雨の爲めに濁流漲り又清碧の色を見ず。

左方に御嶽神社黒澤口の里宮あり、里人御本社と呼ぶ、昔時醍醐の御代、延長年中信濃の國司勅を奉じて造營せし社殿なりとか、老杉森々社殿いと神寂びたり。

一八、松尾瀧

里宮より前進するに、路傍數項の石田あり、附近又二三の茅舍を見る、亭々たる一樅樹あり、此處より後方を顧みるに、樅樹を前景とし、午前雨になやみし合渡峠を中景とし、其遠景は駒ヶ嶽の翠微。

前進二三町路叉狀をなす、石標あり右くらもとにしのみち、御嶽登山者は左方を進むべきなり。

倉本、西野等の部落は、西野川の上流沿岸にあり、吾人は木曾に入りて地の避遠なるを思ふ、黑澤に入りては實に僻陬なるに驚ろけり、然るを猶ほ之れより山奥に人家あり、人はかくてもあられけるか。左方に進みて、御嶽湯川の谷を上る、路溪流に沿ふにあらず、其の間に耕作地あり、左方は欝然たる森林蔭をなし、冷涼夏日の苦熱を知らず。

三合目屋敷野に至る、下山せし行者數名酒を被つて大醉し、路傍の茶店に高談放論す、彼等は昨王瀧口より登山し、山頂に一泊し、午前雨を侵して下山せし由、茶店の主よく客を遇し、しきりに御百草を買はんことを勸む、御嶽登降路傍の茶店、神藥（御百草）其他の藥草を陳列して賣らざるなし、神藥とは、キハダのイキスにて製せしものなり、猶ほ他の藥草には、トウヤクリンダウ、イハオトギリ、チングルマ、サルオガセ、セリバワウレン、イハツメクサあり、彼のオコマグサの如きは、原料殆んど盡きしを以て陳列せる者少なし。

屋敷野よりの御嶽の眺望は登路中の偉觀なれども、白雲の爲めに妨げられて分明ならず。

猶ほ少しく進みて、御嶽湯川を渡る、稍幽邃の趣きあり、此の附近より各御嶽講々社の先達を祭れる靈神の碑あり、其數幾百なるを知らず、日の出瀧の邊最も多し、松尾瀧の小舍は既に四合目なり、急坂を登りて叢野に出づれば、樹木少なく眼界開けて、東方木曾本谷を隔てゝ、駒ヶ嶽の連峰蜒々南北に走り、黑澤合渡峠等皆眼下にあり、西方嶽頂を仰げば山巓依然白雲の中にありて、壯嚴なる山容を見る能はず、八千草の咲き亂れたる叢野の景色、吾人をして屢々歩を停めしむ。

一九、喬木帶、

八千草匂ふ萱野を過ぎ、千本松附近より喬木帶に入る、欝蒼たる針葉樹の密林、四圍の展望全くなく、路には木材を敷きて泥濘を防げり、一萬尺の高山にて、登路宿所の設備御嶽の如きは殆ん

と他に見る能はざるところなり、扇の森にて休憩し、人夫に其由來を聞く、陰濕の氣肌に迫り叢野を上る際汗ににじみし襯衣冷かなり、陰鬱なる林中四圍の重き空氣に歷せられ、後よりは何者か追ひ來るが如く、前面には、或者の潛伏せるが如く思はれて、人夫も吾も一語なく、死せるが如き林間を進めり。

午前五時六合目の中小舍に着く、海拔既に二千米突小舍と呼ぶも立派なる建築物、他の高山に於ては、容易に見る可らざるもの、登山路は此屋内を通ず、此山の小舍は皆如斯構造にて登降の客をして是非其休憩せざるべからざる樣出來たり、吾人は休憩を强制せらるゝ樣覺えて不快の念あり、山小舍の主人にはふさはしからざる、二十四五歲の壯漢、しきりに藥草など買はんことを勸む、不圖眼に入りたるは藥草など列らべし臺の一隅にコマクサの花ある鉢なり、就ゐて見るに新らしく植ゑたる樣にてもなし、さりとて鉢にては容易に開らかざる此花、不審の餘り尋ねしに、昨秋鉢に植ゑて此の小舍に置きしが今夏花を着けたるなりと、海拔二千米突の高處とは云へど此喬木帶、さるにても不思議の花よ。

中小舍より先きに又飯盛小舍あり、構造其の他六合目の物と大差なし、行けども〳〵陰鬱なる喬木帶、何の變化もなし、只薄暗き下に、イチエフラン、コフタバラン、なぞの開花せるが、いと

哀れ深し、折しも前面の林中にて、丁々木を割る音の聞えぬ、早や七合目にや、時は既に六時五十分最早や前進し難ければ、七合目に宿することゝはなしぬ。

二〇、七合目、

吾れ物云はず人夫も亦一語なし、雙影默々として林間を辿る、草鞋腐葉を蹈む音、微かに左右に反響し、立ちこめたる喬木の間より、何者か靜かに〳〵と囁く如く聞きなされ、幽靜閑寂比すべきなし。

午後六時半、七合目の小舍に達す。

質朴なる老爺と、其の孫にやあらん十四五歲許りなる小童、共に歡び迎へて何くれとなく歡待す、聞けば此小舍は昨日開きしばかりにて、余が本年滋めての泊り客なりとぞ、萬事整はず一浴を期せし風呂も今宵はなしとの事なり。

老爺酒を温め一盞を余に囑し、以て客が長途の渴を醫せんと、

多謝す老爺の好意、

されど昨夕鳥居峠の頂に於て、群山を拔ける御嶽の髻髮を望まんとして雲に妨げられ、今朝合戸

峠に於て、僅かに數分間其一角を望みしのみ、未だ縱まゝに靈峰の大觀に接する能はず、屋敷野に於て、松尾瀧上の叢野に於て、遂に嶽容の全豹を見るに至らず、今此巨人の懷に入りて眠らんとす、しかも未だ其の面貌を見ず。

あゝ此渴望如何にして之れを治すべき、今老爺の賜たる天の美祿も、遂に之れを醫する能はざるなり。

主客四人榾火を焚きて暖を取る、老爺及び人夫がかはる〳〵、余が爲めに御嶽の崇高を說き怪異を語る、多くは之れ牽强附會の說、齊東野人の言、されど吾人をして屢々首肯せしめしふしなきにあらず。

俗界を離れし深山の中に、飾りなき野人の言を聞くは、登山中の一快事。

夜深うして梢を渡る風聲流水の如く、夜寒肌に迫る。

午後十時、榾火明滅せる爐邊に眠る。

二一、女人堂、

午後四時、屋外未だ小晴きも、獨り七合目の小屋を辭して登る、樹木漸く丈け低うして全く灌木帶に入る、枝幹は烈風に虐せられて立つ能はず、根は火山岩の間に入りて伸びず、拔桙地に伏して高さ人身に達せず、ガンカウラン、クロマメノキ、ヒヨウタンボリ、シャクナゲ等、花を着けたるあり實を結べるあり。

女人堂附近、チシマキヽヤウの紫花地に敷ける樣、其の美云はん方なし。

金剛童子を經て登ること二丁、始めて殘雪を蹈む、仰げば天壇既に眉間に迫る、そゝり立つ絕巔の嶮峻として天を撐る樣、壯嚴とや云はん。

今や吾が久戀の御嶽、顏貌鮮かに摸拜せらる、氣魂爲めに動く。

八合目以上は赭褐色なる燒岩磊塊として山骨を現はし、其の間に點綴せる高山植物の美花。

ヂングルマ、ツガザクラ、コイハカヾミ、イハヒゲ等悉く花を着く、嫌惡すべき赭褐色の爛砂と、可憐なる美花、余は自然の對照の至妙に驚く。

あゝ此訪ふ人もなき深山の巔、千紫萬紅誰が爲めの笑顏ぞや、鮮麗なる花の色は誰が爲めの裝ひぞ、馥郁たる芳香何人にか捧ぐる。

あはれ夜な〳〵白霧に乘りて來り遊ぶ、山姫もありぬべし。

二二、覺明堂、

焦石磊砢の間に迂餘曲折せる一絶の路を求めて登り覺明堂に達す、此處にも近頃新築せる小屋あり、今朝頂上より下り來りし道者數名に會す、年若き婦人も見えたり、一隊皆白衣、金剛杖を手にし腰間鈴を着けたり、鏘々たる鈴聲、四邊に反響す。

行者覺明は黒澤口の開山、覺明の名は、一度御嶽に登りし者は知らざるものなからん。

安永の昔覺明行者黒澤に來り、神官某の家に到たり登山の許諾を請ふ、當時此地方にありては、よく此山に登る者なく、若し凡夫の神域を汚すあらんか、山靈嚇怒五風十雨時を失し、五穀稔らず、山麓悉く其の災を受くと信せしかば、某は覺明の乞丐に等しきを見、足を擧げて布施を求むる托鉢を驅り、速に此地を去らしむ、然れども此御嶽崇拜者は容易に屈せず、百方辭を盡くして登山を許さんことを求めたれども、遂に肯かれざりしかば、村民の反對を顧りみず、遂に獨り絶巓に向かふ、村民大いに驚き數名の獵師をして銃を執つて其の後を逐はしむ、然れども遂に及ばざりき。

行者深く山中に入り日を經て歸らず、其の行く處を知らざりしが、其の後普寛行者王瀧口より絶

巓を極め黒澤口に下らんとし、今覺明堂ある附近に來り、岩塊の間に覺明行者の白骨を認む。あはれ行者覺明、絶巓を既に眉間に仰ぐの所に至り、遂に目的を達せずして斃れしか、其の無念如何んぞや、魂魄今も中有に迷ふらん。

否……否……彼れは首尾よく絶巓を極め宿昔の本懷を遂げ此地まで下りしも、再び下界の人となるを欲せず、五彩の雲に乘つて紫微に入りしは疑ふべきにあらず。

二三、二ノ池、

覺明堂より登ること少許、展望益々廣濶、北方深谷を隔てゝ四ノ池を望む、殘雪皚々たる間に一面の明鑑あり。

遙かに白雲の彼方、乘鞍、穗高、槍ヶ岳等の峻峰、簇々として天を摩するを見る、東方の山々は去來の雲に妨げられて、何れを夫れと認め難し、尙ほ直進して馬背の如き山稜に達す、西方脚下を伏瞰すれは一池あり二ノ池之れなり、池の彼岸の懸崖には白皚々たる殘雪あり、其の融解せる者、瀦して二ノ池の水となる、玲瓏清澄池底の砂をも數ふべし、漣漪岸を嚙み青空を涵して池面紺碧。

此の絶巓に此の靈池あり、御嶽講信者の如きは此池を神聖視し、二ノ池の神水幾年を經るも腐敗することなく、羸弱の者之れを呑めば壯健に、病者に施せば起死回生の効ありと爲す、故に爰に來る者皆此水を汲みて携へ下る。

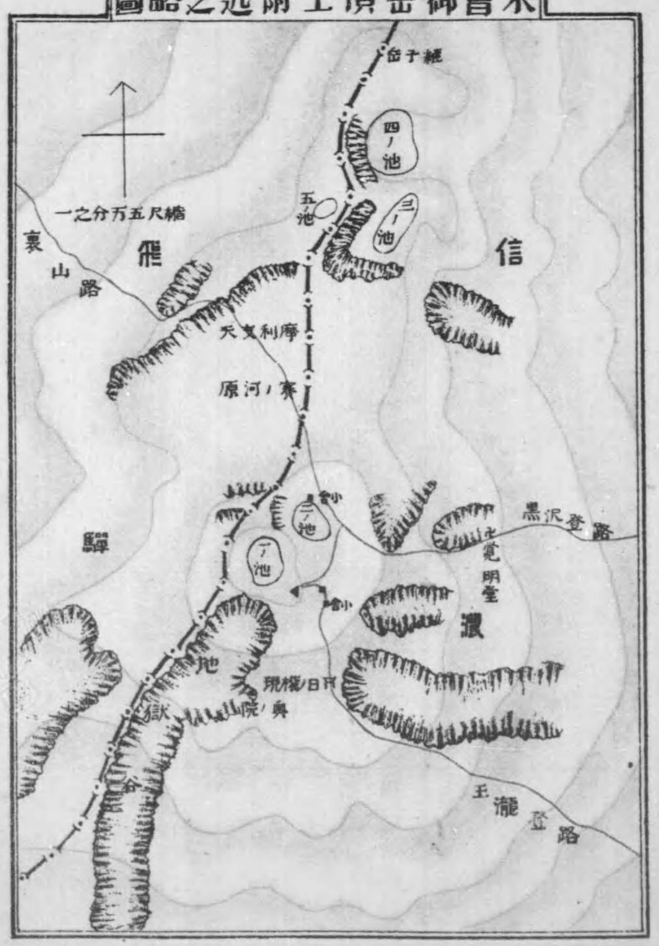
池の北岸に二ノ池の小舍あり、信者の此所に來るもの此小舍に泊し、池水に水垢離を取りて潔齋し後頂上を極む、此小舍の附近より御嶽裏山口の降路あり。

二四、裏山道、

太古の儘なる深林、眞に深山の幽寂を味はゝんとせば、御嶽の裏山越えに如くものなし、二ノ池の小舍より賽の河原へ下るときは、磊々たる小石原の間に微かに細徑あり、もとより爛砂の間を通ずるもの、高山登攀に經驗ある者にあらざれば迷ひ易し、行人の小石を積みて道しるべを作れる者あれば、之を目標とし右へ右へと行くを可とす。

賽の河原の終るところ一面に急峻なる堰松帶あり、一縷の細徑此間に通ず、之れより下り行くに熊笹の彌が上に生い茂れる中に入るべし、熊笹つきて愈〳〵森林帶に入れば、始めて太古の儘なる大森林、自然の幽寂を十分に味ふ事を得べし。

木曽御岳頂上附近之略圖



若し快晴の日ならんには、駒鳥の聲四近に聞えて、凝固せし如き靜かなる空氣に彈力ある波動を傳へ、若し陰雨濛々濃霧深く森をこめ微風もなき日ならんには、陰濕の氣人に迫り、何人も堪え難き淋味と一種の恐怖とに襲はれ、暫く一所に佇立する能はざるべし。

頂上より濁川温泉までは、人家は愚か小舍さへなく、濁川より又六里の間、喬木林中を下り、始めて飛驒國益田郡西洞の民家に達すべし。

御嶽の表口は、いづれも俗化を免かれざれども、此の裏山路は、全たく傷付けられざる自然の儘なり。

二五、絶　頂、

磊塊たる燒岩を踏むで頂上に近づけば、既に草木なく僅に高山植物の數種岩罅に蝸附し、地衣の岩面を彩色せるを見るのみ。

絶頂に近く二軒の小舍と御嶽郵便局とあり、甚だ大ならずと雖も、一萬尺の天界に此設備あるは、他山に於ては殆んど見る能はざるところ、劒ヶ峰の絶巔に御嶽神社の奥社鎭座せり、右側に銅像石像二三を見る。

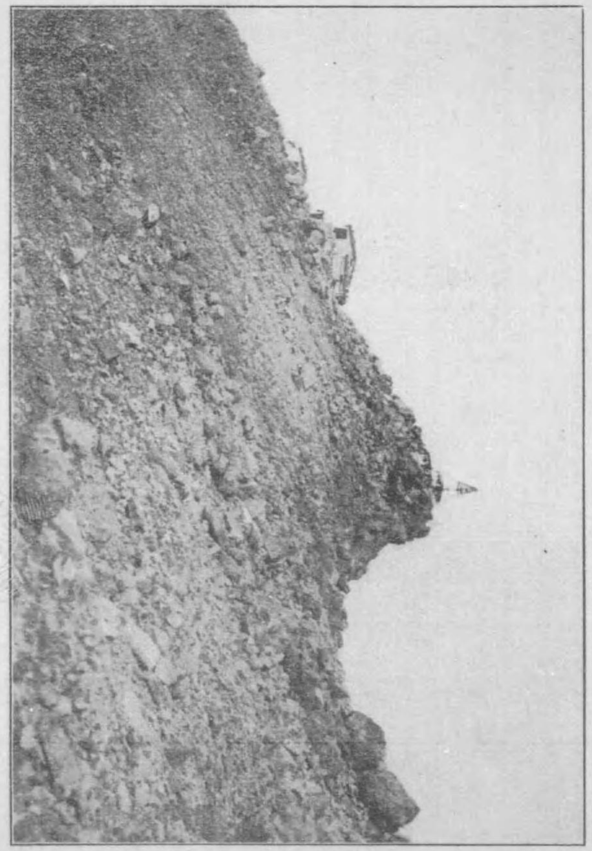
露光量違いの為重複撮影

既に虚空の飛橋を攀ぢ一萬尺の雲梯登り盡して、身は三十六天の頂を極む、太古以來吹て斷せざるの神風岩角に吼え、衣裾を卷いて穆々の音あり。

上は一空深碧瀟氣脾肝に泌み、下には空翠虛嵐を攪つて手に之れを卷き收さむべき連峰の起伏あり、兩手蒼々の天を支へて赫々の日を戴き、雙脚大塊を蹈む、天の下唯一の我あるのみ、我の下群山攢峰の紫翠悉く跟底に集まる、五尺の小軀天上天下唯我獨尊、我が心既に神仙、恍惚として雲中に天樂を聞き、心は今五慾の臭骸を脱し、飄々乎として紫微に入るの思あり。

眼を北方に放てば、脚下に一ノ池の乾池あり、二ノ池の水は碧空を涵し、賽の河原の終るところ、赭褐色の偉壁は之れ摩利支天外輪山なり、其の右方の前面には三ノ池及び四ノ池の凹池あり、絶大なる御嶽山背の、將さに絶えんとするところに繼子岳の噴起あり、猶は遠く北方を望めば、白駒奔騰する乘鞍の尖峰、魏々乎として千古の雪を戴き、高く雲漢を摩す、東西の山脚天地の間に神秘の一線を劃し、右は信濃の高原に左は高山の高臺に、乘鞍の北方槍ヶ岳の尖頭、穂高の嶺峰、北部日本アルプスの峰巒、簇々として高さを競ふ。

御嶽及乘鞍を連結する一線（鎌ヶ峰山脈）は、飛驒と信濃を分界し、僅に野麥峠と長嶺峠との二線の交通を許すのみ。



表木曲線

四　御嶽の雲海

露光量違いの為重複撮影

既に虚空の飛橋を攀ぢ一萬尺の雲梯登り盡して、身は三十六天の頂を極む、太古以來吹て斷せざるの神風岩角に吼え、衣裾を卷いて穆々の音あり。

上は一空深碧灝氣脾肝に泌み、下には空翠虚嵐を攬つて手に之れを卷き收さむべき連峰の起伏あり、兩手蒼々の天を支へて赫々の日を戴き、雙脚大塊を蹈む、天の下唯一の我あるのみ、我の下群山攢峰の紫翠悉く跟底に集まる、五尺の小軀天上天下唯我獨尊、我が心既に神仙、恍惚として雲中に天樂を聞き、心は今五慾の臭骸を脱し、飄々乎として紫微に入るの思あり。

眼を北方に放てば、脚下に一ノ池の乾池あり、二ノ池の水は碧空を涵し、賽の河原の終るところ、赭褐色の巖壁は之れ摩利支天外輪山なり、其の右方の前面には三ノ池及び四ノ池の凹池あり、絶大なる御嶽山背の、將さに絶えんとするところに繼子岳の噴起あり、猶ほ遠く北方を望めば、白駒奔騰する乘鞍の尖峰、魏々乎として千古の雪を戴き、高く雲漢を摩す、東西の山脚天地の間に神秘の一線を劃し、右は信濃の高原に左は高山の高臺に、乘鞍の北方槍ヶ岳の尖頭、穂高の嶺峰、北部日本アルプスの峰巒、簇々として高さを競ふ。

御嶽及乘鞍を連結する一線(鎌ヶ峰山脈)は、飛騨と信濃を分界し、僅に野麥峠と長嶺峠との二線の交通を許すのみ。

御嶽山

乘鞍の右信濃高台の彼方、一縷の白烟を天に向つて吐くものは淺間の怪峰、立科、八ヶ岳亦指點すべし。

西方高山高台は一眸の下に集まり、幾多の大嶺小峰參差し、連山の起伏さながら波濤の如し、飛驒高原の終るところ、鰲背の波間に浮べるが如く秀麗無比なるは、問はずして白山々系なるを知る。

白山、御岳、乘鞍は飛驒高原の三方に鼎立して、相下らざるの慨あり。

南方鬱々蒼々なる森林を以て蔽はれたる御嶽の山勢、南走して北部日本アルプスの將さに盡さんとするところに、阿寺山脈の斜交して走れるあり。阿寺山脈の東端を遮斷し、北東に向つて走る一連の高峰は、南にありては伊那岳を起し、御嶽の東に於て駒ヶ岳の峻峰となる、三十六峰、八千溪、花崗岩の白崖雲表に聳え、山勢の雄偉峻拔、實に天下の偉觀たり壯觀たり、駒ヶ岳連峰の東、山色一きは淡きは赤石山系なるべし、八面玲瓏八方形を改めざるは、芙蓉の峰。

嗚呼人圈を超脱すること一萬尺、此自然の大觀は、實に絶大至高、天地間又何物か之れに比すべきものぞ、云はんと欲するも言なく、書かんと欲するも文字なし、一度此絶嶺を極め此大觀に接せし事なき者は想像だに及ぶなからん。

二六、御嶽火山の活動、

山は靜にして太古の如し、今こそ太古の如き御嶽火山も、嘗ては暴威を逞うせり。

この三千米突の大塊も、地熱活動の結果噴出せる熔岩灰砂の堆積に過ぎず。

御嶽最古の火口は、直徑約二千米突、摩利支天火口と呼ぶもの、現存せる摩利支天の嶂壁、奥の院、繼母岳、其の破壞せる火口壁の一部等は今に殘存せる者なり。

直徑二千米突の大火口より、黑烟濛々として立ち昇るとき、信飛兩州は更にもいはず、本州の大部に灰砂を降せし事幾度ぞ。

此火口壁の北に接せる繼子岳の高峰は、三ノ池の火口を擁して聳立し、四ノ池五ノ池等皆舊火口趾にして、盛んに噴火せし者なり。

又本火山の東側には三笠山、小三笠山の寄生火山あり。

一時盛んに活動せし摩利支天大火口も、年處を經るに從つて勢力次第に衰へ、こゝに長期休眠の狀態に陷り、自然の破壞に委して火口底漸々埋沒するや、地下に欝屈せる火山力は再び活動して、其の東側に劒ヶ峰の火口丘を噴起せり、一ノ池は其の火口趾にて、其の後一ノ池の北壁を破

りて二ノ池の爆裂火口を生せり。

斯く屢驚天動地の大活動を爲せる御嶽火山も今は全く休眠し、僅かに地獄谷の谷底より白烟を吐きて古の名殘を止む。

山頂附近の地勢に就きて、左に略記すべし、

一、峰頭、

1、劒ヶ峰、中央火口丘、三千六十三米突、御嶽の最高點。

2、繼母岳、殘存せる舊火口壁の一部、二千九百九米突、劒ヶ峰の西南にあり。

3、摩利支天外輪山、弧狀を爲し內側劒ヶ峰に對す、懸崖に熔岩層の歷然たるを認む。

4、奥之院、劒ヶ峰の東南、西側は地獄谷に臨み、北端に日ノ權現あり。

5、繼子岳、御嶽山稜の最北端、二千八百二十二米突、繼子岳火口の北壁たり。

二、噴出火口、

1、摩利支天火口、中央火口丘(劒ヶ峰)を圍繞する最舊の火口、摩利支天岳、繼母岳、奥之院は此火口壁の殘存せる者なり。

2、一ノ池火口、劒ヶ峰は此火口壁の高處、略圓形を爲し直徑五百米突あり。

3、三ノ池火口、摩利支天の東端にあり、池水涸るゝこと無くして、倉本湯川の源を爲せり。

4、四ノ池火口、直徑七百五十米突、平素池水なけれども、ツメタ川の源を爲す。

三、爆裂火口、

1、二ノ池火口、一ノ池の北側を破壞せる者、碧水を湛へ北方に賽の河原あり。

2、五ノ池火口、三ノ池の北西、四ノ池の西南にあり、直徑七十米突。

3、地獄谷、劔ヶ峰と奥の院との間にあり、赤川の源を爲す。

4、白川火口、心臟形を爲す、白川の水源たり。

5、オホノゾキ谷、劔ヶ峰と日ノ權現との間に發し、兩側絶壁を爲す、此深谷は南走して三笠山の北側にて、黑澤本谷に合す。

6、黑澤谷、劔ヶ峰の東側にあり、谿谷所々に瀑布あり。

四、火口瀨、

1、白川、白川爆裂火口より發し、赤川と合す。

2、赤川、地獄谷より發し白川と合し濁川となる。

3、オホノゾキ谷、劔ヶ峰より發す、黑澤と合す。

4、黑澤谷、劔ヶ峰より發し、オホノゾキ谷と合し、御嶽湯川となる。

5、倉本湯川、二ノ池、賽ノ河原及三ノ池の水を合す。

6、ツメタ川、四ノ池より發す。

7、ヒオエ川、劔ヶ峰と繼母岳の間より發す。

五、寄生火山、

1、三笠山、田ノ原より高きこと七十米の小隆起たり。

2、小三笠、三笠山の東南鈴ヶ澤谷を隔てゝ相對す。

二七、奥之院、

岳神既に無盡の寶藏を啓ひて、愛惜するところなし、

千山萬岳の雲を蹈んで遠く來れる勞苦を忘る、二三の書信を郵司に托して、一萬尺の絶巔より、信を下界に傳ふ。

絶頂の小舍に休憩すること少時、王瀧口の降路に就く、劔ヶ峰より南方爛砂の間を下る、此の

坂路を俗に八丁だるみと稱す、其の盡くるところに王瀧口の奥社あり、日ノ權現之れなり。絶頂劔ヶ峰は地域王瀧村に屬すれども、御嶽神社の所管は三岳村黒澤に屬するを以て、王瀧にてはこゝに奥社を設けしなり。絶頂御岳神社の所屬に就きては、黒澤、王瀧両村にて古來相爭ひ、屢々訴訟せし事ありと云ふ。

日ノ權現より奥の院に至る間は、熔岩路を擁して嶮難云はん方なし、途中月の御門日の御門と稱するところあり。

王瀧口奥の院と劔ヶ峰との間は所謂地獄谷の深谷たり、之れ爆裂火口の遺趾にして谷底白烟の遙曳を見る。

日の權現より田ノ原方面の降路は、黒澤口八合目以上の降路に似たれども、急峻なる事彼れに過ぎたり、ことに黒澤にありては、到處休憩すべき小舍あれども、此方面は六合目なる田ノ原に至るまでは、唯九合目の上方に石を積みたる石室あるのみ、案内者は風避小舍と云へり、此附近を登降する者にはかに風雨の難に遭遇するときは、こゝに避難するの外策なきなり。

此小舍の上方は植物の種類尠なきも此附近より、漸く其の數を增す。

九合目の上方にて大殘雪を見る、岩罅石上短草倭樹の蝟附せる外、山骨裸出せる山腹一物の眼を

田ノ原

遮るなく、中腹よりは欝々なる大森林、波濤の如き飛驒の山々、斷續せる白雲の徂徠、其の眺望の雄大なるに暫時は我れを忘れて岩角に憩ひぬ。

二八、田ノ原、

田ノ原は本岳と三笠山との間にある低平卑濕の地なり、潴水の間禾本科莎草科の小草繁殖し、五月の小田の早苗に似たり、附近にて佐々成政の故事にて名高き黒百合を得たり。

絶頂附近を仰げば澎湃として打ち寄する雲の海霧の濤、押し返し揉み返し、黒金の如き巨人の胸板に掩ひかゝる有樣、壯絶又快絶。されど堂々たる大岳、漲る雲霧を劈て無限の大空を貫き、泰然として動せざる姿雄又偉。

漂々として動いて止まざる漂泊の姿と、千古萬年の昔より居然不動の姿とは、超然として宇宙の一切を絶す。

露光量違いの為重複撮影

小舎に入れば、一目あやしき主人、喋々喃々余が爲めに岳神の霊驗、崇嶺の怪異を說く、休憩少時にして前面の小岳、三笠山に賽し王瀧口に下る、以下欝々たる喬木帶、濕潤せる腐葉を蹈み、薄暮の如き林中を下る、五合目の上方寂々寥々たる林下の靜寂を破りて、遙かに下方に鏘々たる鈴聲を聞く、漸く近づけば廿余名の御嶽講白衣の信者傍目も振らず、異口同音六根清淨を唱ひひた走りに走れり、彼の無限の宇宙を領して、泡哮する山の雄姿に比して、何んぞ其の聲の憐れに幽かなるや、余は行き逸ひ樣一種の感慨に打たれいたく胸の迫るを覺えき。

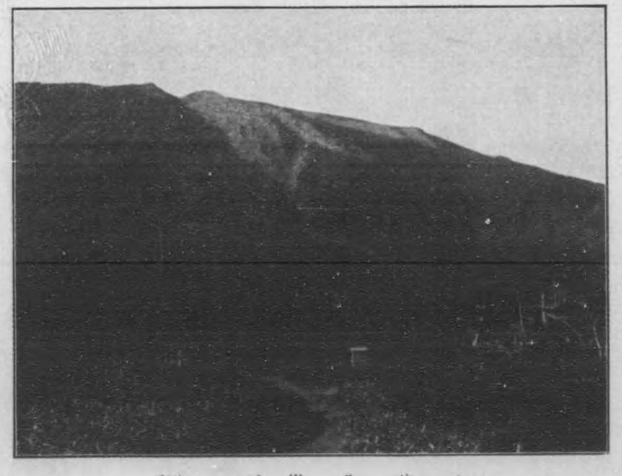
二九、清　瀧、

五合目以下一二の小舍ありしも立寄らず、四合目より少しく下りて、一たび喬木帶を出づるや、天地豁然、光線の明耀殆んど目を眩せんとす、陰欝冷濕なる喬木林を出でゝまばゆき許りの午下の烈光、草原には蒸騰する夏草の香、たちまちにして滿身汗に濕ふ。

華表の附近にイハッヽジ多し、石南科の喬木たる小灌木、花葉素より見るに足らざれども、寸許の小品指頭大の紅果を著く、曾て奥州岩木山の裏山にて、此果汁にて飢渴を醫せし事あり、今此小植物を見出しゆくりなくも岩木の裏山、原始的荒野を彷徨せし當時を想起し、一種の感慨あ

著者藏

木曾御嶽（金剛童子）



著者撮影

木曾御嶽（田ノ原）

露光量違いの為重複撮影

小舍に入れば、一目あやしき主人、喋々喃々余が爲めに岳神の靈驗、崇嶺の怪異を說く、休憩少時にして前面の小岳、三笠山に褰し王瀧口に下る、以下欝々たる喬木帶、濕潤せる腐葉を蹈み、薄暮の如き林中を下る、五合目の上方寂々寥々たる林下の靜寂を破りて、遙かに下方に鏘々たる鈴聲を聞く、漸く近づけば廿余名の御嶽講白衣の信者傍目も振らず、巽口同音六根淸淨を唱ひひた走りに走れり、彼の無限の宇宙を領して、泡哮する山の雄姿に比して、何んぞ其の聲の憐れに幽かなるや、余は行き違ひ樣一種の感慨に打たれいたく胸の迫るを覺えき。

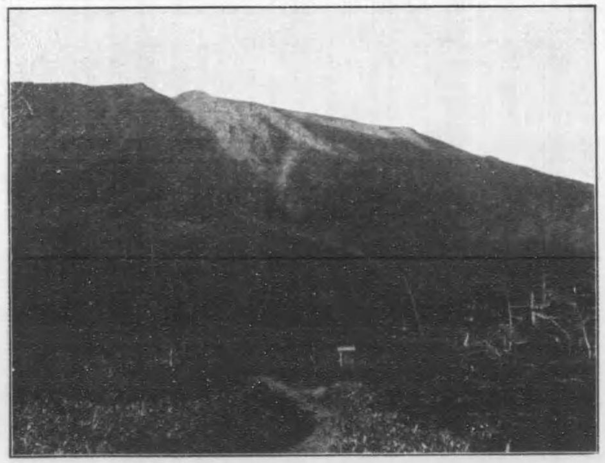
二九、淸瀧、

五合目以下一二の小舍ありしも立寄らず、四合目より少しく下りて、一たび喬木帶を出づるや、天地豁然、光線の明耀殆んど目を眩せんとす、陰欝冷濕なる喬木林を出でゝまばゆき許りの午下の烈光、草原には蒸騰する夏草の香、たちまちにして滿身汗に濕ふ。

華表の附近にイハツヽジ多し、石南科の最爾たる小灌木、花葉素より見るに足らざれども、寸許の小品指頭大の紅果を著く、曾て奥州岩木山の裏山にて、此果汁にて飢渴を醫せし事あり、今此小植物を見出しゆくりなくも岩木の裏山、原始的荒野を彷徨せし當時を想起し、一種の感慨あ

木曾御嶽（金剛童子）

著者藏



木曾御嶽（田ノ原）

著者撮影

り。

八海山大神の傍に黑石の小舍あり。

清瀧附近に至れば再び喬木林に入る、清瀧は扁柏の森林鬱々蒼々たる間にあり。幽邃の境、神秘の域、彼の普寛行者始めて王瀧口を開かんとして此地に到るや、惡魔路を遮りて進む能はず、乃ち此地に於て三七日間護摩を焚き、其の灰を以て夜叉の面を作り、之れを杖頭に掲げ漸く進むことを得たりと云ふ、此神秘的傳說は斯くの如き境域に於てこそ始めて起るべし、三合目以下ひたすらに走りて意外に早く王瀧に達し瀧家に投宿す、長子龜朝氏は余と師弟の緣あり、歡待至らざるなし、共に携へて氷ヶ瀨の絕勝を探る。

三〇、氷ヶ瀨、

王瀧より付地（つけち）新道を行くこと約一里にして、氷ヶ瀨の深潭あり、古人の詩に曰く

路盡懸崖老樹橫、　　阽危斯處使人驚、
長梯倒蹈巉崑下、　　獨木直凌雲霧行、
天女廟荒靑草合、　　驪龍窟古碧潭平、

風景先稱第一名、

曾山勝槩知多少、

巉嵒の奇深潭の幽邃、余は寧ろ棧或は寂覺に勝るを思ふ、新道の設けられざりし以前は、實に行路の難を極め牛馬全く通せず、氷ヶ瀨に近づくや斷岸絶壁行路絶ゆ、乃ち右方斷崖を登る途中梯子を設く、既に石壁の上に登りて俯瞰すれば、削立千仞密樹の間より深潭を見る、猶ほ進んで前面に下るや、潭水漸く現はれ一條の危橋の深谷に架せるを見る、實に空中に白虹の現出せしが如し、次第に下りて橋に近づくや絶崖に梯子を架す、橋に至り仰げば巨巖秀立天を摩し、俯瞰すれば深谷遙かに藍を湛えたるが如し、對岸に辨才天の小詞あり、附近全く俗塵を絶ち眞に仙境と云ふべし、新道開けて往還古の危なく橋は昔の素朴にあらず道は昔の棧道にあらずと雖も、山の幽邃水の深碧今も昔に異らず、眞に谿谷の幽趣を探らんと欲する者は、必ず氷ヶ瀨を忘るる勿れ。

三一、崩越(くずし)え、

次日瀧家を辭して棧に向ふ、龜朝氏余を送つて鞍馬(あんば)の橋に至る、鞍馬橋は木曾の支流王瀧川の峽谷に架せる奇橋なり、両岸壁立千仞、神鉞鬼斧の痕頗る怪奇、森林鬱々碧潭油の如く、彼の歌

州の奇勝、澳國エドムンドグロウに劣らずと稱せらる、唯舟を操るの美人なきを憾とするのみ、橋畔に於て龜朝氏と袂を分つ。

青葉茂れる崩越え、遲咲きのツヽジこれや萬綠叢中の一點紅。

一鳥鳴かず一葉動かず、綠蔭氣冷にして暑さを知らず、森閑たる峠道吾れは夏の日の永きを愛す。

頂上に峠の茶屋あり、

御嶽の全容は一木一草の之を遮るなく、威容嚴として眼前に聳ゆ。

黑澤合戸峠より仰ぎしときは、山頂左右に廣くして廣大雄偉、こゝより望む山姿、頂上鋭尖なれども崇高深遠。

この崇高深遠なる御嶽と對座し、茶亭の主人より御嶽講先達普寛、一山、一心等二三行者の傳說を聞く。

一度此峠を下らば、再び御嶽の雄姿を仰ぐの機なし、前程を急ぐ旅にもあらねば、一刻もとあかず眺めぬ、峠を下りしは午前十時なりき。

三二、常盤橋、

午前十一時半常盤橋に達す、

橋畔の茶店に入り、數個のわらび餅に飢を凌ぎ間道より直に棧に向ふ、細徑かすかにして迷ひ易きも、到處農家あれば獨り往くも路を失せず、或は農家の庭前を過ぎ屋後を行く、桑摘む少女に道を尋ね、鍬負ふ農夫に方向を聞き、一小峠を越えて始じめて木曾川の谿谷に出づ、谷に沿ふて下り棧の下流に出づ。

一葉の扁船此岸にあれども船子なく、橋礎あれども橋板なし、附近に人家もなければ、如何にして渡らんかと暫時躊躇せしが、折りしも遙か崖上より髪をおどろと振り亂し、何事をか叫びつつ、走せ來る乙女あり、余は狂女かと思ひぬ。

前面には木曾川の激流奔湍後には狂女の迫るあり、意外の事に茫然たりしが、近づくを見れば狂女にはあらで十四五歳なる乙女の、余が爲めに船を行らんとて來れるなり、余は少しく危ぶみたれども少女はいと落附き拂ひて、一條の鐵線を手繰りて難なく木曾の激流を渡りぬ、鳥の巣の如き頭髪、あらめの如き弊衣、かよはき纖手一條の鐵線を命の綱として木曾の奔湍を渡し、僅かに數錢を得て生計の助となす、都門に育ちし乙女ならんには輕羅を纏ひ、幾種の香油は彼の髪に香るならんにと、余はそゞろに涙ぐまれぬ、されど彼の都會の惡習に染める虛榮の權化、たとへ身には綾羅を纏ふとも、畢竟之れ一團の腐肉に過ぎず、谿流を鏡として風に梳るも、深山の奥自然の大景に俯仰して、一生を送ることこそ却て人生の至幸ならん。

棧や命をからむ葛かつら、　ばせを

の小碑前に、古道の危かりしを忍ぶのみ。

棧より半里にして、上松に入る。

三三、寐覺床、

上松より半里寐覺に着す、街道より右に入る事二丁臨川寺あり、雛僧出でゝ余の爲めに案内す、境内より下瞰する木曾川の絶勝、さすがは天下の名勝。

木曾川の源流　日本アルプス地方より發し、山峽に責められ谿間に苛まれ、或は激して急瀨となり、或は湛えて深潭となる、無常流轉の幾變遷、こゝに來りて又堅緻なる花崗岩にはゞまれ、水

は岩に激し岩は水に逆ふも水が晝夜をすてざる不斷の浸蝕力の爲めにこゝに峽谷を穿ち、奇石欹ち怪岩横はる。

両岸の積翠、花崗岩の皓潔、水の深碧と相映發し、木曾溪流の美こゝに極まれりと云ふべし。

一瀨一石皆名あり、曰く浦島堂、曰く床岩、曰く獅子岩、曰く上臈岩、曰く大釜、曰く小釜、曰く屏風岩、曰く疊岩、曰く烏帽子岩、曰く象岩、曰く何、曰く何、一々記述せんこと余は其の繁に堪えざるなり。

今地學的見地より、寐覺の床の成因を見るに、花崗家は戸隱、妙義、耶馬溪地方の岩石の如き集塊岩と性質を異にし部分的硬軟の別なきも、種々方向を異にせる節理を有するにより、之れが爲めに壞崩して怪岩奇石を生ず、此附近の花崗岩の節理は互に直角に交はる三方向をなす、即ち一は水平に二は東北三は南北、之れが爲め方形に切截せる巨岩の重疊せるが如き奇景を生せしなり。

臨川寺の域内に鏡の池あり、浦島子が使用せし三叉の竹竿に至つては滑稽の極、愚夫常に勝地の價値を損すること多し。

鏡ヶ池の清冽玉の如き泉水を味はんとしてコップを借る、寺内の人障子の破れ目よりさし出したるには一笑を禁ずる能はざりき。

三四、駒ヶ根村德原、

臨川寺を出でゝ南行一二丁、路傍に清水ありしところより左折して細徑に入る、行くこと五町ばかりにして路を白衣の行者に問ふ、之れより行くこと二丁許滑川の岸に出でなば、橋を渡らずして左方に川岸を上れ之れ德原路なりと、德原は駒ヶ岳山麓、駒ヶ岳神社の神官德原氏の家あるところなり、行者の言の如く行くこと二丁許にして、滑川の水勢輕捷たるを聞く。

滑川は駒ヶ岳に發し所謂三十六峰の水を集めてこゝに來る、駒ヶ岳は全山花崗岩水頗る清冽滑なること油の如く石は光澤玉の如し。

始め細徑を索めて進みしも、忽ちにして道を失し、或は叢中を分け或は危き崖を横切り、或は用水樋の上を渡り、辛らうじて磧に出づ、時は午后四時、天候一變驟雨將さに來んとして、雷鳴轟々、電光閃々、草頭樹梢しきりに動く、

空腹、疲勞、雷雨、心にかゝる折りから、此磧にて全く路を失し前路不明。

三五、徳原の一、

滑川の磧にて路を失し、右か左かと彷徨せしに、里人の來たるに遇ひ初めて路を尋ね、行くと二三町にして二三の人家あり、徳原氏の家を尋ねしに猶三丁を隔る由、疲れし足を曳きて行けば、遙かに二軒の農家を認む、路傍に草刈る老媼に問ふて、其の右方なるが徳原氏なるを知り、始めて安堵の思をなす、殆んど夢中にて入らんとせしに異臭鼻を衝く、怪しみて四邊を見れば、柱上に徳原家馬屋入口なる小札かゝれり、あまりの狼狽に自からあきれ右方を回はりて家人に來意を告ぐ。

此家の構造を見るに、表口より來る者は、馬屋の入口を普通の入口と誤り易し、去れば特に馬屋入口の札を掛けたるなるべし、左なくば何人か馬屋に標札を掲ぐる愚をなさんや。

三六、徳原の二、

駒ヶ岳は御嶽と共に、木曾の二名山として並び稱せらるゝも、御嶽の年々繁昌するに反して、此山の登山者が次第に減少し行くは惜むべし、其の原因や種々あるべしと雖も、山麓に於て登山者

に對する何等の設備なく一の便宜を計らざるが如きは、確かに其の一因たらずんばあらざるし り、余の最も不便を感せしは案内者の無かりし事なり、此行駒ヶ岳を彼方に越えて伊那に下る豫定なりしが、夏蠶繁忙の故を以て人夫に應ずるものなし、止むなく百方辭を盡して頂上伊那方面下口までの約束にて一人を得たり、案内料の如きも頗る不廉、案内者さへ斯の如し、登山者の減少故なきにあらず。

嗚呼御嶽は年々登山者を增し、駒ヶ岳は登る者少なし、然れども御嶽は年々俗化し、駒ヶ岳は日々太古の自然に歸らんとする者なるを思へば又何をか歎かん。

三七、滑川の畔、

家人が朝餐の仕度に柴折る音に夢醒む、午前三時半瞼未だ重く起るに懶を努め床を蹴て起つ、登山に際し先づ氣遣はるゝ天候如何にと眺むるに、星の光り空の色今日も亦快晴なるべし、直に登山の準備を爲す、人夫も來れり、然かも平服の儘にて何等登山の仕度を爲さず、余は先づ一種の不快を感じぬ、兎角する内東天白く、三ッ四ッ二ッ殘る星さへ光薄し。

午前四時出發、しばし石田荒圃の間を行く、山路にかゝれば道芝の露深く、鞋底冷かに冷凉秋に

似たり、何れの高山に登る者も、廣漠たる裾野をよぎらざるべからず、百花絢爛の裾野唧々たる蟲聲處々孤立せる二三の喬木、畫趣あり詩趣あり、されど夏日の裾野旅行、何等烈光を遮るなくして苦熱堪え難きに、獨り駒ヶ岳の登路に至りては、村里を距るや間もなく、路喬木帶に入るを以て、吾人は裾野の苦熱を知らずして、直に深綠叢中の人となることを得。

五時二十分、滑川の畔に出づ、登路消失。

三八、喬木帶、

滑川の河原までは、草苅る里人等の始終往復するを以て山路判明なりしも、此所以上は登山者の稀に來るのみなれば登路荒敗せり、河原にて一度消失せし登路を尋ね、對岸に細徑を見出しぬ、夏草彌が上に生ひ茂り、葉末の露繁くして衣袂全く潤ふ、叢の中を行くこと約三四丁、之れより路全く喬木帶に入る、坂路急峻登攀頗る艱む、駒ヶ岳の登路は、其の連峰の前衛たる里人がマルツムジと稱する連峰を攀ぢ殆んど其の絶頂に達し、其の所より峰傳ひに頂上に至るものなり、而して此峰は德原に近く聳立せり、されば德原よりは此蠱々空を刺すが如きマルツムジと三ノ澤岳を仰ぐのみ、他の連峰は八合目に達せざれば見ること能はず、絶頂の如きは九合目に至りて、始

めて仰ぐ事を得るのみ。

三九、鐘懸小舍、

マルツムジの峰は全山喬木繁茂し其の傾斜の急峻なる、御嶽等に於ては曾て見ざりしところなり。然れども數年前此の喬木帶中一面に密生せし笹の枯死せしを以て、登路を遮る障碍物なし、七時十五分、鐘懸小舍に達す、之れ登路の半程五合目の處なり小舍は全く腐朽破壞せり、此處より一二丁にして清泉あり、金剛清水と呼ぶ。之れより頂上までの間水あるところは此處と八合目の上方と唯二ヶ所のみなり、金剛清水は清冽比なしと雖も水量少なく只涓滴の岩面より滴下せるあるのみ、余は此附近に於てホザキイチエウランを得たり、花崗岩の喬木帶、常に蘭科植物の奇品を見る。

四〇、遠見塲、

五合目の小舍を發し登ること小許にして鐘懸岩あり、一大巨岩斜に谷底に墜落せんとして危く支へられたるもの登山路中の一奇觀たり、此巨岩のあたり、オホコメツヽジの可憐なる白花を見

る、麓より既に四時間以上を費せしも、未だ容易に喬木帯を脱することゝ能はず、進むに從ひ森々たる巨幹枝椏密攢天日を漏さず、深く積れる腐葉を蹈んで行く、陰湿不快たとふるにものなし、行けども〳〵灌木帯に入らず、植物分布の狀況も略同一にして興味なく、四圍の展望全く妨げられたれば普通登山の客ならんには、此あたりにて全く倦み果つべし、此登路の如く急峻なる坂路に時を費すこと多きは、他の山にては殆んど見ざるところなり。

九時喬木漸く其の高さを減じ將さに灌木帯に入らんとするとき、破壞せる中小舍を見る、御嶽にありては新に所々室堂の新設せらるゝを見るに、此山に於ては何れの小舍も皆破壞せり、覺えず荒敗せる駒ヶ嶽なる一句を叫べり。

漸くにして始めて展望開濶なる遠見場に達す、刀利天の小祠あり。

四一、王の窪の小舍、

午前十時、八合目の小舍(小舍の跡のみ)に達す地域灌木帯に入る、高山植物の盛んに開花せるを見る、此附近より路は前岳の右方側面、急斜せるところを横過す、絶頂、玉ノ岳、寶劍等前面に現はれ、純潔なる花崗岩の緯壁、見るからに壯快を極む。

絶頂は圓頂廣濶巨人の頭顱の如く、彼の火山頂の嶙峋たるに似ず、圓滿具足頗る温容あり、寶劍が嶽に至りては、矗々として一劍寒く天を刺すが如し。

ハクサンイチゲ、グンナイフウロ、キバナノコマノツメ等、高山植物の多種繁殖發育の旺盛なるを見る、形容肥大花色艶麗、莖葉の光澤さへ他山の者に異れるの感あり、花崗岩の高山と新火山岩の高山とは、所産植物の分布及び發育に至大の差異あるを覺ゆ。

前嶽と主峰との間にある窪地を玉の窪と稱し、完全なる無人の小舍あり。

小舍より登ること七八町にて絶頂に達す、參謀本部三角點及び數個の小祠あり。

四二、エーデルワイス、

頂上附近ミヤマウスユキサウを産す、此山に産する高山植物中特に吾人の注意を惹けり、高さ一寸五分乃至三寸位の小菊科植物なれども、實によく高山植物の特性を具備し、全體純白雪を欺く毛茸を密生し、優雅高尚よく比すべきものなし、獨逸アルプス及び本邦の他高山に産する者に比するに、形態著しく矮少確に其の一變種となすべきもの、余はヒメミヤマウスユキサウなる名稱を下

露光量違いの為重複撮影

すを以て至當と信ず、ヒメは只小形を意味するにあらず、實物を一見するときは、何人も姫なる感想の適切なるを知るべし。

本種は栽植困難開花すること尠し。

四三、絶　頂、

駒ヶ嶽絶頂の眺望は、御嶽に一籌を輸すと雖も、伊那の溪谷を隔てし南日本アルプスの連嶺を望むべく、木曾溪の彼方白雪を冠せる御嶽、乗鞍等の雄峯亦偉觀たり全山花崗岩よりなれるを以て彼の新火山岩の黝色なるに反し、まばゆきばかりに山色鮮かなり。

彼れを嚴冬の夕に比すれば、之れは陽春の晨の如く、一は冷かにして一は温情あり、彼れは何處までも吾人を威嚇し恐怖戦慄の主題となり、之れは吾人を懐柔するの情あり、花崗岩の山に就きて矧川氏の文あり。

「日本國の地質たる花崗岩の普遍すること火山岩と殆んど比肩し、其の同質なる片麻岩亦た多在し、日本の景象をして一層の豪爽雄快を添へしむ、蓋し花崗岩片麻岩の本色は、堅硬なる所、純潔なる所、色澤の燦然たる所、實に其の堅牢なるは堂々たる丈夫漢の如く、昂然として幾

頂絶　岩子鳥

ム望ヲ上頂岳ヶ駒リヨ倉小窪玉

岳澤ノ二　岳草春　岳南　岳澤ノ三

岳國冨

梅谷慶長氏作

ム望ヲ岳ヶ駒リヨ近附松上

露光量違いの為重複撮影

すを以て至當と信ず、ヒメは只小形を意味するにあらず、實物を一見するときは、何人も姫なる感想の適切なるを知るべし。

本種は栽植困難開花すること尠し。

四三、絶　頂、

駒ヶ嶽絶頂の眺望は、御嶽に一籌を輸すと雖も、伊那の溪谷を隔てし南日本アルプスの連嶺を望むべく、木曾溪の彼方白雪を冠せる御嶽、乗鞍等の雄峯亦偉觀たり全山花崗岩よりなれるを以て彼の新火山岩の黝色なるに反し、さばゆきばかりに山色鮮かなり。

彼れを嚴冬の夕に比すれば、之れは陽春の晨の如く、一は冷かにして一は温情あり、彼れは何處までも吾人を威嚇し恐怖戰慄の主題となり、之れは吾人を懐柔するの情あり、花崗岩の山に就きて刱川氏の文あり。

「日本國の地質たる花崗岩の普遍すること火山岩と殆んど比肩し、其の同質なる片麻岩亦た多在し、日本の景象をして一層の豪爽雄快を添へしむ、蓋し花崗岩片麻岩の本色は、堅硬なる所、純潔なる所、色澤の燦然たる所、實に其の堅牢なるは堂々たる丈夫漢の如く、昂然として幾

頂絶　岩子廻鳥

ム望ヲ上頂岳ヶ駒リヨ令小箕玉

岳崗岩

岳澤ノ二

岳澤ノ三

岳澤ノ二

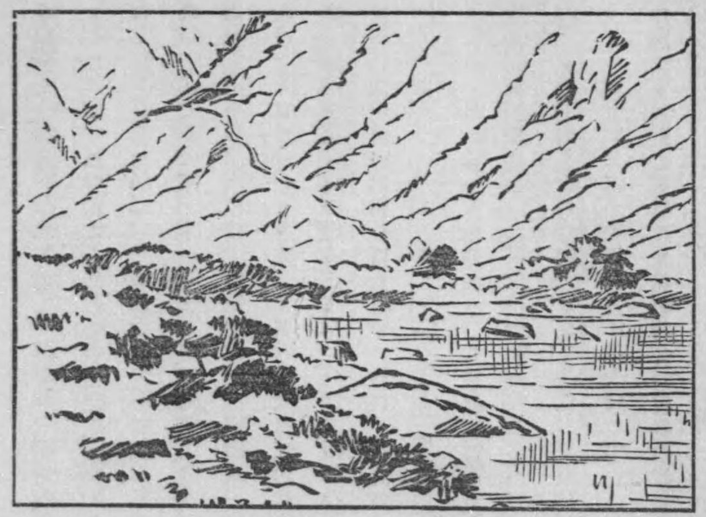
岳春

岳崗

岳澤ノ三

ム望ヲ岳ヶ駒リヨ近附松上

多岩石中に覇を稱し來り、其の組織亦た雜多物を交へず、簡單純潔、此間の流水も亦た澄徹白練を布くに似、且つ岩質堅硬なるを以て、軟弱なる植物は其の上に蔓生し得ず、太氣雨電光線に最も曝白するを以て、其の表面常に清新色澤燦然四面に煥發す、唯だ酸化鐵を多量に包含するものは、其の色淡紅、而かも會々夕陽殘照の之れに掩映するや、忽にして桃花撩亂絕愛すべきの感あり、之を要するに日本の地質たる、花崗岩、片麻岩到る處に普遍し、特に中國の大概、本州の中部は擧げて此岩より成り、其の結果は江山の洵美、流水の澄徹、太氣の清爽、地盤の堅硬、土壌の清潔黴菌發達の豫防となり、無形上亦其の所在民人の氣風を感化する所多し、蓋し伊太利は歐羅巴洲中山水明媚の區と稱す、然れども其の地質たる花崗岩、片麻岩極めて少く、就中美術の淵藪たるミラノ、フキレンゼ（所謂フロレンス）の四周に到りては、大概黯白黯蒼なる石灰岩に成り、ロムバルデヤ州の如き、古來石灰の產出を以て名ある所、太陽の光線之れに反映するや、最も凄凉愴楚なりと、是れ伊太利の文人畫師が、古往今來「山嶽」に對しては常に悒鬱隱憂なる觀念を以てす、而かも若し夫れ伊太利の地質にして花崗岩片麻岩多からんか、國の地勢上流水の浸蝕も激烈に、引きて其の詩文繪畫の山嶽を描寫せるもの、必ずや豪爽雄快を極めたるなら



ん、日本や火山岩に加ふるに花崗岩片麻岩を以てす」造化の厚賚豈に嘆謝せずして可ならんや」。（風景論）

花崗岩と石灰岩との比較取て花崗岩と新火山岩との、比較となすべく又駒ヶ嶽及御嶽の比較となすべし。

四四、農ヶ池

絶頂に止まること三時間、正午、農ヶ池に下る之れ此池の附近に產する、十字科の稀品、ハクセンナヅナを採集せんが爲めなり、本種は獨人シュミッド氏が嘗て樺太島にて發見せしもの、本邦にありては他に月山及日光の両產地あるのみ、此山に產するものは、矢田

部博士及三好博士が採集せられしもの、圖說は植物學雜誌第三號にあり、本種は其の花美なるにあらず、其の形容雅なるにあらざれども、其の產出稀少なるを以つて採集家の珍とするところなり。

農ヶ池は周圍三町許り、絶頂より三四町東方に降れるところにあり、盛夏の候と雖ども附近に殘雪多し。

古來より此池中に大蛇ありと呼ばれ神秘的傳說あり、高遠藩士坂本天山曾て此山に登り池中に入り、刀を拔きて縱横之れを切りしに、池水皆紅なりしと云ふ、天山は夙に蘭學を修め幕末勤王の志士たり、其の登山の際石に刻しつ左の詩を賦す。

靈育神駿、　高逼天門、
長鯨封城、　維嶽以尊、

坂本天山、

四五、雷雨

農ヶ池附近にて意外に時を費し、人夫に別れてより既に二時間、時正さに二時、行を急がざれば

薄暮までに伊那部に入らんこと覺束なし、特に不知案内なる坂路、豫想外に時を費すことなきにあらざれば、草鞋の緒を固ふし、携帶品を肩の前後に掛け、咲き亂れたる植物を顧る遑もなく、蒼皇として下山の途に就く、時に東南の風强く、伊那方面の谷底に遠雷の轟くを聞く。

途中九合目の石標を見出し、かゝる道しるべあらんには、何程の事もなからんと、一きは心强く感じぬ、此處より右折し東方に突出せる支派を峰に沿ふて下れり、

中腹以下に重疊沈澱せし雲霧、にはかに岳頂目懸けて吹き上げ、須臾にして白濛々、天地全く白盡、斯のごとき天候の激變は、高山登攀の經驗あるものにあらざれば、想像だも及ばざるところなり。

喬木帶中に下るを得ば路必ず判然すべし、破壞せりと雖も辻の小舍は雨露を凌ぐを得ん、雲霧の襲來、僅かに二三十分の後なりせば、何事もなかりし者を、今は農ケ池附近にて時間を徒費せしを悔ゆれども詮なし、

四六、霧中の彷徨

不幸にも余は八合目三角點の附近にて全く路を失せり、心せかるゝまゝに右左と灌木の生え茂れ

る間を尋ねぬ、人の足跡と思はるゝが左方偃松の間に通せしを以て、こゝを下りしに僅かに數十間にして到底下る能はず、假松中に入るの危險は熟知せるを以て、再びもとの位置に戻り又他方に路を求めたれども遂に見出す能はず。

暗黑の雲、轟々たる雷鳴、閃々たる電光、刻一刻に激甚、白雲濃霧遂に雨に變じぬ。

防寒防雨の準備なき余は、頂上に近き此所にて暴雨に遇ふ、危險之れより大なるなし。

あはれ此行登山者多き御嶽、駒ヶ嶽、何等特別の用意を爲すの必要なしと信じたるは千慮の一失、日本アルプスの峻嶺幽谷、常に無人の境に出入する身の、駒ヶ嶽行、何程の事やあらんと輕侮せしこそうたてき、油斷大敵、言陳腐なれども此に於て其の意新なり。

暫時雨中に彷徨せしも降路遂に見出す能はず。

よし今雨中喬木帶に下るも、辻の小舍に達する能はざれば露宿の方法なし、如かず再び絶頂に上り、玉の窪の小舍に歸り一夜を明さんにはと意を決して絶頂に向ふ、登山に就きて多少經驗ありと自信せし余も此際頗る狼狽し、寫眞用の三脚を何れへか遺失しぬ、(翌年に至り伊那郡赤穗警察署より、拾得せし者ありとて送還せらる、)

風强く、霧深く絶頂に達する間の困難は名狀すべからず、漸く頂上に達せしは午後六時頃なりけ

ん、(時計は頂上にて見たるとき四時二十五分の處にて止まり居れり以後の時間總て想像)之れより玉の窪の小舍に下る。

四七、悽愴の一夜

玉の窪の小舍に着して先づ第一に心を痛めしは薪木なりき、雨に濡れ食に乏しく防寒具さへ無き余の運命を支配する者は焚火あるのみ、然るに捨つる神あれば助くる神あり、小舍に入りて見れば何人が焚き殘しけん、多量の枯木は一隅に積まれたり、地獄で佛、實に余は衷心より其の天祐を感謝せり、去れど一夜を明かさんには猶ほ不足なれば、雨を浸し附近にて、假松の枯枝を集めぬ。

火を焚きて濡れたる上衣を乾かし、始めて蘇生の思あり、人夫の贈りし餅を食らひて餓をも忘れぬ。

風を犯し雨を衝きて薪木を集むる際は、一心不亂何物をも思ふ遑なかりしも、猶ほ絶えず一種不安の念ありき。

こゝに餓を忘れ、五體煦温を覺ゆるや、心身の疲勞其の極に達せる余は又何等の慾望なし。

默然として靜座すること多時、夜の更くるに從ひ、風靜まり雨も止み萬籟死して聲なく、一萬尺の天界五慾の臭骸を脱して、一物の胸裏を往來するなく、心は明鏡止水の如く、全く無念無想の境に達しぬ。

日本アルプス縱走の際、其の絶頂に於ける月夜の感と、玉窪小舍の一夜の感慨は、余の終生忘るる能はざるところ、惜い哉語るに辭なく、記するに筆なし。

異樣の夢に驚き覺むれば、焚火消えて黑闇々たる此刹那、余は愕然として全身冷水を浴せしが如くなりき、

あゝ……俗物、遂に仙たる能はず。

天明まで約二時間、永かりしこと千秋の思ありき、其の間の大靜大寂、悽愴殆んど耐ふる能はざりき。

四八、下山

翌午前六時、玉の窪の小舍を出で、再び頂上に登る、前日の快晴に反し、雲霧多く、四邊の展望全く妨げらる。

前日霧中に路を失せし八合目に至り、注意して四邊を搜りしに、降路は前日主として搜索せし反對側なる右方にあり。

七合目に至れば既に喬木帶に入る、林下固有の植物多く特にオサバ草は、他に產地少なき者、高山植物と稱する能はざれども、亦山草中の一稀品たり。其の櫛狀を爲せる葉のみを見るときは、羊齒類に似たれども、中央より花莖を抽き、純白色の小花を開くを見て、何人も其の崇高なるを知るべし、罌粟科オサバグサ屬に屬す、此屬は本種一種を有するのみ、產地は駒ヶ嶽、伊那方面の喬木帶及八ヶ嶽、黑姬其の他二三あるのみ、栽培容易なり只烈光を忌む、白晝猶ほ薄暮の如き喬木帶に產する植物は白花の者最多し、ッバメオモト、サンカエウ、シラネアフヒの如きは紫色なれども其の色淡し植物の花色も產地の狀態に適應せるを見るべし。

午前十時漸く六合目に達す、辻の小舍は全く破壞して休憩すべからず、

前日幸に路を失はず此小舍を目的として降りしならんには、却て雨中如何なる困難に遭遇せしや、頗る寒心すべきものありしならん、兎に角に玉の窪の小舍にて安全に一夜を明せしは、不幸中の幸なりしなり、實に世間萬事塞翁が馬よ。

朝來食すべき物なく、且つ夜前の睡眠不足の爲め疲勞一層甚だし。

辻の小舍にて降路三支となる、右すれば宮田左すれば伊那郡、直下すれば小出に達すべしとは、德原にて神官より注意せられしところなれば、左に下る。

漸々下るに從つて路一層險惡、喬木帶を脫すれば、飢餓疲勞、殆んど其の極に達せる余は、嚇々たる烈光を浴して卒倒せんとせしこと幾回なるを知らず。

午後二時伊那郡に達し柳屋に入りし時は、眼眩して心氣漂々たりき。

高原の雨、峠の霜

一、御代田驛、

秋晴十里、淺間の高原は一面の紅葉に飾られて、比類なき美景を見ることを得べしと想像せしは、全く空想に歸しぬ。

奇怪なる雲は淺間の全山を蔽ひ、南へ南へと吹き送らるゝ雨雲は、自分が御代田停車場を出づる頃には、大粒の雨となつて眞額へ二つ三つ發矢と打ち付けた、これはと驚き莫座と笠とを買ひ求めぬ。

御代田……御代田、

此停車場を過ぐる毎に、此停車場の名を聞く毎に、自分は今より十幾年の昔を、回顧する事を禁ずる事が出來ぬ。

學生時代に百幾十の同窓學生と共に、修學旅行として此地へ來た事がある、之れが自分が始めて信州に入つた時であつた、今では久しく高原の生活をして居るが、此狹少なる山谷は故郷ではない、自分は實に關東平野の眞中で人となつたのである、山國の人は朝夕山に馴れ、却て山に就て

左程に興味を持つて居らぬ、之れは日本ばかりではない、所謂山嶽狂と云はるゝ人々には、平野の人が多いのである。

草野茫々一望無限の平野は、平和な感じがあるが、いかにも變化が少い、晴れた朝でも雨の夕でも趣味に乏しい、平凡の景に馴れた者が、一度山國に入つて見ると何物も珍らしく、不思議に吾人の心をそゝる者がある。

時々刻々に變化する山の色、特に雪の山の夕陽を受けた紫色に至つては、思ひ出したばかりでも胸が躍るのである、彼の峥嶸の山を見ては直に登つて曾て覺えのない、秘密が探りたいと思はぬ者はない。

自分が始めて信州へ入つたのは、關東平野では既に櫻が散つて、眼に涼しい青葉の頃であつた。

横川驛から峠を上る時、櫛狀鉄軌と機關車の齒車の嚙み合ふ音が、何だか足の底から骨髓を傳はつて、腦天まで響く樣な一種の不快な感がある、夫れのみならず、トンネルを出入する毎に吹き鳴らす汽笛のけたゝましき叫聲が、乘客を威嚇する樣に思はるゝ、トンネルに入る毎に石炭の烟にむせび、明暗廿六回漸く輕井澤へ着いた時忽ち眼界が開けて、恰もダークルームを出て始めてパノラマを見る樣な氣がした。此所にくるとすべての景色が一變する、安積艮齋の記文にも輕井

澤の所に「信州爲天下絶高之地驛外平楚十里萬山環立物象頓異云々」とある、物象頓異とは誰もこゝで感ずるところである。

前面離山を隔てゝ淺間山が盛んに噴烟して居る、關東平野で筑波や日光の薄紫の山の外見た事のなかつた、百余名の學生は皆快哉を叫んだ。

又高原の春遲く四望悉く冬枯の景色で梅さへ蕾堅く、荒凉蕭殺たる有樣、吾々は春の末に再び冬が來た樣に思はれた、又何處となく大陸的だと感じた、此時の深き印象は今でも忘れる事が出來ぬ。

御代田で下車して大部分の學生は岩村田へ向ひ、余等二十余名の有志者は、離山の洞穴に棲む蝙蝠の一種を採集する目的で追分を經て離山に向つた、此時淺間の裾野で同行中の學生八名が行衛不明となつた、離山から御代田へ歸つたのは黄昏であつたが、八名の學生はまだ歸つて來なかつた夜に入りても歸らぬ、一同心配して尋ねの人足を出そうとしたところへ、一同の者はヘトヘトに疲れ果てゝ歸つて來た。

聞けば、途中から淺間を目懸けて登つたとの事であつた、裾野から見れば頂上へ直に登れそうに見える、之れは何れの高山でも一樣である、東海道から見た富士なども誰もそう思ふのである。

こんな出來事があつた爲めに、御代田は自分には忘れられぬ名となつたのである。

當時我等が休憩して搜索の人夫を出そうとした茶屋は、どこであつたか今來て見れば一向に分らぬ、井幹館や、越後屋などゝ云ふ茶屋は其の頃ありしや否や全く覺えが無い。

二、大久保橋、

御代田停車場より舊中仙道の街道を追分の方へ進むと、關東の平原等には見られぬ唐松の林や、瘠地を開墾した、あわれなる桑畑などが道に沿ふて有る、淺間はやはり中腹以上雲の中だ。

七八町行くと大久保橋と云ふのがある、此小川の流れて居る小溪を大久保と呼ぶのであろう、水は少いが甚だしく浸蝕せられて谷が深く橋が恐ろしく高い、うつかり渡れば何も氣が付かぬが、兩岸の切り立つた樣な絶壁を見ると、追分原の地層がよく分るのである、火山砂や火山礫が幾層にも重なつて居るところを見ると、淺間火山の噴出が、嘗ては驚くほど盛んであつたことが分かる。

大久保橋から進むと兩側に唐松の造林地がある、日光の赤沼原から仰ぐ男體、太郎を望むとき、原頭に唐松の喬木が三々五々不規則に聳立して居るところを見ると、實に何とも云へぬ感興が起

るが、此所の唐松林の樣に、三角定規をあてゝ植え付けた樣な林は、直線美などゝ强てこじつける者もあるかも知れぬが、自分は大嫌いだ、こんな林は野火でも入つて燒けてしまへばよい、否淺間が大活動をして熱砂の下に埋めてくれゝばよい。

つまらぬ事を考へて居る間に、淺間山麓の方が廣々とした追分原の眞正中に出た。

三、覆面の淺間、

秋老いて黃金色なりし唐松林も褐色を帶び、朝每の深霜に原頭の草葉うら枯れて蕭殺たる高原の眞正中、白雲の覆面を爲せる淺間に對して、何とも云ひ知れぬ感慨に打たれた、秋晴紺碧の大空に矗立せる淺間に對せるよりも一層深き感慨なり。

雨はやはりポツリ〳〵降て居るが何と譯もなく、笠と蓆座とを捨てゝ、街道より原中に飛び入り、我も淺間も默然として相對すること多時、路上の物音に振り返れば、追分の方から油に汚れた車を引きて、油賣の老爺が喪心せし如く、唯器械的にカラカラコロコロと音を立てゝ來た。車の音が聞えなくなると、又々重い空氣が前後左右より自分の身體を厭し付ける樣な感じがした、晴れた日であつたならば、假令秋は末でも華やかな高原も、雨には只荒凉靜寂と云ふ感がある許りである。

四、原頭の鷄鳴、

靜寂なる原頭に、何處からか鷄の聲が聞えた、沈靜の空氣に忽ち彈力のある一種の波動が傳はつた、此大靜大寂全く生氣なき天地間に、自分の外にも活ける者があるなと氣が附いて始めて我に返つた。

雨にぬれた頭髮より冷かな雫が襟元へ傳はつた、肩のあたりもしつとりとぬれて居る、驚いて街道へ戻り、笠と蓆座とを元の通り身に付け追分の方へ進んだ、併し今日は何處まで行ふと云ふ考へもないのだから、今の鷄の聲がなかつたなら此原の中で日が暮れたかも知れぬ。

五、「左いせ」、

淺間の裾野の眞正中で、中仙道と北國街道とが合一して追分驛に入る。

其の合點に二十三夜塔などが五六基立て居る、いかにも古驛の入口らしい、最高い常夜燈の臺石に「左いせ」の三字が彫り付けてあつた、之れを見て自分は何か新發見でもしたかの樣に思はれ

た、今時の人ならば必ず右北國街道左中仙道とか、或は右小諸を經て上田、左御代田を經て岩村田とか、いかにも知惠のない實用的な文字を彫り付けたであろう。

此裾野に据ゑられた常夜燈は、伊勢の大神宮に供へた者であろう、伊勢參宮の客に對して「左いせ」、こんな簡明な趣味のある道しるべがあろうか、中仙道を通る者は、伊勢參宮の者の外眼中に置かぬ此書方がいかにも氣に入つた、伊勢參りの者には、小諸もなければ岩村田もない、木曾もなければ勿論京都もない、唯「左いせ」、之れで十分である、此三字の外に加ふべき何者もない、實に詩的だ、彼のつまらぬ事を山鳥の尾の長々と書く人々は、少しく之れに學んだらよかろう、今一度繰り返さう、

嗚呼「左いせ」

六、一に追分、

（一に追分二に輕井澤三に坂本まゝならぬ）

漸く追分驛に入つた、

嗚呼古驛、……敗殘の古驛、……此荒れ方は又、……雨は一しきり降り出して來た。

さなきだに淋しきを、……古驛の雨、……心なき征夫も袂をしぼらずには居られぬ、實に斷腸の思がある、嘗て木曾の古驛を訪ふた、奈良井、藪原、實に昔の面影がない、東海道も奥羽も北陸街道も皆知つて居る、併し此追分の現在の樣に荒敗した古驛は見た事がない。

汽車が此荒原を横斷せざりし前は、此街道筋では「一に追分」と歌はれた名驛だ。

中仙道を行く者も北國街道を上る者も、京都へ往く者も善光寺へ來る者も、必ず蹈まねばならぬ要衝の地であつた。

大厦高樓櫛比して本陣脇本陣は云ふにや及ぶ、旅舍料理店軒を列べ、上り下りの旅客を呼ぶ聲喧しく、まだ夜深き曉より、金紋先箱大鳥毛の槍を立て警蹕の聲いかめしく此驛を出づる大名小名。夕は籠舁く雲助のヤーホーの掛聲勇ましく此驛に入るもあり。夜は紅燈の影華やかにして低唱淺酌逆旅の勞を慰せし國士あれば、繩暖簾に濁酒を酌みて馬子歌うたふ馬士輿丁もありしなるべし。

汽笛一たび淺間の荒原に鳴り響きてより、碓氷の古道をたどる迂夫もなければ、數奇なる吾等ならでは此古驛を訪ふ者もなく、次第に衰微し、夢と過ぎにし榮華の跡、今はた何處にか尋ぬべき。

悲風徒らに樹梢に吼え、……慘雨空しく軒頭を繞る。

追分驛に入つて始めて眼に入つたのは、入口左方の二三の旅舍であつた。越後屋、やま屋、津輕屋なんど、何れも間口六七間總二階建宏壯なる建築物、瓦碎け軒傾き壁落ちたれども、二階の両側一方には屋號を他方には劍かたばみの常紋を、黑地に白く塗り出したる有樣、昔の壯麗なりし名殘を明かに認めしむ、自分は伊勢屋と云ふに入りて休憩す。

伊勢屋善兵衛なる六尺有餘の欅板の大招牌に似もやらず喰ふべき者は何物もなく、主婦は數個の鷄卵をゆでゝくれた、二三人の子供が爐の傍にてしきりに舌打ちして居つた馬鈴薯數個を分けてくれた、其の一個を口にしたが何の味もなかつた、此附近の瘠畑では馬鈴薯か稗でもなければ出來ぬであろう、種々の昔し話も聽いたが、家人は古の榮華を追懷して、ひたすら感慨に堪えざる有樣であつた。

七、敗殘の古驛、

軒を比べて繁華を競ひし追分驛も今は大方他に轉住し、荒れ果てた荒野の間所々にポツリポツリと、驚くばかりの宏大なる舊き建物が殘つて居るのみで、中には空家も少なくない、永樂屋、油

屋等實に荒敗せる大厦を見ては吾人はうたゝ榮枯盛衰の無常を感じた。

油屋の軒頭招牌の腕木に美事な蛟龍の彫刻物がある、風雨幾年半ば朽ちて其の背に蘚苔が青々として生えて居る、此腕木に懸けられたる金字の屋號を鏤めし大招牌が、街道上下の旅客を睥睨して居つた昔はどんなであつたか。

今軒下に二三の村童が蠢爾として遊んで居るのを見て、覺えず熱涙が頰を傳はつた、彼等は夜毎の夢にも古の榮華を知らぬであらう。

實に此追分驛程自分に深き印象を與へたところはない、誠に人世の荒凉たる淋し味を知らんと思ふ人は、一度此舊驛を訪問すべきである、到處に畫題がある詩材がある。

嗚呼此荒原の眞正中なる破驛、其の運命のはかなさをかこつときは、何人も人世を呪詛するであらう。

淺間の大嶺は夜な〳〵鳴動して居る。

灰を降らし石を飛ばす事もある。

いかに深き印象も日を經れば必ず薄らぐであらう、其の形ばかりも殘して置きたい、依て自分は數景をカメラに收めた、さればたとへ敗殘の舊驛が全く其の跡を失ふとも、プレートに寫つた此

舊驛は、永く自分の座右より消滅する事はなからう。

此儘自分は此所を去るに忍びない、此敗殘の舊驛を見捨てゝ行くのは、垂死の病人を棄つる樣な氣がした、所謂低徊去るに忍びず寫眞器を抱へて行きつ戻りつ幾度か此驛を彷徨した、顧み勝ちに此驛を出たときに雨は全くやんで青い空が雲の間よりチラ〳〵見えて來た。午前に比して天地が明るくなつた、之れから夕狩までは人家も何もない原道だ、空氣はやはり冷かで重い、どうしても晴れやかな秋と云ふ感じが起らぬ。

秋晴の空碧空藍の如く、透明なる空氣が瑩然として凝固した樣な日和であつたなら、此荒原十里の眺望はどんなであつたらうか……。

八、天變地妖、

狩宿、古宿などの小驛も皆荒敗して居る、併し何れも間の宿で追分の樣に大厦高樓が無い故、追分を見た時程はげしい感じは起らぬ、勿論到處荒凉たる淋し味を味ふ事は出來た。

沓掛に來た時は、淺間颪が骨身にしみ渡る樣に寒かつた。

今夏此驛に小停車場が出來たので、珍らしくも新築した二三の家も見えた、一體に活氣が見え

る、追分や狩宿では街道を歩いて居る人もなければ、何れの家も皆戸を鎖して空家の樣であつたが、此處には確に一脈の生氣が通つて居る樣に思はれた、丁度驛の中頃にまるで印度人の如く眞黑に煤けた顏の男がしきりに壁の破れを塗つて居つた、其の黑い顏で思ひ出したのは、天明三年此地方に起つた一揆の事であつた。

天變地妖しきりに起つた天明の昔を思ひ起せば、今でもゾットして肌に粟を生ずるのである。

淺間は此年の夏七月に大噴火をやつた、追分原、六里原は申すに及ばず、上州高崎邊から信州は小諸方面まで皆熱砂熱灰を蒙つたから田畑の收獲は勿論皆無であつた、夫れのみならず八月頃から天候不順で、上州地方、信州佐久、小縣兩郡附近は櫻桃梅李落葉後再び花を開いた、此凶歉の結果春には兩に六斗五升の上米が秋には四斗五升に暴騰した、左なきだに噴火の被害を蒙つた、貧民は飢餓に迫り、流離困頓殆んど名狀すべからざる慘狀であつた。

各所に一揆が起つた、十月二日突如として此沓掛へも一揆の勢が入り込んで、直に葛屋文右衛門の家屋を破壞した、暴徒は何れも滿面に煤を塗り身には襤褸を纏ひ、各自に竹槍其の他の得物を携へ、引裂紙の纏を振り立て、頭取らしき者が馬上に指揮をしたと云ふ事である。

嗚呼此小驛も、春花秋葉幾多の榮枯盛衰を經、今は老衰して微かに呼吸が聞える丈けである。

露光量違いの為重複撮影

沓掛を出抜けて湯川橋を渡ると、前面左方に離山が頭上を壓付ける樣に聳えて居る、路は其の麓を右に廻はつて輕井澤に入るのである。

九、舊輕井澤、

舊輕井澤は南向した廣い谷底にある、此處へ來て最も吾人の眼をひく者は、外國人の別莊である、紅色、綠色、白色等に塗られたる異樣の建物が、山隈水涯到處に建てられてある、淺間荒野の寂寥たる光景とは少しも調和して居らぬ、吾人には彼等の趣味を解することが出來ぬ。

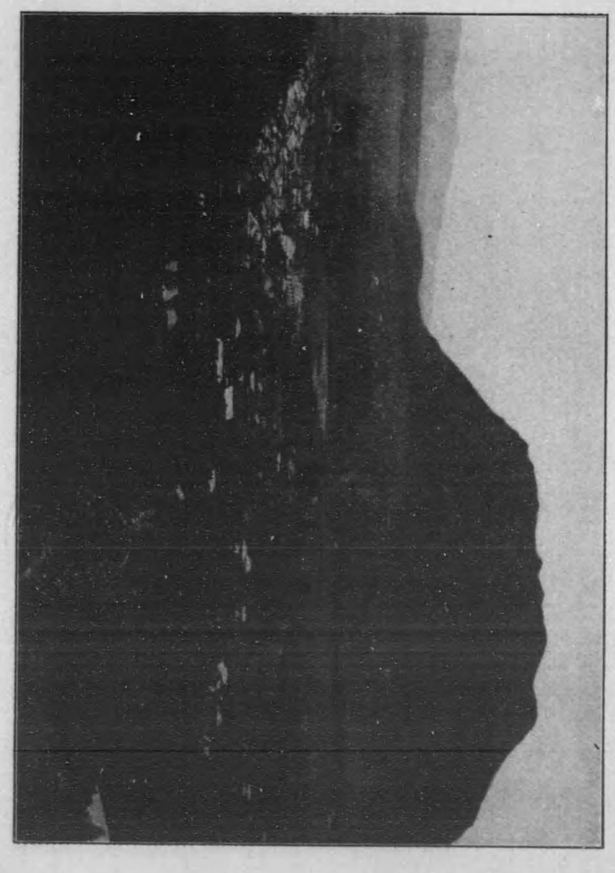
追分から此地まで僅に三里三時間許りで來ることが出來るが殆んど隔世の感がある、輕井澤と追分とは確に數世紀を隔てゝ居る。

二月の花よりも紅であつたろうと思はるゝ四近の紅葉も、今は幾度かの霜に飽きて只黑すんで見える。

右は碓氷の連山、雲の隙間より漏れてくる水の樣な白光が靜に晩秋の峰を照して居る。

左は離山からの低い丘續き、中腹所々に別莊が見える。

此丘陵と碓氷の連山が前面で接續して、一きは高くなつて居るところに黑木の森が見えて、犬を



茅野撮影

（澤井輕井）雨の原宮

露光量違いの為重複撮影

沓掛を出抜けて湯川橋を渡ると、前面左方に離山が頭上を壓付ける樣に聳えて居る、路は其の麓を右に廻はつて輕井澤に入るのである。

九、舊輕井澤、

舊輕井澤は南向した廣い谷底にある、此處へ來て最も吾人の眼をひく者は、外國人の別莊である、紅色、綠色、白色等に塗られたる異樣の建物が、山隈水涯到處に建てられてある、淺間荒野の寂寥たる光景とは少しも調和して居らぬ、吾人には彼等の趣味を解することが出來ぬ。

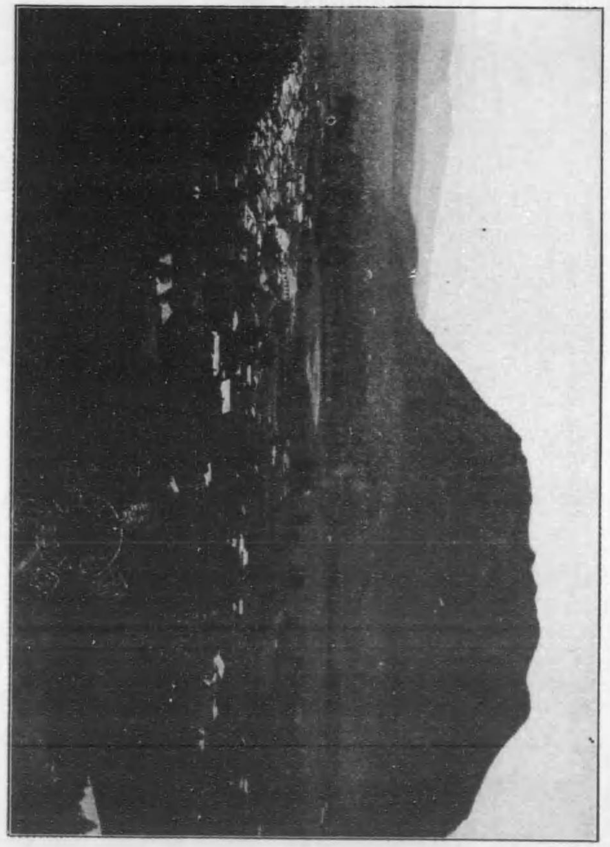
追分から此地まで僅に三里三時間許りで來ることが出來るが殆んど隔世の感がある、輕井澤と追分とは確に數世紀を隔てゝ居る。

二月の花よりも紅であつたろうと思はるゝ四近の紅葉も、今は幾度かの霜に飽きて只黑ずんで見える。

右は碓氷の連山、雲の隙間より漏れてくる水の樣な白光が靜に晩秋の峰を照して居る。

左は離山からの低い丘續き、中腹所々に別莊が見える。

此丘陵と碓氷の連山が前面で接續して、一きは高くなつて居るところに黑木の森が見えて、犬を



碓氷峠

碓氷峠（輕井澤）附近の頂上

先に立てゝ萱を分けて原中よりヒョッコリ出て來た獵師が、あれは碓氷峠の絶頂峠町だと指差して敎へた、夏ならば幾百千の内外人が入り込んで繁華を極むる輕井澤も、今は霜枯れの景色で、三方峰巒に抱擁せられた谷底に靜に眠つて居る。

街上には人ッ子一人歩いて居らぬ、小川の流れて居る傍にレグホンが二三羽しきりに餌をあさつて居つたのと、軒の下に寢て居た犬がいかにも懶氣な顏をして、自分を見送つて居つたのが眼についたばかりである。

宿を通り抜けて何とか云ふ溪流に沿ふて登つた、此小川は今夏大に暴れて輕井澤を散々に苦しめたそうな。

峠の頂上には白雲が夢の樣に浮動して居る、其の白雲の下から此小川が湧いてくるのであろう、潺緩の音が耳を洗ふて居る、何處からか石を切る鑿の音が聞えた、さながら閑古鳥でも鳴く樣な響を靜かに碓氷峠へひゞかせて居る。

一〇、大曲り、

こゝ碓氷峠の舊道大曲り、昔は百萬石の大名の行列も上下した道なれど、今は實に荒れ果てゝ居

る、大きな廣い道が風雨の爲めに大半崩れて短い草が一面に生いて居る、其の間に足場のよい處を撰んで人の歩いた跡が細く右左に曲がつて居る、

峠町までの中途に一軒の茶屋がある、之れが大曲りの茶屋と呼ばれて居る。

夫婦と若い息子と三人しきりに藁細工をして居つた。

こゝからは輕井澤の宿が眼下に見える。

淺間の荒原を一文字に横斷して行く汽車の白烟も手に取る樣だ、荒野の果てが夢の樣に南へ擴がつて淡褐色の繪具をぼかした末が、薄絹へ滲込んで消えて行く樣な先方に、急に思ひ出した樣に立科、八ヶ嶽の連峰が紫色に連綿として居る、赤嶽の絶頂には雪かと見ゆる白い光りさへ見える、それよりも猶ほ壯大でうれしかつたのは、北方指呼の間に淺間が白烟を吐ひて居るのだ、今朝から一度も顔を見せなかつた淺間が半腹以上鮮かに現はれて、所々白雲を點じた碧空にヌツト突き出て居る樣子が如何にもサブライムで、殊に氷の樣な冷たい風が、其の絶巓を横なぐりになぐつて自分の頰へヒヤリと打ち付けた時には身内がゾク〳〵とした、白烟が風の爲めに煽られて八合目あたりまで流れる樣に這ひ下つて來て、其の末が急に六里が原へ靡た景色は、暫く痞へて居つた胸の留飲が急に下つた樣な氣持がした。

自分は紫に光つた富士の高嶺より、此烟を噴く淺間を好む、彼れは眠て居るが此は活きて居る。

一一、峠　町、

木曾路圖會に

信州輕井澤より廿二町、碓氷坂の上に民家あり峠町と云ふ、熊野權現祠の前に信州上野國境の標杭あり。

と、あり、此坂は隨分急である、將さに頂上に達せんとするところに碓氷貞光の靈社がある、賴光の四天王と呼ばれし貞光は此地の產だと云ひ傳へて居る、沓掛附近の寒風は實に酷烈であつたが、此峠の頂上の寒さは又一層烈しく、厚き上衣や肉を透して骨の心までしみ込む樣な心持がする。

今宵は此處に宿る事として水澤方に入り、草鞋を解いて直に信州名物の炬燵に入つた、關東地方では紅葉の時分なのに、早や炬燵でなければ寒さが凌げぬのである。

碓氷を鐵道の通せざりし昔は、雨の日でも風の日でも、未明より峠を越ゆる旅人の籠の往來絶え間なく此茶屋もなか〳〵の賑ひなりしも、今は行人全く絶え、特に十一月から來年の四月までは

全く雪中に埋められるのである、十幾軒かの一部落は全く雪中にあつて略、半ヶ年を過さねばならぬ。

此寒い半年の間は全く俗界と連絡が絶えて、輕井澤あたりの人々も、眞白に雪を冠つた峠の森から、時々鼠色の炊煙の上るのを見て、峠でも無事で居るなと思ふだけで全く世間と沒交渉になるのである。

平野地方で櫻が咲く頃に、漸く雪が消える。

四月の半になると熊野權現の春祭りで、群馬の方からも信州の方からも、氏子共が登つて來て代々神樂の奉納がある、其の混雜は一通りでない、此家なども百幾十人の泊りがあるとの事、此時に始めて永き冬眠より蘇生するのである。

蘇生と云へば峠町ばかりではない、附近の枯林も皆一時に紫の芽をふいて、淺間の高原から吹き上げて來る風にもどこか温味がある、まして關東の平原から吹いて來る風が實に温暖和煦萬物に生氣を與へるのである、八汐の花が尾上や谷間に咲き出で、小鳥が呑氣に歌ふ頃の峠の生活程愉快な幸福な者はなかろうと思はれる。

一二、峠町二、

南向の障子を明けると夕月が高く、右は妙義左は榛名の峰巒の間に扇狀に擴がつた關東の平野、丁度薄絹を以て蔽ふた樣に見えて、山河のけじめ定かならざれども、實に廣濶雄大と云ふ感じがある。

烏川（カラス）や利根の流れにやあらん白く光つて見える、富岡、高崎の電燈特に前橋共進會場のイルミネーションは何んとも云へぬ感じがする、さながら夢の國を見る樣な心地。

襟の冷やりとする夜着引き冠つて、寢樣としたが眼が冴えて眠れぬ、其の間に種々の想像が胸裏に往來する。

こんな不便な峠の上一寸した買物にも輕井澤まで往來せねばならぬ、美田は悉か一畝の瘠畑もない處に、たとへ十數軒の部落でも、こゝに存在して居るのは如何なる意義かと疑はれた。

晴れた日に廣漠たる關東平野を伏瞰したときに、彼處には人も多かろう土地も肥えて居ろう、如何にも温かな樂土があると思つたら、峠の人は下りたいとは思はぬだろうか。

木枯の吹きすさぶ朝、關東平野に温かい日が當つて居るのを見たときには、峠の生活がいやには

ならぬだろうか。

此峠にみぞれまじりの寒風が吹いて居るのに、關東平野には紫の霞が棚引いて居る、其の霞の下の花を見たいと云ふ考が起らぬだろうか。

併し平野の生活は、此峠の上から見た樣に平和な物ではない。

空氣が溷濁して居る、風俗が壞亂して居る、生存競爭の激甚なるに反して慰安が少ない、從つて多く神經衰弱症に罹つて居る、此等の平野の人々が炎暑の候、紅葉の節、此峠に遊んで始めて蘇生したと云つて居るではないか。

清澄の空氣を吸ひ、惇朴の風を存し、偉大なる自然に接觸して一生を送ると云ふことは、平野の人が理想として居るところで、しかも實行する事の出來ぬ事だ、この峠の生活の樣な平和な幸福な者はなかろう、決して峠の人々は平野の殺風景な無趣味な生活を羨む事はない。

一三、見晴し、

翌朝は第一に熊野權現に參詣をした、次に「見晴らし」と呼ぶ小高い處へ登つて、四方の眺望をほしいまゝにした、關東の方面は好晴いかにも小春日和と云ふべきであるが、信州方面は一面の

霧だ。

東方は爽快だが西方は陰欝だ、併し霧の間から淺間が隱見して居る景色は、一層怪異一層崇高の感じが深い。

霧が次第に深くなつて來てすさまじき勢で突貫して上つて來た、霧が峠を越えて妙義の頭を撫て行く中に陽光に觸れて跡方もなく消えてしまう、暖かき陽光に敵するものはない。

小鳥の幾群が此暗い霧の内から飛び出して來る、峠を越え關東方面さして行く、小鳥でさへも暗い霧の信州より明るい關東を好むと見える。

一四、碓氷峠、

ひな曇りうすひの坂をこえしたに
妹かこひしく忘らえぬかも　（萬葉）

今碓氷の勝を說く前に、碓氷古道の昔を語らざるべからず。

一、地名辭書

坂東平野と信濃高原の通路にあたり、其の山險東より上り西に下る、宛然屋頂に梯子を架するご

とし、山路は坂本驛より起程し、新古の二派あり、新道は南に通じ鐵道亦南方に倚れり、古道は峠町權現祠を經るものにして新道の北方にあり。

二、仝　上

碓氷峠は、其の古道回轉曲折、登渉の艱昇天の想あり、而も東山道不易の要衝にあたり、人馬必由の隘口とす、古來東海道の箱根足柄と並び稱せられ關門の設けありたり、明治十年車駕北巡の時之を改修し、十六年更に改修して馬車を通ず云々。

三、千曲眞砂

碓氷峠は、坂本宿の末より直に山に登る、松木坂遠見の番所大坂を過ぎて、さし出でたる磐石あり、はんね石と云ふ、其の上に石の地藏菩薩立ち給ふ、三枚石、覗石なんぞ第一の難所を越えて、二三の茶屋あり、名所餅を商ふ、往昔日本武尊の東征し給ひて碓氷の嶺に登り、辰己の方を望て吾嬬者耶（あづまはや）と歎き給ひしは此所なるべし、此坂上は東國一番眼下に見え、青山斷えて雲の如し、それより上杉景勝の堀切作り道釜塲などを過ぎて、山中の茶屋あり、長坂を登り二王堂あり、それより嶺の茶屋に至る。

四、壬戌紀行（蜀山人）

信濃と上毛の界なりと云ふはつ坂、長坂をこえて笹澤と云ふ所に至る清水流れ出づ、丸山あり子持山と云ふ、姥がふところばらむき平など云ふ所をすぐ、このあたりより吾妻の方をながめやるに、日本武尊の昔思ひ出でらる、山中坂を上りて立塲あり賑はしき茶屋なり、まごめ坂を過ぎて右の方にいともけはしき岩山ならび立てり、御林山と云ふ、麓に御林あり、板倉伊豫守の御預りなり、八人山伏と云ふ岩、また地藏岩と云ふあり、その後は妙義の山なりと云ふ、これまで岩山を見しかど、かゝる險しき岩の色黑きが雲を凌ぎて立てるを見ず、唐書に書ける山の如し、入道が窪を過ぎてくりから平に至る、之れより左の方を見れば、又さかしき岩あり天狗岩と云ふ、其の向ふに榛名山あり、赤城の山も連なりて見ゆ、行き行きて直に絶壁にのぞむ、こゝを座頭ころばしと云ふも宜なり、細き道を左にとりてかんば坂をすぎ行けば、左右ともに深き谷にして、たゞ一筋の道あり堀切と名づく、むかし豊臣秀吉小田原を攻めたまひしとき、大道寺駿河守政繁この坂を堀り切りて北國勢を防ぎしが、上杉景勝前田利家の爲めに破られしとなん、誠にさかしき切所と云ふべし、はんね石と云ふところには岩多し、觀音風穴なぞ云ふ谷々を越えて赤土坂を下り、松木坂を下りゆけば左に鳥居あり坂本の驛につく。

一五、吾嬬者耶、

（松になりたや峠の松に諸國大名を下に見る）

碓氷峠は東海道の箱根足柄の險にも劣らざる中仙道の難所、上り下りの行客は常に蜀道の難を叫べり、自分は再び熊野三社權現の祠前に禮拜して行路の無難を祈り、上州方面へ下らんとせしは、冷風客衣に逼ぬく薄霜落葉に白き晩秋の晨であつた。

嗚呼我が吟懷この淋しき古道に向ひて馳せしこと幾何ぞや、山水緣あり今宿昔の希望を達するを得たり、汽笛一聲碓氷を下らばこの險も夢の間に過ぐべきを、街道往來の客絶えざりし昔さへ、行路の難と稱せられし峠路、今行人征馬の跡絶えて、荊棘路を埋むる險路を下らんとす、人は必ず狂とや云はん愚とや叫ばん、狂か知らず愚或は然らん、さりながら古き名所圖會に、昔の紀行に、千山萬岳の雲を蹈みて、此險を陟る雄々しさを見て幾度か胸を躍らしぬ。

荒廢せる古の往還必ず征夫をして袂をしぼらする者があろう、昔ながらの紅葉は、幾しほにか染めて人を待つらん、溪間に叫ぶ水の音も、木魂に響くましらの聲も、皆我が吟懷をやるべしと思へば、蜀道の難も人のそしりも何の物かは。

峠の頂上より下ること少許にして、路の左方に小祠あり、傍らの石上に歌あり

ありし代にかへり見してふ碓氷山、
いまも戀しき吾妻路のそら。

あゝこれ日本武尊が遙かに關東平野の末、雲海漂渺の際を眺め、走水海に水泡と消えし弟橘媛を追懷し、吾嬬者耶と歎き給ひし舊跡なり、今朝も亦東南百里の江山雲はれて水か空か彷彿際涯なし。

景行紀、日本武尊自甲斐北轉歷武藏上野西逮于碓日坂時尊每有顧弟橘媛之情故登日碓氷嶺而東南望之三歎曰吾嬬者耶故因號山東諸國曰吾嬬國也云々

今此小祠の前に立ちて、二千年の昔を追懷すれば、誠に古意蒼涼たり。

一六、山中茶屋、

碓氷峠最古の舊道は、右方の溪谷を通せし者と云へど、今は草籟道を埋め土砂壞崩して行く事能はず。

少しく下りて陣場の原に至れば、天を蔽ふ喬木なく眼を遮る雲翳なく、一望濶然、狂濫怒濤の勢

にて關東平野に崩れんとする上信境上の山々、山色鮮かに、特に妙義の畸形磯波の岸に激し噴湧せる有樣、實に千山萬岳一眸の下に集まれり。

峠の中腹以下紅葉今猶ほ見るべく黝黑なる岩色との對照は頗る妙を極めて居る。

陣場の原の左方深谷を隔てゝ山勢一きは雄峻、霧積温泉附近は特に峻拔なるを思ふ。

霧積は溪間の一温泉場、こゝより二里にして近しと雖も、路險絶浴客の到る者殆んどなしとの事なり。

路は緩斜せる茅野の間を下る、

この附近かつては喬木欝々技椏天を蔽ふて晝も猶ほ暗かりしに、濫伐の結果今は一木もなく、四近の風致は箱根大地獄より强羅を經て木賀に下るあたりに酷似せり。

子持山、姥ヶ懐等の名所を過ぐれば路頗る急峻なり、此四近波濤の如き峰巒櫻樹多く、春ならば紅雲滿山を蔽ひ其の美筆にも口にも盡し難しとか。

紫烟る嫩芽の間にもゆるが如き八汐の花、青葉がくれのほとゝぎす、彼は旅客の足をとゞめ、是は其の袂をしぼらしむ。

盛夏溪流の間鶯を聞きては、三伏の暑を忘れしならん。

花より紅き秋のもみぢ葉には、峠みちの淋しきをも思はざりしならん。

されど〳〵朔風面を吹き、飛雪繽紛たる三冬の候　このあたりを旅せしならば、殆んど生命を堵し、此峠こそ天下の至險と感せしめしならん。

嗚呼今この古道を辿りつゝ、五十年の昔百年の古を追懐するときは、萬感胸裏に往來し、一きは旅の哀れを催さしむ、此古道の中特に深き印象を與へし者は、實に山中茶屋の遺跡。

試みに思へ、一木一草にて昔を問はゝ歴史がある、一個の岩にも古の紀念が殘つて居る、此舊道を半ば下つた頃には、吾人の胸はかき亂されて思は千々に碎くる者を、今突然眼前數歩の間、茅茨の蓬々たる下に斷礎を見出し、吾人は深き感慨に沈みぬ。

確に建築物の跡、しかも七八戸軒を比べて居つたであろう、當時の庭木と思はるゝ栂の古木もあつた、之れぞ山中茶屋の遺跡。

峠を下る人々は坂本の宿を出でゝより、兎に角に山中茶屋まで、峠町より下る人々も兎に角に山中茶屋までと、峠上下の人々の目的地であつた山中茶屋。

疲れたる旅客に慰安を與へ、飢えたる旅人に酒食を供し、幾多の旅客を助けし山中茶屋。

千客萬來峠みち唯一の山中茶屋、今は其の斷礎を叢中に見るのみ、此一片の石を以て昔の有樣を

思ふときは、吾人は五百年の昔の人となつた心地がする。

古道の秋風がしみ〴〵と身にこたへた。

嗚呼此古道の淋し味を味はゝんには、

秋だ……秋だ……特に秋も今、……晩秋、

弱り果てた蟲の聲、蹈めば音ある古道の落葉、夫れに又路傍の斷礎、……

皆古道の靜寂と調和して居る。

一七、足留

山中茶屋の跡より少しく下れば、左方は湯の澤の深谷、流霜清泉涼風全く夏を知らぬ谷底に某富豪の別莊ありしも、今夏洪水の爲めに、此所に避暑中なりしその子息は二名の學生と共に家屋諸共行衛不明になつた、世間は萬事塞翁が馬、富貴必ずしも幸ならず、貧寒なる吾人は今遙かに谷底を伏瞰して、彼等を憫み彼等を弔ふ。

峠町から約一里半を下つたときに路は二叉となつた、左せんか右せんかと惑ひしが、右方の新道は山崩れの爲め人馬を通せずと誌せし小さき木標を見出した、右方は新道で此木標なくば何人も

右に下るであろう、自分は幽かなる細徑を左に下つた、之れは碓氷峠最古の舊道である、古道を下らんとは最初よりの希望、路の遠近險夷は問ふところでない。

足留と云ふところの上で眼界頗る開け、始めて麓の方に坂本の宿が見えた、峠の頂上附近と違つて紅葉がまだ殘つて居る、勿論色は幾分霜に飽きて暗褐色であつた。

深い〴〵谷が脚下に見える、勿論水の音は聞えない、遙かの谷の末、第五號と第六號の隧道の間に高い練瓦の橋が見える。

トンネルを通過するときは左程に思はざりしも、こゝらあたりの山の厚味あるには實に驚いた、又此山底を堀り拔いた當時を思ふと人の力にも驚かざるを得ない。

鬼の樣な男共が集まつて、鑿もて岩を穿ちダイナマイトを裝置して爆破すれば、幾千萬年の昔より地中に秘められし怪物が躍り出だせし如く、大なるは屋の如く小なるは灰の如き砂石濛々として四近に飛散し、顏はカンテラの油煙にくすぶり鬼灯の如き眼を光らせたる人夫が、右往左往に走せ交ふ樣が、今眼前に現はれてくる。

其の間に幾多の生命は犧牲となつたであろう、斯くて天下の至險、蜀の棧道にも比すべき峠道も人力に征伏せられ、汽車は吾人の夢を載せて通ふ樣になつたのである。

併し今も時々山靈嚇怒、古の自然に歸らしめんとして岩を崩し橋を壞る事もある、今夏八月三旬の間は全く此古道を辿る外に交通路がなかつた。

一八、窺き、

足留の下方に切通しの難所がある、岩を雙方の谷に切り崩した間に、馬背の如き岨道がある、これこそ一夫之れを守れば萬夫も越え難き要害の地だ、左右は即ち谷底を見ざる深谷だ、往時は老杉欝々として晝猶ほ暗く、いと物凄き所なりしかば雲助共は駕を控へて旅客をおびやかせしところとか。

こゝより走り通りを經て羽石の中の茶屋（玉屋）のありしところに至る、こゝにも屋敷の跡石垣等昔のまゝながら、茅茨いやが上に生え茂れり、特に斷腸の思ありしは、庭前に土を盛りて小高くしつらひたる駕臺なりき、傾國の美人も百萬石の大名も、こゝにて駕の簾を擧げ、遙かに眺めし紅葉は、昔ながらの錦を織れども、古の面影今は何處にありや、山河偏へに命長けれども、人世の轉變今更ながら其の急なるに驚かる、急阪を下れば路の傍に弘法の井戸あり、脚下に坂本驛を望むべき所を「ノゾキ」と呼ぶ、坂本の舊驛眼下にあり、寸馬豆人明に數ふべし。

碓氷の峻坂も殘るところ僅に一里、一躍して坂下の坂本驛に下らんとす、瞼を塁み奇を希ひし自分も、此地に來りて何とも云ひ知れぬ愉快を覺えぬ、まして旅に馴れざる昔の旅人が、千山萬岳の雲を分け、漸く此地に來り坂本驛を伏瞰せし時は、必ずや雀躍せしならん、彼十字軍が始めてエルサレムを望みし時の樣に。

ノゾキより急轉直下約一里坂本の驛に入つた、

眼前の坂本驛は、峠より見た時の樣に美しくはない、こゝも亦中仙道の荒敗せる舊驛。

鐵路は横川より直に碓氷に通ず、狹き谷底に忘れられし此破驛、明治文明の餘澤、遂にこゝに達せず。

風雨幾年、自然に朽つるを待つの外なき其の運命の果敢なきを見て、誰か泣かざる者ぞ。（明治四十三年十一月）

日本アルプス縱走記

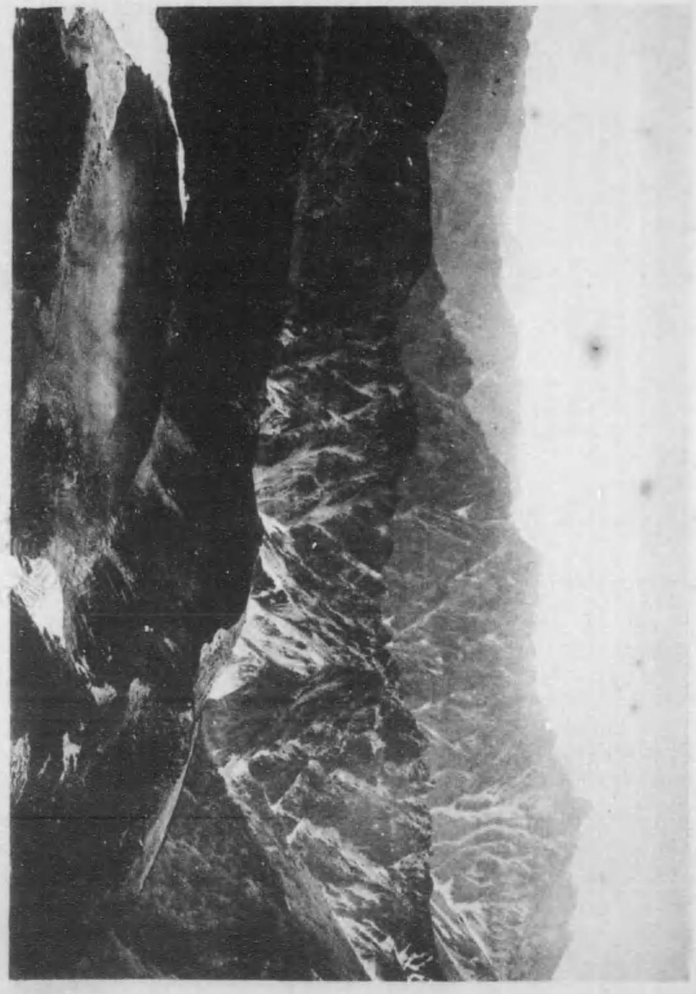
附言、明治三十九年夏、高頭式大平晟両氏と共に日本アルプス三大横斷を決行し、翌四十年七月獨り日本アルプスの縱走を企つ、此紀行は當時の日記を補修せし者、文拙なりと雖も日本アルプス縱走記の最初の者なり。

其の後、日本アルプスの縱走を企てし人々には、飛騨山脈縱走記（辻村氏）四十二年（槍ヶ岳より烏帽子岳まで）

日本アルプス縱走記（小島　高頭　高野氏）四十三年（槍岳より黑岳「縱走の部分」まで）

四十四年八月榎谷氏は針木峠より槍ヶ岳まで縱走せり、之れ最長距離を縱走せし者とす。

余の縱走は、距離に於て長しと云ふべからずと雖ども、以後縱走を試みし人々に對しては、多少のヒントを與へし事は、信じて疑はざるところなり。



辻村氏撮影

むかひなる岳ヶ槍ヶ槍より鳥帽子嶽

一、日本アルプス縱走の快擧、

日本アルプス三大横斷を決行せし翌年、明治四十年七月日本アルプス縱走を企つ、即ち信州南安曇郡中房温泉を起點とし、中房川の上流を遡り、乘越峠を越えて高瀨の谷に下り、日本アルプスの主脈中なる烏帽子岳に登り、之れより日本アルプスの連嶺を南走し、飛驒の國笠ヶ岳に達し、蒲田温泉に下らんとす、人は知らず余に於てはこれ破天荒の快擧未曾有の壯事、誰か其一部たりとも、日本アルプスの峻嶺を其の山稜に沿ふて縱走せしものありや、何所に此地方の紀行文を載せたる書籍ありや、誰か此地方の案内記を語る者ぞ、確かに人跡未到の地、就中信州と越中飛驒との國境は、本島中央に盤崛せる日本アルプスの最高點、神通川、常願川寺、黑部川、高瀨川、梓川等皆この地に發源す、確かに本邦第一の深山幽谿なり。

二、發　程、（明治四十年七月廿五日發）

長野を發し、中央東線明科驛に下車し、人車を備ふて有明山麓なる宮城に向ふ。犀川の長橋を渡り、大町街道を進むこと里餘、急に左折して一岐路に入る、信濃富士の稱ある有明山の青嶂は帽

廂にあり、其の後方に列座せる屏風の如き峻嶺は、皆之れ日本アルプスの雄、標高一萬尺の大天井岳其盟主たり、北の方には屏風岳、燕岳（九千餘尺）南には常念岳、螺ヶ岳等何れも皆曾遊の地、全山花崗岩より成る、山容の特異なるため、高山植物の豐富なるため、登山家及高山植物研究家には、是非一度登山せられんことを勸誘せんとす。

大天井、常念岳、燕岳等皆一萬尺に近き山なるに、世人の之を知る者尠し、大天井の如きは昨年登山して始めて其位置を確むるを得たり。

高瀬川の橋を渡り、古厩（ふるまや）に至り車を捨て車夫に荷物を攜はせ宮城（みやしろ）へ進む、明科古厩間二里、之れより宮城まで一里、宮城に着せしは午后二時三十分、中房温泉浴客小荷物取扱所へ荷物を依頼し一人中房温泉へ向ふ、路は中房川に沿ふ、三里の難道たり。

三、中房の谷、

宮城を發し、有明神社に賽し、安曇電燈會社發電所の傍らを過ぐ、こゝより中房川の谷に沿ふて行くこと十町、有明山表口の石標あり、有明山に登る者は此所より右方へ登らざるべからず、猶數町を進み釣り橋を渡る、路は全く喬木帶中を通ず、綠樹鬱蒼爲めに日光を遮る、細徑頗る急峻

なる斜面を横過す、道の窮せる所多く棧道あり。

有明山の頂上は、南北に長く東西に狹く恰も劍背の如し、前面より之れを見れば頂上平坦なれども、今此谷より其の側面を仰ぐときは實に峻嶮を極む、谷底を俯瞰すれば窮壑の底に中房川の溪流一道白く傾斜奔騰せるを見る。

「路の附近に各種植物多く、特に蘭科の稀品に富めるは驚くばかりなり、今二三の主なるものを擧ぐれば、

ジンバイサウ、カモメラン、イチエウラン、ノビネチドリ、テガタチドリ、アヲサギサウ、ミヤマモジヅリ、ミヤマウヅラ、アケボノシユスラン、スゞムシサウ、ヒメミヤマウヅラ、ハクサンチドリ、

宮城より二里强、中房川の支流糠川分點に於て、穗高方面より來たる栗尾峠道と合一す、之より上る坂路を信濃坂と呼ぶ、獵師庄太郎の孤屋あり、又行くこと約三十町始めて前面に白烟の猛曳を見る、之れ即ち中房温泉、時に午後六時半。

四、中房温泉、

中房温泉は、有明山の西中房川の沿岸にあり、海拔千五百米、頗る幽邃氣候冷涼、夏時の良避暑地たり、持主は長野縣會議員百瀨氏とす、同氏は目下この地に高山植物園を作らんとして既に工を起せり、信州に高山植物園を設くべしとは、三好博士の屢々唱道せしところ、識者は皆其の必要を認む。

元來高山植物は、其の岩石の種類の異なるに從つて所產の種類を異にし、形態も亦多少の差異あり、故に高山植物園を設くるには、花崗岩、石灰岩、等各種の岩石を集め、之れに適應せる植物を栽植するは西洋諸國に於て普通に行はるゝ方法なり。

此中房地方は全部花崗石なればこの岩塊にてロックガーデンを作り、附近の諸高山植物を集め、完全なる高山園を作らば、利益を得るものは啻に浴客採集者等のみにあらざるなり。

余は昨夏此地に來り、ミズスギ、アブラシバの二種を採集せり、何れも暖地の產ミズスギの如きは、本邦最北の產地と稱せらる、温泉あるが爲めに如斯暖地の植物を見る。

（第二日目は此地に滯在せり）

五、希望の光かり、

百瀨氏の懇篤周到なる注意によりて、登山の準備全く成り、翌朝を期して早々寢に就く。

抑も豫定の行程は此中房温泉を發し、中房川に沿ふて上り、燕岳の連脈を越え、高瀨川の谷に降り、之れより愈日本アルプスの主脈に登り、烏帽子岳、五郎岳、火打ち岳、黑岳、鷲羽岳を越え飛騨に入り笠ヶ岳を極め、蒲田に下り、上高地に出で、德本峠を越えて歸らんとするもの、未曾有の快擧日本本島の脊梁、最高峻を極めたる連嶺を縱走すること故、行路の難きは更にもいはず、前人未到の地方、高山植物の美果して如何、珍種もあらん、稀品もあらん、この地方より立山を望みしとき、白馬を眺めしとき、其景象の雄渾偉大はいかばかりぞ、種々の空想、想像、胸裏に往來して、幾多の希望成功眼前にあり、しかも飜つて默想すれば、信憑すべき地圖なき地方記錄なき地方、人跡なき深山幽溪、殆んど暗黑亞弗利加に探險を企つるが如きもの、幾多の困苦、艱難、危險、失敗、續々として余が後へに來るが如き心地す、彼を想ひ是を思ふときは、眼全く冴えて眠る能はず、轉輾反側遂に鷄鳴に達す、乃ち起ちて浴槽に至りしに、一天よく晴れ渡りて、一きは青き太白星、これ希望の光か失意の色か。

六、深谷幽溪、

七月二十八日、午前六時半、輕裝程に上る。

人夫は横澤類藏、畠山圓術、畠山今朝市の三名、類藏は多年日本アルプスの各地を跋渉して山中の地理に通せる者、今回の東道者たり、曾ては僅々八升の米にて二十四日間日本アルプスの各地を彷徨せし經驗ある剛の者、始め此類藏と圓術との二名を率ゆる筈なりしも、携帶品の量多きにより、當時温泉に居りし石工今朝市をも同行せしむることゝせり。

温泉より中房川に沿ふて上ること、約七八町許の所に樓霞の瀧あり、此瀧までは數多の浴客日々來るにより道路判然たれども、之より先きは全く人の行くことなき人跡不到の幽谿なり、石上を飛び水中を渉りて進む、石は悉く花崗岩滑澤玉の如く、流れは燕岳餓鬼兵等より來る雪解の水、滑かなること油の如く清冽なること氷の如し、溪の左は燕岳の連嶂右は之れ餓鬼岳の絶壁、山は益々高く谷は愈々深し、四邊の景色一歩は一歩より幽邃なり。

逶迤曲折を極めたる中房川の流れ、石に激しては急瀨となり飛瀑を生し、峰に堰かれては深潭となる、千態萬狀の岩容水態實に奇趣を極む。

温泉より進むこと約一時間溪谷二支となる、右なるを奥バロウの澤と呼ぶ、吾等は左方の流を上れり、漸次進むに從つて溪益狹く流れは愈々急なり、されば蝸附して僅かに絶壁を過くるところ

あり、身を横樣にして狹き岩の間を行くところあり、單身にて此邊を過るさへ容易の事にあらず、まして重荷を負ふて此難所を進む、人夫の勞苦は多とせざるべからず。

午前十時西臺原に着す、海拔二千百五十米突、元來人の來らざるところ西臺原等の名稱は類藏の外に知る人少し。

アラシグサ、キバナノコマノツメ、等の高山植物を見る、アラシグサ、キバナノコマノツメは普通灌木帶以上にあるもの、此邊のものは皆其の種子水の爲めに流れ來りて繁殖せるもの、高山植物の分布と溪流、確かに研究の價値あり。

フキユキノシタ盛んに開花せりこれ稍珍とするに足る、溪流に臨みて白花シャクナゲの滿開せるあり、中房温泉にありては六月中旬既に開花せるもの、其花候の早晩によるも土地の高低を測るを得べし。

其花の艶麗なるは、普通のシャクナゲに及ばざれども清楚は確かに彼れを凌駕す、實に之れ山姫が響の花山靈の惜めるもの、ひげに其の枝を折るも本意なきを以て、寫眞器を出して撮影せり。

七、乘越

温泉より中房川に沿ふて上ること約三里、將さに其の源流に達せんとせしとき、急に左折して水少なき小溪を上る、頗る急峻なるを以て僅かに草莖を力として進む、ペニバナイチゴ、イハワウギ、キソチドリ、オホバキスミレ、キヌガササウ、等の密生せる間を掻き上る、之れ中房川の谷より高瀬川の谷へ移らんが爲めに燕岳の連脈を越ゆる乘越峠、途中再三休憩して峠の頂に達すれば、既に二千三百五十米突、過ぎこし方を顧みれば寒嵐低雲搖曳浮動し、中に之中川の行末白し、馬背の如き峠の頂きには全く破壞せる小舍あり、此地は稀に獵師岩魚捕り等の通過する事あるところ、此處より吾等が縱走を試みんとする日本アルプスの連嶺、皚々たる白雪を冠して樹間に隱見す、其の山頂に近きところは一木一草の綠なく、赤裸々として山骨表はれ、白雪一面に谷を埋め實に雄渾を極む、如斯高山を知らざりし石工は、之れを見て夢かとばかりに驚き、吾等は彼の恐しき峰に到らざるべからざるかと恐怖の狀面に表はれ急に歸宅を請ふ、余は叱して之を止む、然れども人夫の一人既に斯の如し、前途に如何なる事の生ずべきか實に測られざるものあり、あゝ此行吾等の累をなすものは必ずや此の石工ならん。

八、東澤

乘越峠より高瀬川の谷に向ふ、路頗る急峻なり、喬木鬱蒼として日光を遮る、下ること三四丁許りにして一溪流の傍らに出づ、之れ高瀬川の支流なり、之れに沿ふて下れば高瀬川の澁に出ることを得べし、この谷の海拔二千二百米突許の處にて、多くの殘雪を見る、下界にありては皆炎暑に苦む今日此頃、此大殘雪を蹈む、實に苦熱の何物なるかを知らず、中房を發して後始めて殘雪を見る、山に登りて大殘雪を見る時、始めて深山幽溪たるを感ずるを常とす、此溪流は東澤と呼ばる、左右は皆花崗岩の峭壁、中房川の谷に比すれば、一層狹く水勢迅く、大小の飛瀑到る處にあり、低きは數尺高きは數丈、此瀑布に遭ふ毎に、吾等は其絕壁を下らざるべからず、時には此絕崖の途中に於て進退谷まる事あり、上を仰げば頭上に崩れかゝる絕壁、下には恐しき飛瀑、膽を冷せし事幾何ぞ、此附近滿溪にフキユキノシタの開花せるを見る、漸く下方に下るに從つて水量益々深く、殘雪を見し後三時間餘を下りしところにて、自由に流れを涉る事を得ざるに至れり、三時半頃暫時休憩せんが爲めに、一同荷を下ろせしに、例の石工は荷の上に挾み置し、最近新調の上衣を、何處へか遺失せしを知れり、圍衛は之れを憫れみ、戻りて搜索せしも見當ら

す、石工は非常に落膽せり、此所より猶三四丁許り下にて、石工は遂に巨岩の上より足踏み辷らし水中にザンブと許り墜落せり、氷の如き水中に落ちし事とて、寒さと恐怖との爲めに顏色を失し、戰慄して岸に匍ひ上る樣のあはれさは形容の辭もなし、乘越峠以來はこの石工の獨り舞臺なりき。

九、傳兵衛小舍、

幾多の危險と困難とを犯して下り、漸く高瀨川の水聲を聞く、路は之れより喬木帶中を通ず、此所より岩魚捕りの步行せし細徑あり、喬木帶の內には熊笹一面に繁殖せり、細徑といふも素より道あるにあらず、四時半ごろ、無事高瀨川の岸なる傳兵衛の小屋にいたる、海拔千三百七十五米突、小屋と云ふも熊笹にて周圍を圍み木皮にて屋根を葺きし實に粗末のものなりき、內に一人の若者と一人の人夫を見る、此若者は大林區署員某なり、如何に職務と云ふとも如斯深山の出張、吾人は其の勞苦を多とせざるべからず。

一〇、濁りの小舍、

五時傳兵衛の小舍を辭して、今夜吾等の露宿すべき濁の小舍に向ふ、傳兵衛小舍より猶二十丁許り高瀨川の岸を下らざるべからず、此露宿地は對岸なるを以て是非高瀨川を渡るを要す、しかも人の容易に來らざるところもとより橋なく船なし、高瀨の流れは矢よりも迅く、水色一きは藍靛色を帶びて見るからに物凄き奔湍如何して之を渡るを得べき。

下ること數町にして、川幅一きは廣く河身二道に分れしところあり、類藏は此所を渡るの外に塲所なしと云ふ、水淺けれども流れ迅く、特に下流には底ひも知らぬ深潭あり、暫時岸に立つて水勢を察し、決然互に手を携えて徒涉を試む、水深始めは膝次に腿遂に腰に達す、石工の如きは殆んど生色なく、吾等も幾度か蹉跌せんとせしも、無事對岸に達するを得たり。

濁澤に達せしは、午後六時。

濁の小舍の所在地は、濁澤の高瀨川に合流するところの喬木帶內にあり、今は小舍の跡方もなし、海拔千三百米突、雜草三四尺も生ひ茂れり。

既に黃昏小舍を作る遑なし、テントも出さず、舊き小舍の破片にて、簡單なる屋根を作れり、素より雨露を防ぐ能はず、月光をも遮ることを得ず。

食事を了りて一同防寒具に身を包み、此雜草の間殆んど何等の被覆もなきところに眠る、その有

様は實に一億萬年の太古野獸と殆んど區別するところなし、彼の橋下の乞食は之れに比して數等勝れるを知る、若し家に居らんにはひまもる風をもいとひ、夜の衾を重ねても寢られぬものを、疲勞の爲めに綿の如くなれる吾等は直に華胥に遊ぶ。

翌午前一時、夜寒身に沁みて驚き覺むれば、高瀨川の水聲は驟雨の如く、晃々たる明月樹間にあり、太古の儘の森林の內實に凄愴の感あり。

一一、烏帽子岳、

午前三時半、一同起き出でゝ朝飯の準備をなす、此朝意外の一事件起れり。

日本アルプス縱走の豫定は爲めに多少變更せざるべからざるに至れり、實に一大頓挫を來たせり、事件とは何餘事にあらず、人夫の一人なる石工の疾患、石工は乘越以來既に精神的に病氣なりしなり、昨乘越峠の頂上にて歸宅を申し出たせしときは、叱咤してこれを止めしも、全く彼れが山地の跋涉に無經驗なる事を知れる余は、最早彼れに强ゆる事能はず、

彼れは乘越峠の頂上にて、日本アルプスの壯觀に膽玉を潰し、東澤の急潭に落ちて二度喫驚、上衣を遺失して三度失意し、高瀨川の徒涉にて四度恐怖し、今又一夜の露宿にて益々意氣沮喪し

復たび起つ勇氣なし。

石工爰より歸らばその荷物を此地に殘さゞるべからず、さすれば再たび此地に歸る必要あり、笠ケ岳より飛騨に入る豫定はこゝに變更せざるべからず、實に一大頓挫、他に工夫なければ止むを得ざる品々の外はこれを殘して石工と袂を分ち、之れより濁澤に沿ふて烏帽子岳に向ふ、時に午前六時半。

一二、日本アルプスの山稜、

濁の小舍より、濁澤に沿ふて上る事約半里、之れより左方の喬木帶中を上る、其急峻なる事殆んど壁を立てしが如しと形容することを得べし、晝さへ暗き喬木帶、特に下草少なく落葉深く登攀頗る困難を極む。

十時三十分參謀本部三角點のあるところに達せり、海拔二千四百米突、喬木帶漸く盡きて、將さに灌木帶に入らんとす。

右方には滿溪白雪を以て埋められし谷あり、濁澤の流れも既に全く雪となれり、特に其の源流附近は、花崗岩の山骨壞崩して白色の一大絕壁をなす、俗に濁りのアタマと呼べり。

濁の小舍より登ること約三里、烏帽岳子の一角に達す、チングルマ、アオノツガザクラ、キバナノコマノツメ、シナノキンバイ等の高山植物一面に開花せるを見る。

此所烏帽子岳の連脈、一歩北すれば直に其頂上を極むることを得べし、然れども雲影白霧屢々來りて我が帽廂を掠め天意漸く料り難く霎雨將さに來らんとす、乃ち烏帽子岳の登攀を中止し、濃紫淡紅一面に咲き亂れたる草花を蹈み、或は雪を嚙み或は花を折り所謂日本アルプスの最高點を北より南に向つて縱走せり。

雲霧の爲めに四近の展望自由ならざりしも、却て雲の切れ間より驚くべき高峰を見、或は霧の間に大雪溪現はれ、余は非常にサブリミチーを覺えぬ。

ムシトリスミレ等の滿開せるリツジを、南走すること約一里、前面に五郎岳の峰頭、突如として現はれぬ。

白雲の怒濤を突破して、巍然聳立せる其の山容、何等の壯觀、

植物の奇、山の怪こゝより始まる。

日本アルプスの最高點、如何なる植物を見るか。

人跡不到の境に、如何なる山ありや。

一三、異花珍草、

先づ余の注意を惹けるはタカネスミレなり、本種はヴオラ屬中最も高處に產するもの、明治十七年、矢田部博士、松村博士、越中立山にて採集し、其の後岩手山、八ヶ岳、鑓ヶ岳等にて發見せられしもの、黃葵綠晶實に云ふべからざる趣あり、余は新產地として白馬裏山、燕岳、大天井、常念、針木峠、佐良越、槍ヶ岳等を見出しぬ、今この地の產狀を見るに、數里の間に繁殖せるものは、本種とコマクサなり、依つて本種は日本アルプスに最も普通なる高山植物なることを知れり。

次に見出せしものは、稀品中の稀品といふべき、クモマグサなり、本種は古くより知られしもの、產地としては御嶽、白馬、鑓ヶ岳、槍ヶ嶽等、僅數の山のみ知られし者、今此五郎嶽附近にて、多數に其の產あるを見出しぬ、右の外

ホソバノツメクサ、イハツメクサ、ジムカデ、チシマキキヤウ等を多數に見たり。

一四、五郎岳、

五郎岳の東北殘雪多きあたりを探り、百花爛漫たる高山植物の御花畑を過ぎ、稍急峻なる斜面を上りて頂上に達す、雲霧益々深し。

頂上附近は全山樹木を見ず、高瀬川に面せる方面は絶嶂をなし、黒部に向ふ裏面は傾斜稍緩かなれども所々に矗々たる怪岩突起せり、コマクサ、オヤマノエンドウ、タカネスミレ、イハウメ等一面に開花せり、岩は全く純白なる花崗岩なれば、其の高山植物とのコントラストは實に絶妙なり。

氣壓計は三千百米突を指示すれども少しく高きに過ぐるが如し、時は午後二時三十分。

越中黒部川の方面に一小湖を發見せり、大部分雪を以て埋められたれども、附近の殘雪融解せば的礫たる一の明鑑を見るべし、これに五郎の池と命名す。

一五、雪下の白骨、

五郎岳の南に續いて一峰あり、類藏は黒岳なりといへども、五郎岳の一部ならん、稍低く山形も奇拔ならず、吾等は頂上に登らずその側面（西北方）を迂廻せり、之れより南方の山稜は、岩石峨々として進むこと困難なれば、此度は東南方山側を迂廻す此處に二大殘雪あり、又附近に小

舍の跡あり、又白骨の累々たるを見たり、之れを類藏に質せしに獵師共の此山中にて熊を獲しとき他に水なき爲め此所にて處分するにより、熊の白骨を捨たるなりと、此地に露宿せんとせしが南風を防ぐこと能はず、且つ大殘雪の傍らにて夜寒凌ぎ難きを案し、猶南走して適當の地點を求むる事となせり。

日本アルプスの山稜、草なく岩塊砂礫の磊々たるところを南走す、行けども行けども露宿すべき一小平地だになし、時は既に午後五時。

日は將さに暮れなんとす、速に露宿の用意をなさざるべからず、時に此處ぞと思ひしところなきにあらざりしも、或は風を防ぐ能はず或は飯を炊るべき雪を得ること能はず。

時は既に六時に達して未だ適所を得ず、日本アルプスの脊梁は何處までも同一樣に蜒々連續南走して果しも知れず、今は足に任せ力の限り一上一下危險を犯して進む程に、六時半に漸くシノハチ（火打ヶ嶽なり）に達せり、右方の谷を見れば二三個所に大殘雪あり、附近高山植物の滿開せるあたり稍々平坦なるを見て、今宵はこゝに一夜を明かすに決し、越中方面の谷に下りて小舍を作る事となせり、ハヒマツの外に何物もなければ、其枝にて周圍を圍ひ、テントを張りて雨露を凌ぐ。

一六、日本アルプス嶺上の深夜、

日沒頃より濃霧襲來、咫尺を辨せず、風さへ加はりて暴風雨襲來の徴あり、一同安き心もなく盛んに火を焚きて寒さを防ぐ、皆疲れ果てゝ默然一語をも發するものなし、高山の氣象は變幻常なく測るべからず、夜九時頃に至り風全く止み霧も晴れて頭上に近く星影の閃々たるを見る、一同寢入りしは午後十時。

一味の高寒紫府より來り、短夢忽ち破る、焚火も何時しか消え、既に翌午前二時なりき。

月光さながら白晝の如く、谷間の殘雪は一きは白し。

日本アルプス絶頂に於ける、月夜の光景如何……余は草鞋を着け有らん限りの防寒具を纏ひ、死せるが如く熟睡せる二人の人夫の爲めに火を焚き、密かに火打ヂ嶽の絶頂に向ふ。

看よ、火打ヂ嶽絶頂に於ける月光の夜景を。

南方かすかに、殘雪の白きはこれ久戀の鷲羽嶽……其の左に巨人の如き黑影は、之れ海抜一萬四百八十九尺の槍ヶ嶽、昨夏其の頂を究めてより、既に一年。

北方に蜿蜒たる山稜、五郎は左か烏帽子は右か、何れを夫れと識別すること能はず。

眞黑なる高瀬川の深谷、谷底には何者か潜める潺湲たる流聲を聞かず、白き流れをも見ざれども、黑部川は今も北方に流るゝならん。

風は全く死し、草も亦眠れり。

海抜一萬尺の此絶頂、周圍數十里の非人圏、生氣あるものは獨り吾のみ。

既に意慾の羈絆を脱せし此刹那の吾れ、神か、はた仙か。

此高遠雄大なる月夜の光景に接し、暫時は恍惚として歸るを忘る。

夜寒身に沁み吾れに歸れば、凄陰幽寂久しく立つ能はず、乃ち露宿地の火を目的として小舍に歸る。

既に月夜の光景を見たり、日出の大觀に接せざるべからず、午前四時再び頂上に登る。

高山の頂上に於ける日の出の光景壯觀比すべきものなし、如何に其有様を形容するも實際の萬一を他人に想像せしむること能はざるべし、一度經驗せし人ならざれば語るに由なし。

看よ下界は一面の雲の海、膨湃たる白霧の怒濤……空は一面に暗紫色、……東天には金泥を流せる如き一抹の彩雲。

未だ暗き高瀬の谷底、しきりに杜鵑の叫聲を聞く。

露光量違いの為重複撮影

身邊を掠めて飛ぶ、幾群の岩燕、……

既にして五時は過ぎぬ、東天は著しく紅を潮す、時に東方蒼溟の内に、一點炬火の如きものあり、漸々大となりて遂には車輪の如き一大圓板となる、其色爛々として熔銅の如く紫金の如し、彩雲の幾層かを歴階して上る、光芒陸離、凝視する能はず。

周圍に環座せる泰山崇嶺、皆暗黒なる慢幕を撤し皆新たなる顔容を以て吾が脚下に稽首す。

一七、赤　岩、

午前七時裝を整へ今日も亦南走す、山稜を行くこと前日に異らず、海拔三千米突内外の山稜、雄渾は云はずもがな、何れの方面を顧望するも、全く平地を見ず、實に我國に於ける深山中の深山なり。

前日、烏帽子嶽より來りしところに比すれば、險惡數層を加ふるが故に、行路の困難名狀すべからず。

南走すること約半里程、右方黒部の谷に稍平坦なるところあり、中央に一小池を發見す、C字形をなす、周圍には殘雪多く、高山植物の附近一面に開花せるあり、雪と花とに包まれたる一明

蓮華野陣場より槍ヶ岳を望む

辻村伊助氏撮影

赤岳附近より藥師岳を望む

辻村伊助氏撮影

露光量違いの為重複撮影

身邊を掠めて飛ぶ、幾群の岩燕、……

既にして五時は過ぎぬ、東天は著しく紅を潮す、時に東方蒼溟の内に、一點炬火の如きものあり、漸々大となりて遂には車輪の如き一大圓板となる、其色爛々として熔銅の如く紫金の如し、彩雲の幾層かを歴階して上る、光芒陸離、凝視する能はず。

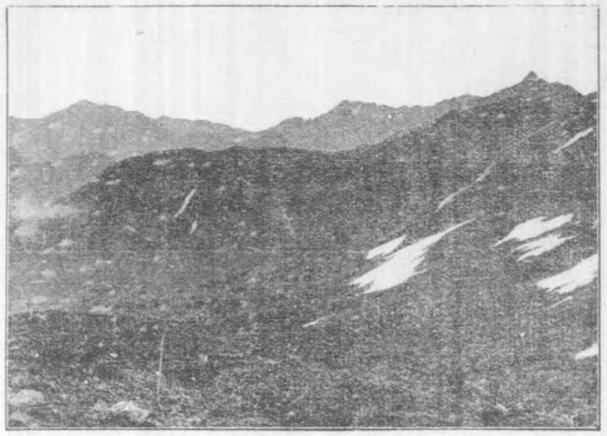
周圍に環座せる泰山崇嶺、皆暗黒なる幔幕を撤し皆新たなる顔容を以て吾が脚下に稽首す。

一七、赤　岩、

午前七時裝を整へ今日も亦南走す、山稜を行くこと前日に異らず、海拔三千米突内外の山稜、雄渾は云はずもがな、何れの方面を顧望するも、全く平地を見ず、實に我國に於ける深山中の深山なり。

前日、烏帽子嶽より來りしところに比すれば、險惡數層を加ふるが故に、行路の困難名狀すべからず。

南走すること約半里程、右方黒部の谷に稍平坦なるところあり、中央に一小池を發見す、C字形をなす、周圍には殘雪多く、高山植物の附近一面に開花せるあり、雪と花とに包まれたる一明



蓮華野陣場より槍ヶ岳を望む

辻村伊助氏撮影

赤岩附近より藥師岳を望む

辻村伊助氏撮影

鑑、吾人は云ふべからざる風致を覺えぬ、余は其形によりて曲玉の池と命名せり。

露宿地より約二里餘にして、赤岩といふところあり、日本アルプスの主脈、此處に於て二支となりY字形をなす、左方に蜿蜒たるものは、鷲羽の峻嶺となりて槍ヶ嶽に連り、右方に聳ゆるものは何……高さ鷲羽に讓らず、黑部川の水源をなす一靈峰、北より望めば峯頭二裂鞍狀をなし一面に殘雪あり、其の崇高其の雄偉日本アルプス中稀に見るところ、しかれども頗藏もその名を知らず、地圖を探るも何れも實際に適せるものなし、後日研究の結果黑嶽なるを知れり。

赤岩に近づくに從つて、一歩は一歩より險絶、……惡絶……突兀たる巨岩を攀づるところあり、恰も劒背の如きところを渡るあり、或は絶壁を横過するところあり、岩石は悉く縱横無盡に龜裂崩壞せるを以て、足の接するところ手の觸るゝところ、岩角忽ち崩れ深谷に落ちて行くところを知らず、其の危險甚だしきに膽を冷やすこと幾度なるか數ふべからず、之れに比すれば戸隱の蟻の戸渡り八ヶ岳の小天狗、もとより物の數ならず、特に赤岩は其の名の示す如く、代赭色の絶壁をなし、附近には其の形槍にも似たる數條の危岩突兀として競ひ立てり、之れ必ずや斬魔の利劒。

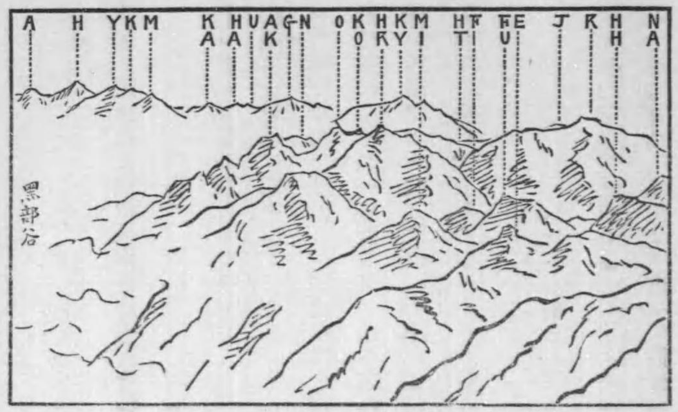
漸く赤岩に達しぬ、然れども登ること容易ならず、三人手を連ねて漸く登る、此の奇岩怪石の間

に、シコタンサウ、クモマグサ、ミヤマオダマキ、イハヒゲ等の珍花盛に開花せるを見る、此赤岩附近にありし御花畑の如きは實に美觀を呈し、黒百合の一面に開花せるを見たり、又確かに一新種と思はれし、イハワウギをも見ぬ。

一八、長之助草、

險惡極まりなき絶巓を登りて漸く赤岩の絶頂に達す、右すれば黒嶽の高嶺左すれば鷲羽の連脈、こゝ赤岩の絶頂に於て又々高山植物の珍種を得たり、珍種とは何……長之助草……長之助草は矮少なる灌木にして、其の葉其の花の美山草中の尤物、培養の困難に至りては高山植物中の難物と稱せらるゝもの、歐州のアルプス亦之れを產す。

本邦にありては越中立山に於いて始めて發見せられしもの、後ち八ヶ岳、鍵ヶ嶽、槍ヶ嶽等に於て見出されぬ、余は各地の產地を悉く踏破し、此所に第五の新產地を得たり、而して此地の如く盛んなる繁殖をなせるは他に見ざりしところ、イハウメ、チシマノアマナ、チシマキヽヤウ等と混生して花將さに盛んなり、又此附近を南に降りしところに於て立山ギンバイを發見す、余は昨夏本種の新產地を燕嶽、槍ヶ嶽等に於て發見せり。



黒ヶ岳最高點より(三角標下あらず)

A	旭岳	HR	針木岳
H	白馬岳	KY	鹿島槍岳
Y	鐵岳	MI	南澤岳
K	不歸岳	HT	針木峠
M	南岳	F	舟窪岳
KA	唐松岳	FU	不動岳
HA	八方尾根	E	烏帽子岳
U	牛首	J	祖父岳
AK	赤澤岳	R	鹿島槍岳
G	五龍岳	HH	不動澤岳
N	鳴澤岳	NA	七倉岳
O	大スバリ岳		
K	小スバリ岳		

一九、雲之平、

赤岩の絶頂より前面（南方）の谷を隔てゝ一大高原を見る、海抜七千尺以上もあらん、低凹の地には所々に殘雪多く、廣袤數千百町歩、類藏曰く之れ雲の平と、雲の平……雲の平……何ぞ其の名の奇拔なるや。

類藏は如斯處に家を作りて住まばやと云ふ、されど此地に家を作らば一丁の豆腐を求めんにも數日間屢々身命を賭して、深山幽谷を往復せざるべからず、此の雲の平の南にあたりて、一山あり殘雪甚だ多く又一靈峰なり、余は之れに旭嶽と命名す。

赤岩の絶頂より左方に少しく降りしところに、タカネスミレの一面に開花せるあり、滿地鮮黄色を呈す、余は未だ斯の如く本種の盛んなる繁殖せる所を見ず。

二〇、鷲羽岳、

鷲羽嶽は實に雄峻なる山奇拔なる山男らしき山なり、未だ曾て登山家採集家等の一度も足跡を印せし事なき山、赤岩より約一時間餘にて達することを得、余は高山植物としてはクモマグサの稀

品を得たるのみ、他は此の附近の山々のフロラと甚だしき相違を見ず、北方赤岩方面より來るときは絶頂に達する以前に於て約百米突許り低くき一峰を越えざるべからず、これ鷲羽の一角なれども峰頭爲めに二分す、由て余は小鷲と命名す、小鷲は山體を構成せる岩石、全く鷲羽の最高點と異なれり。

鷲羽の絶頂より、南方眼下に又小湖水を發見す、こは全く一噴火口、鷲羽の下方、高瀬川の水源地方に、湯俣と稱し、霰石を産する温泉の湧出するところあり、此火口と至大なる關係あるものなるべし。

鷲羽嶽の噴火口、恐らくは何人の耳にも新らしき事實なるべし、余が親しく地體の構造と岩石の性質とを見るに、鷲羽の頂上を構成するものと大差あるを見る、余は此の火口は鷲羽の一部に噴出せしものにて、決して鷲羽が此の火口よりの噴出物にて、成れるものにあらざるを斷言す。

海拔九千五百五十七尺と呼ばれたる鷲羽嶽の絶巓、槍ヶ嶽と南北相對し、呼べば將さに應へんとす、猶飛騨越中の方面は悉くこれ人跡なき深山幽谷、峰は皆ハヒマツの外に樹木なく赤裸々たる岩山、谷は皆雪を以て埋められたる深谷なり。

余は各地の高山に登攀せしこと幾度なるかを知らざれども、未だ如斯壯大なる景象を見ず、天下

の偉觀と稱せられたる越中立山の眺望も、此所の展望に比しては三舍を避けざるを得ず、何れの高山にても一方に多少平地あり、即ち人界を見るに、此の鷲羽の絶頂に於ては雲の平の奇拔なる高原を見るのみにて殆んど全く平地を見ず、九天を摩するの石劍四圍に攢簇し、八九千尺に出入する高山にて地圖記錄等になきもの多し、我が筆短かく其の萬分の一の形容をも爲すこと能はざるを遺憾とす。

二一、意外の衝突、

日本アルプス地方に出入すること三十餘年、今回進んで余の爲に東道をなせし類藏も、此の附近に來りては、其の名さへ知らざる山々のみにて、遂に笠ヶ嶽に就きて、余と爰に一大衝突をなせり。

鷲羽嶽の西南、深谷を隔てゝ一大連脈あり、殘雪非常に多く、峰頭廣くして何等の奇趣なしと雖も、亦一名山たるを失はず。類藏は之れを指して、笠ヶ嶽なりと云ふ、余は之を非認し、今白雲に蔽はれて見るよしもなけれど笠ヶ嶽は此連脈の彼方にあり、曾て立山の絶頂より、或は槍ヶ嶽の山巓より遙かに望みし笠ヶ嶽は形容の端正なる秀峰、今目前に見るものゝ如きものにあらず、

愛山家ウエストン氏が、屢々登山を企て、三度目に始めて頂上に達することを得たる笠ヶ岳は、如斯不格搆のものにあらず、余は信ずるところを主張し、類藏も其の多年の經驗より誤りなきを云ふ、あゝ海拔九千五百六十尺の高峰、これ日本の一名山にあらずや、しかも之れに就きてかゝる爭を生ず、日本アルプスの研究せられざること如斯、實に我が邦一個の愛山家なきか、眞の登山者なきか、笠ヶ嶽に就きては、余の言決して誤らざるべし、兎に角に笠ヶ嶽は余等の目前に立てり、此日本アルプス縱走は、烏帽子嶽より、南走して笠ヶ嶽に達し、飛騨に下るの計劃なりしも、人夫に病者を生せし爲め、荷物の一部を途中に殘し置きたれば、再び高瀨川の谷に戻らざるべからず、我が久戀の笠ヶ嶽を眼前に見て、空しく歸らざるべからず、余は戀々として此地を去るに忍びず、しかも如何ともすべからず、遂に日本アルプス縱走の終端を鷲羽となし、午後二時再び前路を返る。

二二、天界の悲劇、

日本アルプス地方、夏日の氣象は日々殆んど一定せり、早朝は白雲濃霧下界に沈澱して、山上より伏瞰するときは一面の綿の海をなし、各高山は中腹以上頗る鮮麗に輝々たる日光眼も眩せんば

かりなり、展望の壯絶此時に比すべきなし、時次第に移れば凝固せし如き綿の海は、次第に混亂湧沸して漸々上騰し、快晴の日に於ては皆雲散霧消すれども、四方山色次第に濁り遠距離の山々は薄き濛氣を以て蔽はるゝに至る、而して天候不良の時にありては、漸々上騰する白雲は順次其の量を增し、天地白盡風雨之れに加はり慘憺たる光景を現出するに至らん、之れ高山頂に於ける日々一定せる氣象の概要なり。

此日も午前は快晴稀れに見る好日和と信せしに、鷲羽に來りし頃は白雲次第に增加し、笠ヶ嶽方面の如きも不明となり、類藏と余との間に意外の衝突を來たせり。

午前一時縱走を中止し、前夜の露宿地に向ふて歸る、午后四時頃より天候次第に險惡となり、越中方面に團々たる雷鳴を聞く、人夫は夕食の準備を爲さんとして急き小舍に歸る、余は小舍より一里許りの處にて寫眞器の三脚を遺失せしかば、之れを求めんとして意外の時を費せり、小舍に近づきし時轟然たる銃聲を聞く、

一發……二發……三發

嗚呼天界にも亦此慘劇ありや、

吾人は之れを云ふに忍びざるなり、

……

日は全く暮れ雨さへ降り出したるとき、彼方の岩蔭此方の叢中冲々たる悲哀の聲を聞く、之れ母を失ひし雷鳥の雛の母を慕ふて寒に鳴くなり。

思へば無慘、哀音耳に殘りて眠る能はず、轉輾反惻す。

二三、霧中の怪像、

此日疲勞甚しく、人夫は忽ち眠れり、

翌午前二時、焚火の消えたるに目醒めぬ、偃松の枝を加へて盛んに火を焚き、天候如何にと、小舍を出でゝ前面を見しに、意外……意外……

白濛々たる霧中に怪物あり、高さ數間スックと立ちハッタと睨め付けたり。

あまりの意外に驚きて、聲さへ出でず、

靜かに凝視すれば手を動かし足を擧げ、其の態余の一擧手一投足に一致せり。

嗚呼妖にあらず怪にあらず、小舍の焚火にて余が影の前面白霧に映せるなりき。

所も所時も時、一時の驚きに心悸止まず、足さへ戰くかと思はれたり。

露光量違いの為重複撮影

辻村伊助氏撮影

高瀬入り（シシノ口）

此行を終りし後此事を遇ふ人毎に語りしに、或人は乘鞍にて余と同一の事を見たり、或人は駒ケ嶽にて同一の經驗を爲せりと云へり、されば之は稀有の現象にはあらざりしなり、此夜の出來事余に於ては空前なりしなり、其の後また如斯事に遇はず。

二四、高瀬入り、

霧中の怪異の怪にあらず、妖にあらざるを悟り再び小舍に歸る、人夫も亦起き出でたれば共に火を焚き天明を待つ。

午前四時東方の白きを見る、人夫が朝食の準備を爲せる間に、余は今朝も亦絶頂に登りて、日出の大觀を見る。

午前六時半、テントを徹して歸途に就く、途中前日の足跡を蹈んで濁りの小舍に歸る、

午後二時半、濁りの小舍に着す、

時未だ早けれども此の日葛の湯まで至らんこと六ヶ敷く、途中にて露宿せんよりは、前夜宿せし此所に止まるに如かずと、再びこゝに一夜を明かさんと決しぬ。

人夫を休養せしめ獨り附近幽谷の勝を探る。

露光量違いの為重複撮影

此行を終りし後此事を遇ふ人毎に語りしに、或人は乘鞍にて余と同一の事を見たり、或人は駒ケ嶽にて同一の經驗を爲せりと云へり、されば之は稀有の現象にはあらざりしなり、此夜の出來事余に於ては空前なりしなり、其の後また如斯事に遇はず。

二四、高瀨入り、

霧中の怪異の怪にあらず、妖にあらざるを悟り再び小舍に歸る、人夫も亦起き出でたれば共に火を焚き天明を待つ。

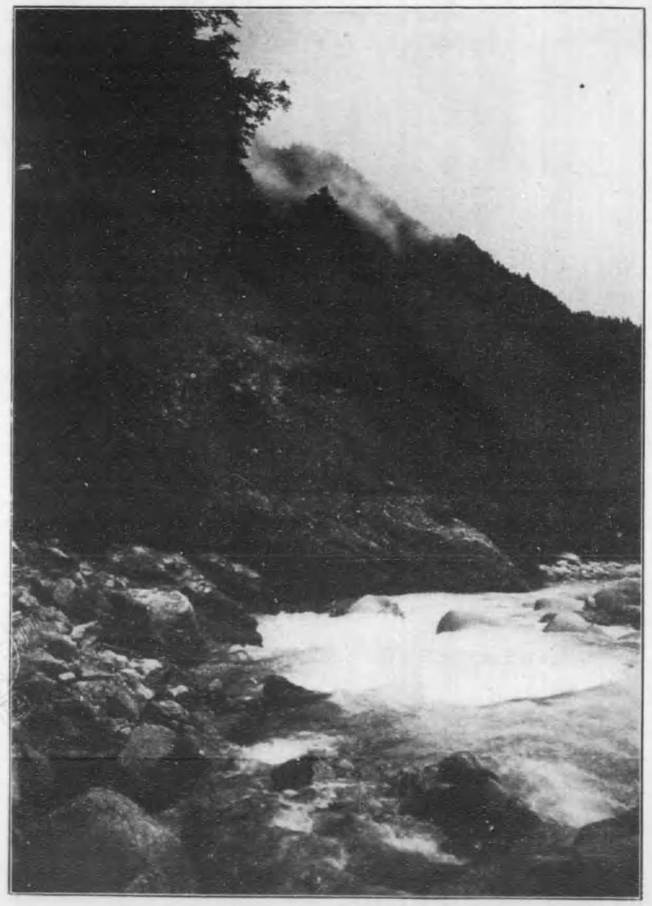
午前四時東方の白きを見る、人夫が朝食の準備を爲せる間に、余は今朝も亦絶頂に登りて、日出の大觀を見る。

午前六時半、テントを徹して歸途に就く、途中前日の足跡を蹈んで濁りの小舍に歸る、

午後二時半、濁りの小舍に着す、

時未だ早けれども此の日葛の湯まで至らんこと六ヶ敷く、途中にて露宿せんよりは、前夜宿せし此所に止まるに如かずと、再びこゝに一夜を明かさんと決しぬ。

人夫を休養せしめ獨り附近幽谷の勝を探る。



辻村伊助氏撮影

高瀨入り（ヨリノ日）

高瀨川及梓川の上流は、日本アルプスの連嶺に沿ふて、前者は北走し後者は南流す、共に幽邃なる深谷を爲せども、梓の谷は稍々廣く流域に多少の坦地あり、之れに反して高瀨の谷は兩岸壁立し殆んど河岸に寸尺の餘地なく、一の峽谷を爲すと稱するも可なり、從つて河身狹く水深く到處に深潭を見る。

登山者は一尺の高さを爭ひ、一歩の先を競ふて、白雲迷ふ山頂をのみ目懸けて登れど、日本アルプスの美は、森林、幽谷の間に於ても猶ほ見ることを得べし、溪流の奇勝は山頂の展望と共に吾人の感興を惹くこと尠なからず。

特に森林の霧溪流の雨に至りては、詩題としてはた畫題として、幾多傑作の材料となすに足る、此森林の下溪流の滸草を蓐とし枯草を焚きて一夜を明すが如き、一萬年の太古の儘なる生活は二十世紀の今日他に於て見る能はざるなり、人は歐州アルプスの奇を說き勝を稱すれども、山頂に近く登山鐵道あり、到處宏壯のホテルあり、氷雪の上には靴痕縱横せり、斯の如き俗境と、日本アルプスの神聖の境とは、日を同じうして語るべからざるなり。

頃者大林區署に於ては、此の谷の樹木を調査し、林道を開きて此欝々たる森林を伐採せんとす、明科驛には製材所を作りて、梓川の林木の製板を試みんとす、

嗚呼自然は破壊せられんとす、靈境は殘賊せられんとす、自然の破壞者に向て、吾人は抗議するの權なきか。

翌早朝高瀨川に沿ふて下り、葛の湯を經て大町に達せしは正午なりき。

乘鞍行

一、靈峰乘鞍、

乘鞍紀行のはじめに、先づ乘鞍の大要を語らん、日本アルプスの連嶺、其の北端白馬の群峰より南へ南へと走り、將さに其の南端に盡きんとする信飛境上に於て大飛躍を爲せり、たとへば渚に寄する荒波の岩に激して湧沸するが如く二個の大波濤を擧げぬ、其の一は御嶽にして他を乘鞍の群峰とす。

乘鞍は日本アルプス中の雄峰、海拔三千二十六米（九九八六尺）一萬尺に達せざること僅に十四尺、信州南安曇、飛驒國吉城、大野、益田の四郡に跨り、千山萬嶽の表に屹立し、御嶽と南北相對して互に讓らず。

峰は幾多の峰巒起伏す、これ何れも皆乘鞍火山の舊火口壁或は中央火口丘に外ならず、單に乘鞍と呼ぶも、實は烏帽子嶽、鶴ヶ池火山、摩利支天、一ノ池火山、高天ヶ原、十石嶽等數多火山の一大集團にして、乘鞍火山群と呼ぶべきものなり、此等の峰頭北より南へ連亘し、其間に一ノ

池、鶴ヶ池、龜ヶ池、五色池、大丹生ヶ池、アザミ池、男池、女池、大池等の火山湖あり、峻秀奇拔なる峰巒の間に、神秘的なる火口湖を配せる靈峰乘鞍、路嶮なりと雖も必ず一度は登らざるべからざるの山。

二、乘鞍の怪異、

他の日本アルプス中の高峰に比して、乘鞍登路の平易を云ふ者多し、然れども乘鞍に登りて、十分其の目的を達せし者尠し。

余の識れる山嶽會員等にて、此山に登りし者は或は雨に惱み、或は疾病に苦み或は路に迷ひ或は雷に擊たれ備に困難をなめざるものなし、五名の學生の凍死せることあり、二名の某美術學校生徒の行衛不明となれる事あり、五ノ池附近にて凍死せるものあり、室堂附近にて斃れたる者あり、白骨温泉浴客の凍死せるは昨夏の事なり。

本邦の山嶽中、乘鞍の如く死傷者を出せる山は、他に比類尠なし、之れ山靈の俗者を近づけざるによるか、登路の險絶するによるか、實に怪異の極と云ふべし、恐しき者見たきは人情、余の好奇心はいたく刺激せられぬ。

三、脾肉の歎、

乘鞍行を思ひ立ちし翌日、某新聞に、

『颶風の進路、昨午前琉球群島に襲來せる低氣壓は、北東の方向を取りて進み、午後二時九州に達し、之れより朝鮮方面に向ふて進むか、東北に折れて本州を襲ふか、中央氣象臺にては警戒中なり、もし東北に折れなば、本州は再び颶風に襲はるなるべし』

とあり、登山者の最注意すべきは天候の如何にあり、高山の嶺にありては、快晴なるときは、之れ實に天國、極樂淨土、之れに反して雨降らばさなから地獄の苦を受けざるべからず、今乘鞍行の首途にあたり、天候の異變を聞く、余は出發を躊躇せざる能はず。

翌日の某新聞の報導によれば、「乘鞍嶽に降雪あり、山麓地より山嶽の白きを望見すべし」と、今行かんとする乘鞍、特に八月の降雪、如何に吾人の好奇心を挑發せしよ。

しきりに警報を傳へられし、颶風は果して襲來せり、

驚くべき多量の雨をもつて。

果然、諸川汎濫、山嶽崩壞、流失、浸水、溺死、等實に忌はしき熟語は二號活字を以て天下新聞

紙の全面を蔽ひぬ。

四方八方交通杜絶、

雨は霽れ、風は止み、天候全く恢復すれども、出づる能はず、脾肉を撫し、天を仰で悵然たるのみ。

四、安曇野、

（明治四十四年八月九日長野發）

發程の第一日は雨、特に所々破壞せる鐵路、早且長野を出で薄暮松本に入る。

第二日、松本を出でしは、眠れる市街を被ひし朝霧の深志城天守の彼方に消えし頃なりき、

松本の市街を西に去て奈良井川を渡れば、左右一面に稻田よく開け、狹隘なる信州の山谷の感尠く、所謂安曇野の何處にか關東平原に似しところを認む、北安高瀨の谷の遙かに開けたる外は、遠く峰巒四周を繞る、特に西方平野の末に日本アルプスの偉容嚴として聳ゆる有樣、趺岩なる高原の景趣を認むべし。

梓の谷の奥深く、晴巒雨峰を壓して、雲間に聳ゆる峻峰、殘んの雪に雲母の色あり、之ぞ今吾が行く

銀鞍白馬の空際に奔騰せる乘鞍の峰。

波多の松原にかゝりし頃は梢にそよく風もなく、西方日本アルプスの前衛、常念　蝶ヶ嶽の紫嵐の色を仰ぐ時、笠にこぼるゝ蟬時雨、人は木蔭を尋ねて行き馬は爪さで汗に濡れぬ、

毒々しげなるのうせんかつらの花の、一つ二つ道のほとりに落ち散りて塵にまみれたる、見るからに苦熱堪え難し。

五、島　々、

梓川を渡りて島々に入る、往路を顧望するも前程を望ひも、そゝり立つ兩岸の絶壁、梓川の深淵には藍靛をたゝへ奔湍雪花を飛ばす、峰は頽嵐峭綠人の衣袂を青殺す。

こゝには既に秋立つか面を拂ふ涼風水より冷なり。

安曇野の一部を横過し來れる者の眼には風物改まり景象頓みに異れるの感深し、平野にありては何處までも、人力自然を征服し、自然を驅使し、溝渠縱横に通し、電線蛛網の如く、電燈光り青く、苦しげに叫ぶ汽笛、山を貫く隧道、節面白き乙女の唄、鍬取る農夫の腕にも精氣みちみち、往き來るさの人々は滿面に得意の色あり、されと一度此地に來れば既に日本アルプスの領域、人

の力は殆んど認むる能はず、自然の威力嚴として犯し難く何處までも吾人を威赫す、迂餘曲折せる細徑僅かに山腹に通じ、人も馬も恂々として行けり、暴雨一度至らば跡をも止めざるべし、家は溪側の坦地に立てり、溪流一度怒漲せば影をも殘さゞるべし、人は大自然の尊嚴を傷けざる範圍に於て蟄爾として動けるのみ、

日本アルプスの中部槍ヶ嶽穗高を探らんとせば、此地より右方穗本峠を越えて上高地に出づべきなり、乘鞍に向ふ余は猶梓川の谷を溯らざるべからず。

六、雜食橋、

信濃奇勝錄に

雜食橋は梓川にかゝりて、筑摩安曇両郡の堺にあり、橋の長さ十八間、はね木四重にして梁柱なし、南は橋塲村關隘(せきしょ)ありて、飛騨への間道なり、北は島々村、むかしこゝに岩と云ふ女あり、家貧にして人に仕へながら此地に橋を架けんことを願ひ、朝夕の食料我が食ふべき米穀をばのけ置きて賣しろなし、平生にまづき物ばかり食し、其のつもりし金錢にて橋を架けしと云ひ傳へたり、

又一說には、川の彼方の戀人の爲めに架せしとなん、前說は二宮宗の隨喜の淚に咽ぶところ、後說には戀故にヘレスポンドの海峽を泳ぎしてふ、シルレル入神の長篇、「ヘーロー、ウンド、レアンデル」を思ひ出だされて、いかに其詩的なるかを思はしむ。

今は島々稻核間には、梓川の絕壁に新道開け、

白堊もて塗れる、洋風の稻核橋を架したれば、又舊道を行く者なく、雜食橋の奇も探る者なし、

殺風景なる白堊のつり橋、折りから聞ゆる呂律もなき馬車の笛、思はず面を背け耳を蔽ひぬ、あはれ世は實利實益の外に何物をも認めず、人はパンの外に何物をも味ふ事を知らず齷齪として�の餘裕なきぞ悲しき。

七、稻核(いなね)、

島々より稻核までの間、距離を云へば僅に一里に足らず、時を云へば將さに一世紀を隔つ、安曇野より一度梓川を渡りて、島々に入れば、風物こゝに一變す、島々より再び梓川を渡りて、稻核に到れば、風物再變す、之を彼の風俗に見よ、之れを彼等の言語に聞け、幽谷の間紅塵絕え、平野の如く輕浮の態なく、朴野愛すべきの風あり、山間の一小區、路を狹める陋屋二三十、天地

森閑として、路に車聲の轢轆を聞かず、裝をかゝげて走る行人なく、二三の牡牛、大道に横はりて靜に草を嚙めり、無心にして岫を出づる白雲悠々たり、暦日なき山村、特に夏日の長きを覺ゆ。

此處にて笠と莫蓙とを求め、荷を人夫に擔はしめ、大野川に至らんとして、梓川の谷を進む。

八、梓の谷、

稻核より梓川の深谷に沿ふて進む、槍ヶ嶽其のピラミットの尖頭に、落ちたる露の一滴、梓川の源をなし、常念、蝶ヶ嶽、或は穗高の溪水を集め、上高地深林の間を流れ、夫より千山萬嶽の内に入り、山に壓せられては深潭をなし、岩に阻まれては激湍となる、上高地稻核間に於て、實に峽流の怪奇を極む、其の両岸の奇岩怪石、人の善く到る處ならんには一岩に名あり一石に稱あらん、此溪谷、春ならば躑躅、燃ゆるが如き紅雲絶崖にかゝり山腰に纏ふ、其の美如何ぞや、秋ならば紅葉、二月の花より紅に溪水爲めに眞紅の色あり、瀏々に織なす綿繡は、げに蜀江のそれならん。

五領澤の一茶亭に憩ふ、

主婦曰く、客は白骨に赴くならん、時既に午下一點鐘行を急がざれば途に暮れなん、河岸の難道暮夜行く能はずと、余は乘鞍に上るもの大野川に向ふよしを告げたるに、主婦慨然として眼を圓にし嗟歎して曰く嗚呼又暴風雨到らん、人の登山するとき必ず山麓に異變あり之れ鞍乘の常なりと、余しきりに彼を慰撫して去る、然れどもこの主婦の言遂に籤をなせしぞうたてき。

九、大野川、

稻核より二里弱、一支流左より來り梓川に會す野麥街道は此の流に沿ふ、余は此の支流を渡るこゝを奈川渡と云ふ、路にはかに狹細溪谷一層幽邃山容水態益々奇なり、一歩一景殆んど應接にいとまあらず、前川渡にて梓川に分れ前川に沿ふて進む、徑のほとりにシナノナデシコ、ミヤマウヅラ、ミヤマモヂズリ等の開花せるあり、大野川に入りしは僅に人顏を認め得るの薄暮なりき、前川の岸に沿ふて二三の人家あり、實に幽谷の僻地人は皆蒲衣鬻食、附近には數歩の石田をも得ること能はず一粒の米をも產せざるなり、此地はもと白骨に通ずるの舊道なりしを以て曾て旅舍を營めるの家あり鶴屋と云ふ、今は營業を爲さずと云ふを强て一泊を求む、夜に入りて霧深く午后九時寢に就くの前、前庭に出でしに白濛々たる濃霧殆んど咫尺をも辨せず、唯暗中近隣に人語

を聞くのみ。

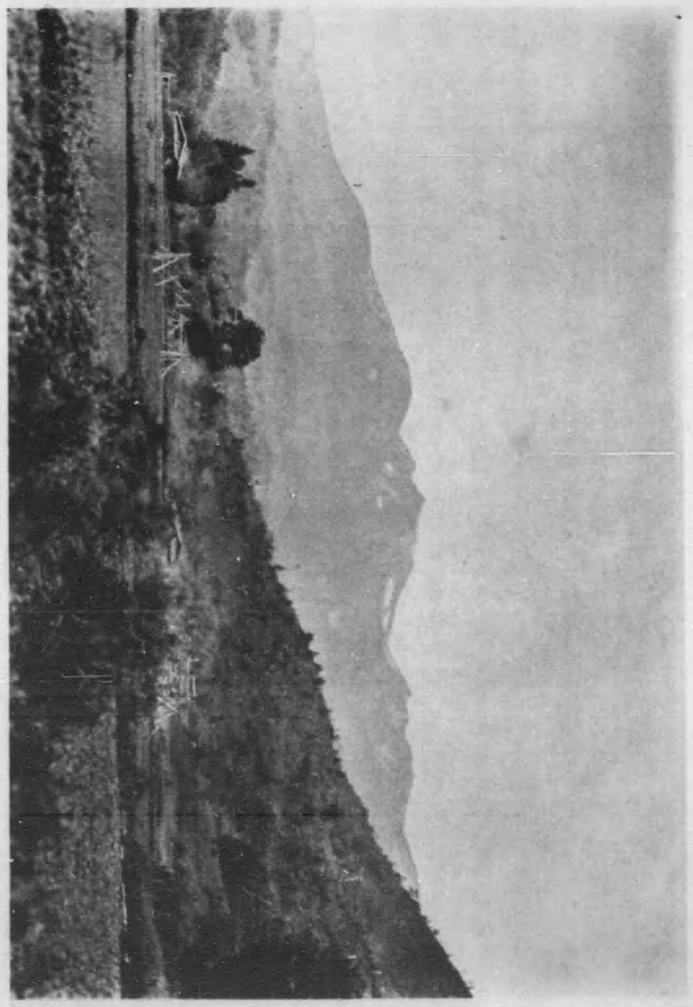
翌午前二時、前宵の濃霧の爲めに、しきりに天候を念となし寢に就きしかば、溪聲を雨聲と誤まり、雨かと驚ろき戸を排して出づれば、水の如き十五夜の月光さながら白晝のごとく、星斗爛々たり。

一〇、番所

朝來快晴、午前五時半出發六時番所に達す、番所は即ち乘鞍の裾野一帶の熔岩臺地にして高原を爲す、大野川の地殆んど石田瘠畑だに見ること能はず、故に夏季は此の高原に來り小舍を掛け蕎麥を作り、蠶を養ふて生業となす。

こゝにて始めて乘鞍の全容を仰ぐ、拭ふが如き碧空に象嵌せしが如き乘鞍の靈峰、山容の雄偉比類少なし、旭日に映せる絶巓は其の色紅玉の如く、谷に殘れる千古の雪閃々として眩ゆきばかりに輝きぬ。

前川の川上に美しき虹霓現はる、人夫は朝の虹は雨天の兆なりと云ふ、されど天に一片の雲烟なく、所謂日本晴れ登山日和勇躍して進む。



乘鞍岳

千石平より望む

一一、アーラの小根、

番所より一溪を渡れば千石平と呼ぶところあり、一面の蕎麥畑相連る、白き蕎麥、赤き鬼百合、

千石平を經て金山と云ふにかゝる、附近一面に鑛滓の散布せるを見る、往昔武田信玄が銀を採掘せる大鑪鑛山の跡なりと云ふ、此の鑛山の盛時には此の地に千戸の人家ありしとかや、其の後乘鞍火山の大爆發ありて泥流の爲めに埋沒して廢坑となりしと云ふ、彼の白骨温泉の名は泥流中に埋沒せし白骨を堀り出すことあるによりて名づけたりとか、今は茅茨道を埋め古の夢の跡だに見ること能はず。

裾野の平野つきてアーラの小根と云ふにかゝる、頗る急坂。

背より照りつくる烈光、前には夏草の香、我も人も滿身汗に濡ふ、

漸く登り盡くせば地域全く喬木帶に入りッガ、モミ等の密林天日を蔽ふて又炎暑の苦を知らず、

一難去て一難來る、林下一面の熊笹細徑定かならず幾度か右左と路を失せり、小大野川の水源たる小溪を渡ること二回、行けども行けども一樣なる森林一面の熊笹展望の快なし、登路は緩漫な

る傾斜歩行左程困難ならざれども、陰欝堪ふべからず。

木の根に觸れて左方なる草莊の緒プツ、リ切れぬ、登山の途中不思議の凶事、之れ何等の前兆ぞ。

一二、猛雨來、

喬木帶中にありては植物の分布極めて平凡、唯だ闊科植物等に二三の珍種を見る、アリドウシラン、ヒメミヤマウヅラ、コフタバラン、ハリガネカツラ、キバナノコマノツメ等は余の注意を惹けり、十時五十分、海拔既に二千二百米の地に達す地域全く喬木帶を脱して灌木帶に入る、四邊の草木皆矮少にして高さ人身に達せず、ベニバナイチゴ、ツガザクラ、ガンカウラン等、灌木帶特有の植物は皆花を着けたり。

キングルマ、コイハカヾミ、チングルマ等滿地白黄紅紫百花絢爛頗る美觀を呈す、陰欝なる喬木帶に比して、景象の頓に一變せるを覺ゆ、十一時半、一面の偃松帶に入る、前面二ヶ所に大殘雪を見る、此の殘雪を見て始めて天界に入れるを感ず、雪は實に日本アルプスの標徴たり。

喬木帶を出でし頃より岳頂全く雲中に入る、四邊に現はれたる奇怪の雲霧、

天候俄然一變せり

折から飛驒方面より岳頂をかすめて飛び來る怪雲、或は群峰の如く或は怒濤の如く飛行矢よりも迅やく天候ます〳〵險惡、一種凄慘の氣人に迫る、たちまち發矢と、菅笠に打ちつけたる二三の雨滴、

猛雨來……猛雨來……

漠々たる雲霧全山を埋め咫尺を辨せず、瀧なす雨岩角に吼ゆる風の音全山爲めに震撼す。

今は一歩も進む能はず又退くに由なし、進退こゝに谷まり如何ともなすべからず、乃ち附近の偃松中に潜入し、用意のテントを出し雨中露宿の準備を爲す。

一三、怪しき叫聲、

降雨前より遙かに北方に聞えし雷鳴は漸々近づき、正午頃より猛烈無比なる雷雨となれり、高山頂の雷雨の恐しさは下界の人々の想像するところにあらず、電光と雷鳴との間に分秒の間隔なく、或は頭上に或は脚下に或は身邊をめぐりて、轟々闟々、其の雷鳴のたび毎に頭髪の絶頂より指趾の尖端に至るまで、一種の感覺ありて感電せるかと疑はる、如何に雷を恐れざる人も高山の